

マセスチー一橋公を確然外國の政法を採用して條約濟諸國と親睦の交誼を増進し且つ人民の利益を促るに爲め外國貿易を有智ふ施行し給へる日本隨一の國君たるを深く信するの故へふ余日本政府の永久有智ふ保續をへきを十分あるへき事を閣下ふ證して敢て遲疑する事なし然るふ貴國の俊秀至當の法(マ)法甚大の困難中ふ圍包さるゝの故を以てマセスチー大君の退隱し給へると云事を向後の不幸を招くふ當る事(文意明カク)あしと合衆國の政府を眞實ふ之の悲歎堪へざるへし

是を以て閣下マセスチー大君の再び其職を執る事を得て日本政府の統領よて存在せらるへきを閣下の盡力ふて速ふ告知し給へるへしと余只夫をのミを望むへし恐惶敬白

閣下の最從順謙遜の臣僕

ア、ル、セ、ポルトメン

(續通信全覽)

編者註 右書翰ニ對スル回答案左ニ附記ス

以書狀啓上いたし候然る我

大君御退隱之儀御承知被成御書狀を以老中へ懇々御申越被下且兼て不一方御配意有之候趣御厚志之段老中於て深感謝之至ふ被存其段老中より

大君へ言上被致候國歩艱難之場合如何にも鎮定挽回いたし各國從來之交誼益膠結いたし度固より企希所致候間尙御心附之儀も候ハ、御忠告有之度此段拙者とも御報可及旨我老中命ふ依り如此御座候以上

辰二月

- 杉浦武三郎
- 酒井對馬守
- 糟屋筑後守
- 石川河内守
- 江連加賀守

アルセホルトメン様

時機後レシニヨリ達セサル者ナリ

(續通信全覽)

一二六

二月二日 外國事務掛伊藤俊輔ヨリ
(二月二十四日) 同五代才助宛

一二六 明治元年二月二日(二月二十四日)

三〇一

神戸事件至急處置ヲ要スル旨申出ノ件

五代才助様

伊藤 俊 助

外國公使上坂之儀御尋越ニ相成直ニ英公使ニ相尋候處備前一件取極候迄之大阪ニ向テ一步も進み不申乍去横濱ニ罷越候乎其他所ニ參候義ハ難計との事ニ御坐候英公使曰自然各國公使備前始末不相決中他港へ罷越候るハ爲 朝廷甚不幸ナル事ニ付速ニ御處置相省候様御計ひ大急事と申事ニ御坐候固より此義之今般御改革 朝廷政府成權日本ヲ制伏スル事可出來哉否試ミ第一事よて此事速ニ相決申候上之各國公使政府ニ離附之心も可相決大機ニ有之候由噫仕居申候實ニ内外多端之時とハいへとも如斯ニ至るハ我

神州之利害ニ關スル事ナレハ嚴命速ニ被行所謂綸言如汗無之る之不相叶事ニ付此義急速京城へ被仰越兩三日次不出シテ御決答此地ニ可相達様宇公御出坂ニ相成居候得之被仰上可被下候備前一件決極相著不申内ハ何も外國向之事ハ所置相著不申ニ付右様御承知可被下候尙相決候へハ東久世公直ニ御出張瞬間ニ御處置時^(御アルカ)御待仕事ニ御座候其上よて公使等上坂相分次第可申上候最其中

精ニ御用意肝要ニ奉存候尙此後變態之事も御坐候得ハ即刻御通達可申上候先ハ貴答勿ニ閣筆

二月二日

一二七

二月二日

岡山藩家老日置帶刀へノ達書

神戸事件發砲命令者ニ割腹仰付ノ件

備前少將家來

日置帶刀

神戸通行之節行列に立障候由よて外國人ハ兵刃を加ハ剩逃去候亞佛人竝ニ公使に及發砲理非之應對ニ及不及如何ニ及妄動之所爲不行届之至ニ候即今更始御一新國事多難之折柄深被爲惱

宸襟就中外國御交際之儀之御國體ニ相拘候重大之事件ニ付宇内之公法ニ基不損

一二七

明治元年二月二日(二月二十四日)

三〇三

一二八 明治元年二月二日(二月二十四日)

三〇四

皇威至當之筋御履行可被遊

思召之處御時節柄をも不奉顧返る御恥辱を醸候儀重疊不容易罪科ニ付發砲號令之者各國見證を受可致割腹旨被仰付候事

但罪科人體今日カ七ケ日を限兵庫表に護送致外國事務掛之者に可申出事

二月

編者註

本號第一行中「外國人」に兵刃を加に及ヒ末行ノ「今日カ七ケ日を限」ナル字句ハ本號ニ對スル岡山藩家老代池田靱負ヨリノ請書(一三二)ニ於テハ「英人に兵刃を加へ及ヒ」明三日カ五ケ日を限り「トアリ案スルニ本號文書ハ未決草案ニテ現實ニ達セラレタルモノハ一三二ノ字句ノ如クナリシモノト認メラル

一二八

二月二日(カ)
(二月二十四日)

岡山藩家老日置帶刀へノ達書

神戸事件ニ因リ謹慎仰付ノ件

備前少將家來

日置帶刀

神戸通行之節從卒共外國人ニ對暴發不容易所業ニ付被處罪科候全同人下知不行届之事ニ被

思召候間謹慎爲致置候様被

仰付候事

二月

一二九

二月二日
(二月二十四日)

岡山藩家老日置帶刀ヨリノ上申書

神戸事件發砲命令者處罰御請ノ件

去月十一日神戸通行之砌外國人ハ兵刃ヲ加發砲ニ及候儀ニ付公法ヲ以御處置可相成段之御達之通に付即今不可謂多難之御時節些少之事件より御安危ニ相拘大害ヲモ可醸出別る如何之至ニ付公論決定

一二九 明治元年二月二日(二月二十四日)

三〇五

一三〇 明治元年二月三日(二月二十五日)

三〇六

叡斷之上發砲號令之者罪科ニ被處候付早々可差出被
仰付候條

皇國之大事ヲ體任シ可奉安

宸襟候旨

御沙汰之趣謹る奉畏候右御請奉申上候以上

二月二日

備前少將家老

日置帶刀

一三〇 二月三日
(二月二十五日)

三職八局職制ニ關スル布告

二月三日

三職

總裁職 宮任之副總裁
公卿諸侯任之

萬機ヲ總へ一切ノ事務ヲ裁決ス

議定職 宮公卿諸
侯任之

事務各課ヲ分督シ議事ヲ定決ス

參與職 公卿諸侯
徵士任之

事務ヲ參議シ各課ヲ分務ス

八局

總裁局

神祇事務局

神祇祭祀祝部神戶ノ事ヲ督ス

內國事務局

京畿庶務及諸國水陸運輸驛路關市都城港口鎮臺市尹ノ事ヲ督ス

外國事務局

外國交際條約貿易拓地育民ノ事ヲ督ス

一三〇 明治元年二月三日(二月二十五日)

三〇七

軍防事務局

海軍陸軍練兵守衛緩急軍務ノ事ヲ督ス

會計事務局

戶口賦税金穀用度貢獻營繕秩祿倉庫及商法ノ事ヲ督ス

刑法事務局

監察彈糾捕亡斷獄諸刑律ノ事ヲ督ス

制度事務局

官職制度名分儀制選敘考課諸規則ノ事ヲ督ス

徴士 貢士

徴士 無定員

諸藩士及都鄙有才ノ者公議ニ執リ拔擢セラルル則徴士ト命ス參與職各局ノ判事ニ任ス又其一官ヲ命シテ參與職ニ任セサル者アリ在職四年ニシテ退ク廣ク賢才ニ讓ルヲ要トス若其人當器尙退クヘカラサル者ハ又四年ヲ延テ八年トス衆議ニ執ルヘシ

貢士

大藩四十萬石以上三員中藩十萬石以上三十九萬石
ニ至ル二員小藩一萬石以上九萬石ニ至ル一員

諸藩士其主ノ撰ニ任セ下ノ議事所ヘ差出ス者ヲ貢士トス則議事官タリ與論公議ヲ執ルヲ旨トス貢士定員アツテ年限ナシ其主ノ進退スル所ニ任ス又其才能ニ因テ徴士ニ選舉スヘシ

總裁

有栖川帥宮

副總裁 議定

三條大納言

同 同

岩倉右兵衛督

輔 弼 議定

中山前大納言

同 同

正親町三條前大納言

顧 問 參與

當分外國事務掛兼 小松帶刀

同 同

後藤象二郎

同 同

木戸準一郎

辨 事 參與

東園中將

同 同

坊城侍從

○外國事務

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

土肥謙藏
五辻大夫
玉松操
山中靜逸

山階宮
宇和島少將
東久世前少將
肥前侍從

岩下左次右衛門
町田民部
伊藤俊助
五代才助
寺島陶藏

○軍防事務

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

井關齋右衛門
井上聞多

仁和寺宮

烏丸侍從

吉田遠江
吉井幸輔
津田山三郎
土肥典膳

中御門大納言
安藝新少將
長谷美濃權介

○會計事務

一三〇 明治元年二月三日(二月二十五日)

三一四

判事同
同同同
同同同
同同同
同同同
同同同

戸田大和守
鴨脚加賀
三岡八郎
小原二兵衛
石山右兵衛權左

○刑法事務

督議定

近衛新前左大臣

輔同

細川右京大夫

權參與

五條少納言

判事同

溝口孤雲

同同

木村得太郎

同同

土倉修理助

○制度事務

督議定

鷹司前右大臣

輔 權 判 事 同 同 同 同
同 同 同 同 同 同 同 同

堤 右京大夫
松室豊後
福岡藤次
井上石見

(法令全書)

編者註 右職制ニ對スル職員ノ任命ニ關シ「明治政史」ニ「官員ノ拜任ハ漸次二十日ニ迄
フ」云々トアレハ必ラスシモ全部二月三日ニ任命アリタルニアラスト認メラ
ル尙右ノ内外交關係官ノ任命期日ニ關シテハ附録「明治元年帝國外交關係官
略歴」參照

一三一 二月三日 岡山藩家老代池田鞆負ヨリノ上申書
(二月二十五日)

神戸事件ニ因リ岡山藩日置帶刀處罰御請ノ件

備前少將家來

一三一 明治元年二月三日(二月二十五日)

三一五

神戸通行之節從卒共外國人ニ對シ暴發不容易所業ニ付被所罪科候全同人下知不行届之事被

思召候間謹慎爲致置候様被 仰出候事

右御達之趣奉畏候此段御請奉申上候以上

二月三日

備前少將家老代

池田 靱負

一三三 二月三日

(二月二十五日)

岡山藩家老代池田靱負ヨリノ上申書

神戸事件發砲命令者處罰御請ノ件

備前少將家來

日 置 帶 刀

神戸通行之節行列に立障候由ニる英人の兵刃を加へ剩へ逃去候亞佛人竝公使

に及砲發理非之應對ニも不及如何ニも妄動之所爲不屈之至ニ候即今更始御一新國事多難之折柄深被爲惱

宸襟就中外國御交際之儀之御國體ニ相拘候重大之事件ニ付宇内之公法ニ基不損

皇威至當之筋御履行可被遊

思食之處御時節柄をも不奉顧返る御恥辱を醸候儀重疊不容易罪科ニ付發砲號令之者各國見證を受可致割腹旨被

仰付候事

但罪科人體明三日々五ヶ日を限り兵庫表に護送致外國事務掛之者に可申出候事

右之通昨二日御達之趣奉畏候此段御請奉申上候以上

二月三日

備前少將家老代

池田 靱負

一三三 明治元年二月三日(二月二十五日)一三四 明治元年二月四日(二月二十六日)三一八

一三三 二月三日 外國事務總督東久世通禧ヨリ
(二月二十五日) 各國公使宛

神戸事件ノ發砲命令者處罰通知ノ件

一筆致啓上候然之備前家來各國公使館へ向發砲せる様號令せし士官當時備前
國元ニ罷在候間早々兵庫表に指出罪科申付候間左様御承知可被成下候以上
辰二月三日

東久世前少將

佛、英、伊、亞、李、蘭公使姓名閣下

一三四 二月四日 山陽道諸藩へノ達書
(二月二十六日)

神戸事件ニ關シ岡山藩士處罰通達ノ件

備前家老日置帶刀去月十一日神戸通行之砌外國公使に對シ發砲以ふし候ニ

付猶

朝廷以公法御處置號令いさし候士官死罪帶刀謹慎被

仰付候間爲心得申達候事

右山陽迄諸藩に可相觸旨被

仰出候事

一三五 二月四日 舊幕府神奈川奉行水野良之(若狹守)等ヨリ
(二月二十六日) 舊幕府外國奉行江連堯則(加賀守)宛

各國公使ヨリ在留各國民へ局外中立ヲ布告シタル旨報告ノ件

附屬書

一、二月四日舊幕府神奈川奉行水野良之(若狹守)へ亞米利加

書記官申立廉書

二、一月二十五日亞米利加辨理公使ノ中立布告和譯文寫

三、一月二十五日和蘭外交事務官中立布告和譯文寫

以內狀致啓上候然者米國ホルトメンへ外引合筋有之罷越候處今卯申刻英國蒸氣軍艦ス子一ブ兵庫港より入津致し同國公使カ申越候別紙譯文寫之通申聞以後船艦雇上ケ并武器買入方之儀者難整尤薩長共同様之儀ニ此りト限之事に無之段之ホルトメンカ後申立且和蘭岡士ハンデルダツクへ外用向有之支配組頭差遣候砌リ前書ホルトメン同様之儀申聞英米蘭三箇國公使カ各岡士へ申越候趣ヲモ申聞候依之譯文寫差進右之段可得御意如斯御座候以上

二月四日

依田 伊勢守

水野 若狹守

江連加賀守様

尙以本文之趣御勘定奉行外國奉行御目付へ後申遣候儀ニ有之候

一米國ホルトメン承込居候趣申聞候廉々別紙差進候間御老中方へ御申上方等可然御取計可被下候以上

(附屬書一)

辰二月四日水野若狹守米國ホルトメンへ對話之節

同人申立廉書

一米國公使より書狀之趣ニ有者

勅使一人者兵卒引連無之兩人者兵卒召連美濃國まで罷越候趣

一英人サトウ并醫師ウエリス与申者上京之趣醫師之儀之療養之爲上京致し候儀後可然候へ共サトウ之儀之疑敷儀ニ奉存候何歟極密之儀モ可有之与奉存候

一仁和寺宮三條前中納言東久世少將外國事務取扱候旨書翰ニ有申越候由

一英佛宿寺戰爭ニ有損し候由尤無程修復出來可相成由

一備前家老引渡相成候様外國人より申立候處右者

皇より取料シ之上引渡候積返答有之尤備前ニ有差出不申候者

皇より備前を征討いし候趣各公使上坂致し候様度々東久世カ申越候へ共備前之落着無之故いは上坂不致候

一此度の戰爭者

皇与大君の戦争ニ有之候間土地不殘引渡候様關東へ申遣候段各國公使へ東久世方申込有之候由

一長崎奉行被命候者有之同港へ相越候由

一先日之戦争ニ薩長人數二百五拾人程死亡致し候由

一米公使方同國人へ之布告文參り候右之國中戦争ニ付萬國公法之通り武器類軍艦双方へ賣渡候儀者勿論雇船も不相成旨ニ有之候右ニ付る者兼る御買上相成候鐵張船も御引渡申儀難出來困り入候

一蒸氣軍艦五艘程洋中ニ相見候英之儀之右五艘何方へ相渡候哉難計心配致し候

一新潟開港之儀問合候處當分開キ不申旨東久世より挨拶有之候右様ニ而之江戸も同様ニ可有之与奉存候

一神奈川表之義種々御手配有之候へ共京都後御手配有之候處既ニ薩長其外之人數俄ニ罷越

禁庭を奪取候同様之儀有之候而之御不都合申迄も無之候間右を御手本ニ御

處置相成候様仕度奉存候

(附屬書二)

普告

日本國中ニる

御門陛下与大君の間に戦闘の起る趣公法ありしと因り米國臣民等偏頗なき中立を固守せし法を設けん事を欲し其臣等も普告するハ軍艦或ハ兵糧運送船を賣却し或ハ貸貸し兵器彈藥を賣リ兵卒兵士軍務ニ關る書狀又ハ兵士を運輸せし等都て戦争ニ關する事汝右對敵双方の孰れへニるも務むるを此戦闘ニ乘し志その所業ハ萬國公法ニ基き右中立の法を破るものとし仇敵の所爲とせへし

右双方の内一方は奉職するものも軍律ニ服従せし又中立を破る所の船并其他運送を助くるものも取押へ入官せし且右の法を中立の人ハ屬せし荷物迄押及ほせし

右中立を破るものハ人船共米國政府の保護汝失ひ米國と日本間之條約にて許

されある正理を失ふるし

在日本米國ノミニストルレジテント

フアンフアルケンボルク

千八百六十八年第二月十八日於兵庫

編者註 附屬書二ノ英文「米國外交文書集」ニ載スルモノ左ニ附記ス

Notice.

Having been officially informed that war exists in Japan between his Majesty the Mikado and the Tycoon, and being desirous of taking measures to secure the observance of a strict neutrality on the part of citizens of the United States of America, I give notice to such citizens that active participation in this war, by entering into service, the sale or charter of vessels of war or transport ships for the transportation of troops, the transportation of troops, military persons, military dispatches, arms, ammunition, or articles contraband of war, to or for either of the contending parties, and similar acts, constitute, according to international law, a breach of neutrality, and may therefore be treated as hostile acts.

Persons in such military service would subject themselves to the rules of war, while ships

and other means of conveyance engaged in a breach of neutrality would render themselves liable to capture and confiscation, which rule may extend to cargo belonging to neutrals.

Such breaches would also involve the citizen and vessel in the danger of forfeiting claim to the protection of their government, as well as the rights and privileges granted by the treaty between the United States and Japan.

R. B. VAN VALKENBURGH,

Minister Resident of the United States in Japan.

Legation of the United States in Japan,

Hiogo, (Kobé,) February 18, 1868.

(附屬書三)

普 告

日本國中ニ有

御門陛下と 大君の間ニ戰鬪の起る趣公報ありしニ因り阿蘭臣民等偏頗を
き中立を固守せし法を設らん事を欲し其民等ニ普告するハ軍艦或ハ兵糧運送
船を賣卻し或ハ貸貸し兵器彈藥を賣り兵卒兵士軍務ニ關る書狀又ハ兵士を運
輸する等都る戰爭ニ關する事を右對敵雙方の執へよ又も務むるを此戰鬪ニ乘

し志その所業ハ萬國公法ニ基キ右中立の法を破るものとし仇敵の所爲とせし

右雙方の内一方ニ奉職せざるものニ軍律ニ服従すへし又中立を破る所の船并ニ
其他運送を助くるものハ取押へ入官せへし且右ノ法ハ中立の人ニ屬する荷物
迄押及ぼすべし

右中立を破る都る之阿蘭人ハ其政府之保護を失ひ阿蘭と日本間之條約ニ之許
されある正理を失ふへし

千八百六十八年第二月十八日於兵庫

日本ニ在る阿蘭コンシユルゼ子ラール兼

ポリチーキアケント

ドテカラーフフアンボルスフルツク

一三六

二月五日

舊幕府外國奉行江連堯則(加賀守)ヨリ
(二月二十七日) 舊幕府神奈川奉行水野良之(若狹守)等宛

局外中立ニ關スル報告受領ノ件

御内狀致披見候然之米國ホルトメンへ御引合筋ニ御越之處昨四日卯中刻英
國蒸氣軍艦スツフ兵庫表へ入津致し同國公使へ申越候別紙譯文寫御差越且
以後船艦雇上ケ竝武器買入方之儀等云々ホルトメンより申立候趣英米蘭三ヶ
國公使へ各岡士へ後同様申越候趣ホルトメン申聞候義等御申越之趣委細致承
知候右御報可得御意如此御座候 以上

二月五日

江連 加賀 守

水野若狹守様

依田伊勢守様

猶以御端書中廉書御別紙落手御申越之趣承知致し御老中方へも可然申上候
以上

一三七

二月五日 舊幕府神奈川奉行水野良之(若狹守)等ヨリ
(二月二十七日) 舊幕府外國奉行江連堯則(加賀守)宛

外國公使ノ局外中立布告中ノ文辭ニ關シ意見具申ノ件

武器賣買差留方各國公使觸書文言之儀ニ付申上候書付

神奈川奉行

武器賣買差留方各國公使觸書之文面新聞紙ニ布告有之右者昨四日申上候
通ニる委細御承知被爲在候儀与奉存候然處右觸書之初ニ日本國中ニる
御門陛下与

大君之間ニ戰鬪起れは趣公報ありしニより云々有之左候る者
上様御事

今上へ被爲對御戰鬪相成候様ニ相聞兼る被

仰出候御謹慎御恭順之御趣意反し候而已らむ君臣之御名分難相立哉ニ奉
存候次第ニる不都合至極之文意与奉存候勿論右之京師方各國公使へ達振前
書之通故右を證ニ致し相觸候儀ニ後可有之候へ共先入之主与ふは之理ニる

始終彼ニ證せらば候一端とも奉存候間右文意者速ニ公使へ御懸合之上御打
消相成候方与奉存候尤私共方新聞紙局へ及掛合候共同局ノ義之公用之文字
を其儘植付候迄故點刪可致權無之筋ニ付其儘差置候儀ニ御座候依之此段申
上置候以上

二月五日

水野若狹守
依田伊勢守

本文普告文之儀昨日差上候者米蘭二ヶ國ニる英國者外ニ規則書相添差出
右之私共へも差越候得共長文ニる翻譯出來兼候間差上不申乍去
御門云々与之文字者同様ニ有之字國文之獨逸文故發揮与難相分趣ニ御座候
以上

一三八

二月六日 舊幕府外國副總裁川勝廣運(近江守)等ヨリ同老中へ
(二月二十八日) ノ建議書

外國公使ノ局外中立布告中ノ文辭變更

ヲ求ムルノ件

附屬書 右變更ヲ求ムル書翰案

書面之趣一覽仕候處此度賣船并雇船等差留め方之儀ニ付英佛米蘭李伊公使より觸書之文意中 御名義より關係仕不都合之廉早々公使へ御掛合之上御打消相成候方可然と此趣より有之勘辨仕候處當節柄右等之意味御國內ハ勿論外國へ訛傳以し公報と相心得候様ニるハ是ま又御遜讓之

御深意も相立及恐入候次第ニる申上候趣尤之次第より相聞候間いつれニも一應三公使へ御掛合相成尤外公使へも豫しめ被 仰入置候方と奉存候依之別紙御手前様方より各國公使へ御書翰案并瑞葡白コンシユルへ私共より之書翰案とも取調此段申上候以上

二月六日

川勝近江守
江連加賀守
石川河内守

(附屬書)

御書翰案

平岡和泉守
糟屋筑後守
酒井對馬守
杉浦武三郎

(續通信全覽)

英公使に

以書狀啓上候然る先般伏見之戰爭ニ付貴様并米蘭李公使等於萬國公法中立之法より隨ふこれ賣船雇船等禁止之義其國民に普告被致候書面中 御門陛下と大君之間より戰鬪起りしとの文段相見へ候得共右戰爭之根元を我大君上洛之先供鳥羽街道四ツ塚關門通行之砌薩藩之を此謂をかく差拒ミ彼方より不意より砲擊致し候ニ付當方於ても無餘義應砲及ひしよて素より御門之兵と戰鬪及ひし義より無之乍然一時之紛紜を以近畿を騷擾し

御門陛下を驚らし民心を動かし候るハ我大君至正無私之御素志ニ相戻り候ニ付大坂を引拂兵隊を收御東下相成候儀ニ有之候間前書貴様より貴國民之普告書之内御門陛下と大君との間戦闘起りしとの廉者早ニ御改正御觸直し被下度右可得御意如斯御坐候以上

二月 日

佛 公 使 へ

右同文言貴様并英蘭米李伊公使云々

米 公 使 へ

右同文言貴様并英佛蘭李伊公使云々

蘭 公 使 へ

右同文言貴様并英佛米李伊公使云々

李 公 使 へ

右同文言貴様并英佛米蘭伊公使云々

伊 公 使 へ

右同文言貴様并英佛米蘭李公使云々

丁抹政府全權

魯コンシユルに

以書狀致啓上候然ハ先般伏見戦争ニ付英米蘭李公使おるニ萬國公法中立之法ニ隨ひ賣船雇船等禁止之儀其國民に普告せらるし書面中御門陛下と大君の間ニ戦闘起りしとの文段相見え候得共右戦争之根元ハ我大君上洛之先供鳥羽街道四ツ塚關門通行之砌薩藩之者無謂差拒彼方より不意ニ砲撃いし候より當方於ても無餘議應砲およひしよ又素より御門之兵と戦闘及し義ニ無之乍然一時之紛紜を以近畿を騷擾し御門陛下を驚らし民心を動かし候るハ我大君至正無私之御素志ニ相戻り候ニ付大坂を引拂兵隊を收御東下相成候儀ニ有之候間既ニ右四ヶ國公使等ハ前條布告書改正之儀頼入置候ニ付其段貴様にも御心得有之度右可得御意如此御坐候以上

二月 日

瑞西代任コンシユルセネラー
葡白コンシユル

前同文言右總裁之命に依り可得御意如此御坐候以上

二月 日

外國奉行連名

今案スルニ此各國へノ書翰案施行セシヤ否記録ナシ明治七年四月水野千浪舊神奈川奉行若狹守良之へ顛末ヲ問フ千浪云ヘラク其頃閣老へ建白シ尙神奈川在留各國公使等へモ
天朝ニ對シ奉リ毫末モ抗衡シ奉ルニアラス全ク先驅ノ卒忽ヨリ一時戰鬪ノ勢ニ至リシカドモ慶喜ニ於テハ深ク其粗暴ヲ恐レ速ニ鎮撫シ兵ヲ纏メテ江戸ニ歸城シ謹慎ス然ルニ布告ノ文ヲ以テ各國ニ報知アラハ
天朝ニ對シ抗衡ノ趣ニ聞エ慶喜ノ本意ニ違ヘリト辨明駁セシ事ハ慥ニ覺アレトモ建白以後ノ處分ハ外國奉行ノ知ル所ナレハ其後ノ事ハ神奈川ニテ

ハ知レ難シ事多端ナラサル日ハ建白ノ末其採用ノ有無達シ來レトモ不容易時勢例ノ順序ニモ行届カス終ニ事脱ニナリシモ計難ケレハ同時在勤舊奉行ヲ訊問施行ノ有無ヲ報知スヘシト約シ別レ其後不日シテ右ハ混雜中確ト施行ノ有無ヲ覺ヘサレトモ面晤ニ辨シ事濟シニモアルヘシト返答判然ナラス舊幕府進呈ノ舊記中戊辰各國往復書翰取扱ニ此ノ書翰ノ事ヲ載セス各國公使館ニモ此書翰ヲ傳ヘサルヲ以テ推考フレハ應接中ニ濟シナルヘシ
應慶四年各國書翰取扱記ヲ考フルニ同書各國ノ部ニ英米蘭佛李伊公使瑞葡白コンシユルヘ
御門ト大君ト戰鬪有之トノ布告文段打消方御書翰書翰案但武器賣買神奈川奉行建白書ヘ下ケ札評議モノトテ添五十四番ニテ廻シニ出スト而已アリテ以後ノ施行ヲ記サ、レハ彌不達ノ書ト決スレトモ姑ク于此載セテ後考ニ供フ

(續通信全覽)

編者註 本號文書ハ附屬書翰案ノ理由書トシテ老中へ差出シタルモノカ

一三九 明治元年二月六日(二月二十八日)

三三六

一三九 二月 六日
(二月二十八日)

神戸事件ノ發砲命令者ノ氏名届出方指令ノ件

慶應四年戊辰二月六日

一外國御用ニる宇和島侯兵庫表^ハ御出ニ付浪花御發途六字前西宮驛御着御止宿

一備前家老池田伊勢同所へ詰合ニ付御本陣^ハ罷出候様申遣候處不快ニる御斷申出番頭水野主計差出候旨申越候處是亦不快ニ付不罷出同役も同様御斷申出古田藤兵衛外ニ軍掛之者壹人罷出候ニ付正月十一日神戸表ニる外國人^ハ發砲いたし其節號令之者御裁許之義ニ付從

朝廷御達ニ相成可申最早期限ニも相成候ニ付右人體兵庫表へ被差出候哉名元等相分り居候ハ、早々御達有之候様申達候事

■著註 本號文書ニ付テハ記錄目次ニ外國局日記書抜「トアリ

一四〇 二月 七日
(二月二十九日)

松平慶永(前福井藩主等六藩ヨリ)ノ建白書

外交方針ノ確立及各國公使召見ニ關シ意見具申ノ件

臣等謹而按するニ古之能く天下の大事を定むる者ハ必先ツ天下の大勢ヲ觀て緩急機に従ひ處置宜を得候故ニ唯功德の一時ヨ光被するのみならず萬世不拔の業是に於て相立候今や

皇上始て 大統ヲ繼せ給ひ 御政權復一に歸し凡百の宿幣^(すゑ)も更始一新し天下萬姓目を拭ひ治を望むの秋なり即在

朝の百官自ら奮發し内ハ

皇上の張 御徳化を輔け奉り外ハ

皇威を萬國に張り臣子之分を盡さん事ヲ欲す就中今日の急務ハ

皇國と外國との交際を講明せすして不叶儀ヨ奉存候近頃
朝廷始て外國事務の官職を設らば其人を御撰擧遊され専ら御力ヲ盡され候ハ
天下の人をして方向する處を知らしめ給はんとの。

一四〇 明治元年二月七日(二月二十九日)

三三七

御趣意よて

皇威茂萬國に赫耀せしめ候ハ此時に可有之と不堪感銘奉存候乍併古語も人心不同ハ面の如しと申候而在上在下の人未ダ各々區々の議を執て疑惑なき事能ハす又或ハ漢土人の如く自ら尊大にして外國人を禽獸の如く蔑視終ハ彼に打負卻て驅使せらる候様に成行き候覆轍を踐むに至るるき歟と甚憂慮仕候依而熟考仕候處今日之先務ハ上下協同一和し宇内之形勢を辨し

皇國一大革して開業すへき所以方向確定すへき儀第一と奉存候是迄

皇國ハ一方に孤立し世界の事情に不達只偷安を以て志とし荏苒衰微を致し彼カ爲に制せらるへき次第ニ立至候と各國ヨ航行し衆善を包取氣運日々に開け政治文明兵食充備天下ヨ縱横致し候と比較以たし候得ハ盛衰之原由も判然相分り可申哉に奉存候元より膺懲の重典も無くて不叶儀ヨハ候得共控御之術其方を得候へハ遠人も懷き服し候道理よて尤無罪之人を膺懲致し候譯ヨハ無之候中古

朝廷ヨも玄蕃の官汝置せたまひ鴻臚館を建させらる遠人汝御綏服被成候事も

相見へ居其後天正慶長の間ヨハ蠻夷共屢西國に渡來交易致し候若し其來港不致節ハ大將軍より書簡を以て促さる猶遲緩に及候時ヨハ此方より大軍を發し攻撃ヨ可及なきと申遣し候儀も有之候處島原の一亂以來始て幕府より鎖國の令有之候乍併漢土和蘭に於てハ猶交易差許候得ハ一切ヨ外國人ハ攘ひ斥け候と申譯ヨハ更に無之處近年攘夷之論盛に相起り諸侯之内偶攘斥致し候後有之候得共素より一藩の力を以て不可爲ハ論するに足らば且先年幕府より十年を期して成功を奏し可申抔と申上候ハ陽ヨ其名を假り陰ヨ其私を行ひ候詐術ヨ

先帝日夜 御苦慮被爲遊候御儀トハ同年之論ヨハ無之と奉存候然ヨハ今日

皇國之衰運を挽回し

皇威を海外ヨ耀し候儀萬々一刀兩斷之

朝裁汝以て井蛙管見之辭論を去り先ツ在

廷樞要之御方々より御豁眼ヨ被爲成上下同心して交際之道無二念開せられ彼カ長汝取り我カ短を補ひ萬世之大基礎相据らる候様奉專禱候仰願くハ

皇上之 御英斷能く天下之大勢を御觀察被爲遊是迄犬羊戎狄と相唱候愚論致
去り漢土と齊しく視させられ候
朝典を一定せらる萬國普通之公法ヲ以テ參
朝をも被命候様御賛成被爲在其旨海内へ布告して永く億兆之人民をして方向
致知らしめたまひ度儀と偏よ奉懇願候誠恐誠惶頓首頓首

二月七日

越前 宰相
土佐前 少將
長門 少將
薩摩 少將
安藝新 少將
細川右京大夫

(太政官日誌)

一四一 二月七日
(二月二十九日)

神戸事件ノ發砲命令者氏名届出ノ件

同七日

一 曉天備前家來澤井權四郎古田藤兵衛とり左之通届書差出候ニ付兵庫表へ着
次第御本陣に早々届出候様五代才助とり右兩人に申達ス

届書

備前守家老

日置 帶 刀

馬廻士知高

百石

瀧 善 三 郎

年齢三十二歳

右者先般神戸通行之砌外國人を行纏之義ニ付公法を以御處置被爲在候間發

砲號令之士官割腹被仰付候旨御達ニ付右人體之者明七日兵庫表へ差出申候
此段不取敢御届申上候以上

二月六日

編者註 本號文書ニ付テハ記錄目次ニ「外國局日記書拔」トアリ

一四二 二月八日 (三月一日) (外國事務總督伊達宗城ト各國公使トノ應接記

神戸事件ニ付岡山藩士處罰ノ件

二月八日宇和島侯六ヶ國公使へ應接

宇 外國交際ノ義互ニ腹藏ナク談シタキモノ也

備前士ヲ召連レ兵庫ニ置ケリイカニ處置スヘキヤ

此間日置帶刀ニ御達ノ書付ヲ示ス

外 右書面ノ趣普ク國內ニ御達ニナリタルヤ

宇 然リ

外 公然各藩留守居へ可被達ナリ

人命ヲ斷ツハ不可忍コトナレモ以來親シク交ルカ爲ニハ不可已ナレハ及此
事

切腹ハ日本ニテ當然ノ罰ニヤ

宇 武士ノ罰ナリ

外 日本法ニテ切腹ノ地ヲ取上ケタマフナリト聞然ラサルヨウニ御頼入

宇 諾

其外餘談多シ不記

一四三 二月九日 (三月二日) 鹿兒島藩山口藩及岡山藩へノ達書

神戸事件ノ岡山藩處刑執行ニ付警備ノ件

〔(朱書) 元年二月九日薩長岡ノ三藩へ達シタルモノト見認ム〕

一寺之儀を兩藩備藩与申合取窮可申事 永福寺

一警衛向を兩藩申談取窮候る宜候事

一 外國人應對之儀之伊藤俊助に引合候様可致事

二月九日申渡候「各藩(朱書)へ往」

(札下) 文中ノ兩藩ハ薩摩長州ナリ

一四四 二月九日(三月二日) 外國事務總督伊達宗城ヨリ各國公使宛

神戸事件關係者處罰其他ノ件

(佛英伊亞幸蘭六ヶ國公使へ左之通)

以手紙致啓上候然と今般備前家來無故外國公使等并其人民を襲ひ候段於
朝廷新政之砌旁不行届之義拙者々御詫可申入且此以後雙方とリ信義を守相交
候ニ於る之右等妄動之所爲無之様列藩へ急度申渡置候ニ付以來此等之事總る
朝廷ニ受合可申此度之義如別紙日置帶刀謹慎申付瀧善三郎割腹申付候段各
國公使へ可申入旨蒙

勅令候以上

二月九日

六ヶ國公使

宇和島少將

姓名閣下

但各通

一四五 二月十日(三月三日) 外國事務總督伊達宗城ヨリ

(三月三日) 佛蘭西公使宛

佛國人モンブランヲ在巴里日本總領事ニ任命ノ旨通知ノ件

於佛國日本コンシユルゼ子ラール

佛人 コント デ モンブラン

兼る於佛國徳川よりフリヨリーエラーールに右職掌申付置候由之處此節國體復
古政令從

朝廷出候ニ付エラーール義之指免右之通申付候者也

日本

外國事務局

外國事務總督

宇和島少將

慶應四年戊辰二月十日

前文之通今日申渡候間此段申入候已上

二月十日

宇和島少將

佛國公使

レオンロス閣下

一四六

二月十三日
(三月六日)

岡山藩士澤井宇兵衛ヨリノ届書

神戸事件發砲命令者瀧善三郎處刑濟ノ件

附記 瀧善三郎割腹ノ際ノ口述

日置帶刀馬廻り士

地高百石

瀧善三郎

歳三十二

右之者去ル七日兵庫表に差出外國御用掛に相達警固仕置候處同九日晚同所於永福寺各國見證を受外國掛薩州長州宇和嶋家來等立合之上割腹仕候死骸之帶刀手前ニ取片付仕候右之段御届奉申上候以上

二月十三日

備前少將内

澤井宇兵衛

編者註 瀧善三郎割腹ノ際ノ口述左ニ付記ス

割腹之節瀧善三郎口演割腹之席ニ臨ミ左之通

去ル十一日神戸通行之節夷人より無法之及所業候處よ？無據加兵及即乘其舉發砲號令之者拙者也然ル處今般王政御復古更始御一新之折柄宇内之公法を以御處置被遊割腹被仰付候付則割腹致し候御檢證可被下候

一四七

二月十四日
(三月七日)

大坂ニ於テ大坂裁判所總督醍醐忠順(外國事務總督伊達宗城)東久世通禧ト各國公使トノ會見記

外國事務局ノ設置ヲ告ケ且不日各國公使ヲ召見セララルヘキ聖旨ヲ傳フルノ件

二月十四日午半刻ヨリ申ノ刻マテニ大坂西本願寺ニ於テ

醍醐大納言殿東久世前少將殿宇和島少將殿各國公使ト應接ノ始末左ノ如シ

但外國事務掛及ヒ諸藩家老列座

一東久世公發話我日本政體王政復古

帝自ラ政權ヲ握シ外國ノ交際モ一切

朝廷ニテ曳請裁判可致旨意ハ過日兵庫ニ於テ布告セシ如ク相違アル事ナシ此節外國事務局ヲ建立シ交易通商一切ノ諸事件悉ク外國事務官ノ裁決ニアルヲ以テ今日改メテ 朝廷守護ノ列藩ト共ニ各國公使ニ會同シ此盟約ヲ定ム自後普ク日本人民ト外國人民トノ交際厚ク誠實ヲ盡シ互ニ疑惑ナキヲ以

テ主意トナサン故ニ大小ノ事件外國ニ關係スルノ務ハ外國事務局ノ專任ナルヲ以テ我等ニ就テ

帝ニ建言スルヲ要セヨ

各國公使曰先般兵庫ニテ布告アリシ其證明白ニシテ今日改メテ列藩會議帝普ク政令ヲ下シ兩國人民ノ爲メ廣ク信睦ヲ求メ互ニ誠實ヲ旨トナスハ我各國ニ於テモ兼々渴望セシ處ニシテ感悅之至ニ堪ス自今 朝廷 帝ヲ以テ日本ノ主府ト仰キ萬事其政令ヲ奉セントス

一亦曰此度萬國ト我カ

帝ト條約ヲ改メシ上ハ各國公使エ

帝自ラ對面シ盟約ヲ立ン故ニ不日上京アルヘキ旨各國公使エ可申入

帝ノ命ヲ奉シ候

公使曰恐入候談合ノ上明後日否可申上

一亦曰當今戰爭ノ後ハ京攝及ヒ諸所ニ鎮撫ノ師ヲ出シ過半其政令行ハレ既ニ各國ノ諸侯ヲシテ徳川慶喜征討ノ師京ヲ發セシ上ハ不日ニ其成功アルヘキ

ハ勿論ナリ自ラ横濱箱館外國人在住ノ場所ハ
朝廷ノ官吏ヨリ人民安堵ノ令ヲ下スヘシ則慶喜ヲ征討スル事實明白ノ罪狀
書面ヲ布告スヘキナリ

公使曰慶喜ヲ討伐ノ師既ニ京師ヲ發セシ上ハ關東ノ形勢安心ナリカタシ
若早ク

帝ニ拜謁スル能ハスンハ速ニ浪華ヲ去リ横濱ニ在ル人民ノ爲メニ彼地ヲ
鎮靜セン事ヲ欲ス

一亦曰明日中ニハ上京ノ日限申來ルヘク夫マテ滯坂其上進退セラレヘシ
公使曰

帝ニ謁スル期限ノ日數ヲ確定シ以テ此事ヲ約セン

一亦曰今日必相分ルヘシト雖彌確定スルハ明十五日ト定ムヘシ

然ラハ明後十六日十字ノ朝米國公使館ニ於テ再會シ各般ノ諸事件ヲ約定
セン

右之通ニテ相濟未刻各國公使退出セリ

(太政官日誌)

一四八

二月十五日
(三月八日)

公卿諸侯ヘノ御沙汰書

六藩ノ建言御採納ノ件

附記 公卿諸侯ノ奏議

方今外國之事情 御洞察被 遊候處、世態變革一朝之儀ニ無之被 知食候、隨テ
ハ別紙列藩建言之次第モ有之候條、建言之通 御決定之 思召候間、爲見被下候
事。

編者註 別紙ハ一四〇ニ同ジ

鍋島直大家記

○春嶽私記ニ云、十四日、公、太政官ヘ御出仕之處、俄ニ御參 内相成候様、岩倉殿ヨ
リ御達有之、下參與之面々モ同様未半刻頃參 朝之處、右ハ外國公使參 朝之儀、
彼ヨリ不申出已前、此ヨリ被 仰出度段、浪華東久世殿ヨリ御申越、小松ヨリモ後
藤迄申來ニ付テナリ、申刻頃ヨリ奥御廊下ニ於テ、總裁宮、岩倉、中山、正三、徳大寺等
之諸卿公、竝下參與迄、御一席之大評議ナリ、拜禮之節、握手我ハ屈膝等ニ付テ之俗

論甚敷、更ニ不相決シテ夜ニ入、遂ニ 叡慮伺ト申事ニ相成、戌半刻頃迄御手間取、亥刻前ニ至リ、漸ク京師ニ被召 參朝可被命ト御決議有之、其段早々浪華へ御返事有之由、拜禮之實際ニ至リテハ、極内狀ハ未決之由、岩倉殿歎話セラレタリ、御場處之儀モ、南殿、條城兩議有之、遂ニ南殿ニ被決タリ、十五日、在京諸侯總參 内被命、外國交際之儀御布告有之、下參與之面々モ參集ヲ被命タリ、此時外國人へ 御對面之儀、後宮之物議等有之未決ニテ、當路之公卿殊之外苦惱セラル、暮時前、公、岩倉殿ト御一處ニ 天前へ被爲候、更ニ交際之事情詳悉極言御明辨有之、御退出之後、岩卿猶滯坐ニテ御諫諍被申上、漸クニシテ拜禮モ可被命ニ御決定有之由。

(復古記)

○ 編者註 右御沙汰ニ對スル「復古記」記載ノ公卿諸侯ノ奏議左ニ附記ス

方今外國之事情 御洞察被遊、越前宰相始獻言申上候通 御決定之就 思食、猶亦爲御見被下候趣謹テ拜見仕候、依之御請書差上候付宜敷御執 奏可被下候、以上。

二月十五日

島津少將

(島津忠義家記)

○ 今日御渡之兩通奉拜見候處、方今外國之事情 御洞察被爲在、猶列藩建言之次第ニ寄、朝議御決定可被遊 御旨趣奉畏候依テ向來 朝威益隆盛、萬國ニ相輝敬禮ヲ盡シ參 朝仕候様、御基本被爲立儀ト奉存候以上。

二月

津和野侍從

(龜井茲藤家記)

○ 右被 仰出候御別紙之趣奉拜承候、此段御請奉申上候、以上。

二月十五日

永井日向守直介

(永井直諫家記)

○ 加藤明實等連署

外國 御處置振之儀ニ付列藩建言之次第モ有之、獻言之通 御決定 思召候段、一同聊無異存 叡慮之趣謹テ奉遵奉候。

二月十五日

(加藤明實家記)
(市橋長義家記)

今日御渡相成候御書付之趣、奉得其意候、別段存意モ無御座候、此段以使者申上候、以上。

二月十五日

堀 左衛門尉

親 義

堀 親廣家記

○

今日於御假建、家來迄拜見被 仰付候御書付之趣奉畏候、於私違存無御座候、此段御請奉申上候。

二月十五日

京 極 下 總 守

京極壽吉家記

○大原重徳建白書

此度六藩ヨリ獻言之趣蒙 敕問奉敬承候、愚昧_{小臣}存意言上仕候モ、恐縮之至ニ候得共、聊愚存言上仕候、獻言之趣意ハ、萬國洞察之人々、殊ニ萬世不拔之事柄故、忽御奏上之事ニテ御氷解被遊候御模様ト奉存敬承仕候、乍去尙又存意候ハ、可申上ト之 聖慮、誠以難有存候ヘハ、伏藏可仕筋ハ毛頭無之候間、一二言上仕奉汚 聖聽候。

一是迄、徳川政權ヲ執リ我意ヲ張リ 朝廷ヲ奉輕蔑候時節ト雖、攘夷被 仰出、天下有志ノ輩如

何計難有カリ、何卒報國ト思込、身命ヲ投候者幾千人、斯ル次第ハ皆國辱ヲ歎キテノ事ニテ、遂ニ徳川天罰ヲ蒙リ、暫行方モ不知相成速ニ 大政御掌握被遊、兼々思召之通り、攘夷ニ可推遷ト、諸臣ヲ始天下ノ衆諸無僻之人々、神州之正氣モ可引立事、立テ可待杯申相喜居候、乍去、天下未タ治平之半ニモ不至、紛亂多端ノ折柄、中々以攘夷可申出様モ無之、何分國內御平治之上ハト存込居候處、獻言之末語ニ至リ參 朝ヲモ被命候様、御贊成被遊候様ニト有之候ヘハ、無程夷人モ入京致候様可相成候、左候テハ彼尾州ヨリ言上上之候、國事ニ死亡ノ者共、地所ヲ賜リ其靈ヲモ可祭トノ難有 御沙汰モ一時ニ消滅可仕、然ハ 朝廷之御儀ハ何カ御實ヤラ御不條理ニテハ、實以衆諸總テ向フ所ヲ不辨 朝廷ヲモ誹謗仕候様之事ニ可立至ト、深恐縮歎慨ニ不堪事奉存候、乍併既ニ御氷解被爲在候上ハ、是迄御祈願被爲在候 神祖ヲ奉始御代々之 御神靈ヘモ御氷解之趣被仰上、衆諸ヘモ十分御布告相成、同氷解仕候上被許候様ノ御事ニモ相成候ハ、少シハ承服モ可仕候ヘ共、只今言上上之諸臣之 敕問モ、如形ノ事ニテハ、迎モ感服ハ仕間敷、慶喜暴政ノ時ヨリモ甚敷、人々異存ヲ懷キ、更ニ擾亂可仕ト、千憂萬苦不堪言語事ニ有之候、仰願クハ、何卒今暫之處被差延、天下相定候上、御許容被爲在候様仕度、此儀下文ニ述候、全體之處政權御掌握被遊候哉否、忽夷人ヲ被近附候様之御儀被爲在候テハ、是迄年來攘夷之 聖諭ハ皆御偽言ニテ、全徳川ヲ徒ニ困苦セラレ候迄歟、但此上ハ打亡シ、和親文易ヲ朝廷ニテ被遊度儀御心組ニテ、正義ヲ御主張被遊候様ニ相當リ、天下ノ有志ニ對シ、面皮モ無之、悲泣血涙ノ事ニ候、元來夷人ハ犬羊ト唱ヘ候ヘ共、近來ハ大ニ事情モ相分リ、應對モ易ク

杯薩藩士モ申居候間、薩藩士ニ殊更ニ被命、國內ノ實情ヲ明白ニ申聞セ、政權 朝廷ニ歸スト
 雖慶喜之亂未落居、紛紜擾々、中々外國交際トコロニ無之筋ヲ懸ニ申聞セ、國內治平之見込相
 立候迄、何事モ見合吳候様、尤右交際之事御聞濟ニ相成候上ハ、二年三年之後タリ共、信義ニ於
 テ相變ル事ナケレハ、何ソ延日ヲ論スル事アラシヤ、信ヲ守レハ日ノ延ル程固ク相成候ハ、神
 州人ノ定情ニテ、夷人ト異ナル所ニ候、此邊ヲ能々了得爲致候様薩士ニ被命候ハ、御請可申
 ト奉存候、ケ様ニ不被遊候テハ、慶喜モ未服罪事故、忽異存ヲ生ル事可知事ニ候、又天下之衆諸
 モ亦異存ヲ起シ、更ニ慶喜ニ屬シ候者モ出來可致左候得ハ、更ニ擾亂ト成可申候、ケ程之事ニ
 テ獻言ハ、盡キ不申候得共、何程書並へ候テモ、其趣意ハ唯今夷人入京候テハ、忽人心立騒瓦解
 可仕候間、延日被 仰出候ヨリ外ナク候、偏ニ此延日之事懇禱仕候、死罪死罪誠恐誠惶頓首。

二月十六日

重 德

大原重實手記

○文中間解シ難キモノアリ、他書ノ參考スヘキモノナキヲ以テ、一ニ原文ニ從フ

○

臣 詮

乍恐言上仕候、此節外國交際一條ニ付、列藩上疏之書面披展、被 仰付意趣曲折一々誦讀仕候、成
 程天地剖判之初ヨリ、一視同仁之大眼目ヲ推開見候得ハ、彼是内外之差別モ無之譯ニハ御座候

へ共、五氣細細濁不齊之後ヨリ、千差萬別ノ小分殊ヲ細推仕候得ハ、自然華夷偏正之分別モ無
 之不能處可有之候、是故我 神聖繼天立極、タマフ處ヨリ、其大同中ニ就キ、細節目ヲ御推出シ被
 爲遊、遠近親疎華夷内外之分判然相定リ、天地之處ヲ易ヘカラス、冠履之倒ニ置ヘカラサル様ニ
 相極居候事、天下人々之所知ニテ、申上迄モ無之奉存候、但時運日々ニ遷リ、形勢月々ニ換リ候處
 ヲリ、外夷交際相開ケ候ニ馴致仕奉天時候ト申場合ニハ、御座候得共、杞憂之愚衷ヨリ考候へハ、
 履霜堅氷至之譯モ御座候故、自然偷安在再仕候内、恐多モ萬々一 朝典之微瑕ニ相成候モ難測
 奉存候間、何卒篤ト 御熟慮之上 列聖御繼承之御鴻業、愈御確守被爲在、萬葉不易之 皇統益
 御昌大被遊候様、御贊成相成度、乍恐葵情罷在候、就テハ最早此上ハ待蕃客タマフ御禮遇、嚴正ニ
 相立、中古玄蕃之職、鴻臚之館御設ケ相成候姿ニテ、萬國之外迄、大度内中ニ御合容被遊、自然彼ヲ
 制シテ彼ニ制セラレヌ様、内外親疎前後緩急之辨有之度奉存候、全體華夷之分ハ、義利之兩端ニ
 相分レ候事故、於 皇國益禮義廉耻之正風、凜然仕候得ハ、自然ト外國待遇之道モ公正ニ被行、天
 地之鴻業、愈確定致、神州之 皇統益昌大、自然ト大同中ヨリ細目ヲ推開カセタマフ 神慮ト合
 體符合仕、天下億兆悉仰天日、海内臣庶益沐 皇澤候様、可相成、千萬難有仕合奉存候、外國之情態、
 驚ト熟知モ不仕候得共、兼テ存込罷在候誠意ヨリ、節角更始御一新之折柄、於臣子之分、其儘差扣
 罷在候儀、甚以恐悚仕候間、孤陋管見之儀、謹テ奉言上候、此上ハ兎モ角モ 朝命之儘遵奉仕、聊異
 存無御座候、實恐實惶頓首頓首謹言。

二月十七日

松浦肥前守

○二十日建白書

松浦詮家記

御朝政復古、舊弊一洗之間、宇内各國之大勢被遊御洞察、六藩獻言之旨趣有之、斷然外蕃參内、勅許可相成段奉謹承候、然慮爾來人心之不和、從外蕃生國家之亂階、從外蕃開天下蒼生高枕無暇、痛惻悲歎ニ不堪、今日之機會、俄ニ外蕃參内候ハハ、疑惑紛々之議難止候乎ト奉杞憂候往時、桓武帝遷都以來、大宮東西鴻臚ヲ被爲置候古例ニ隨ヒ、東寺ヲ以是ニ充、確乎不可拔之公論ヲ以、控御被爲得其方、人民彌仰、皇威候様奉懇願候前日、於朝廷御布告二十五人列候連署謹遵仕候得共、退出後疑團一結難氷解、此儘默止傍觀過日月候テハ、言路御洞開之、聖意ニ奉背候儀、不願固陋寡聞、瑣々之鄙言獻芹仕候、敢冒、尊嚴候段ハ、恐懼不過之奉存候、誠恐誠惶謹言。

二月

加藤遠江守

加藤家秋家記

○案スルニ、加藤明實、市橋長義家記、同列一同差出スト記シ、關長克、松浦詮家記ニハ、二十三人連署ストアリ、皆姓名ヲ逸シ、各家記亦原文ヲ逸ス、又詮家記ニ、一應請書ハ差出候得共、篤ト勘考仕、心附次第別段獻言仕旨申上候事トアリ、其餘考フル所ナシ。

○附菅原薫子建白書

處子 菅原朝臣薫子

昧死シテ奉言上候、今般洋夷入、朝拜謁被爲、免候旨、且又井蛙之管見ヲ去リ、是迄夷人ヲ犬羊ノ如ク相卑メ候儀ヲ止メ、皇國、西洋ト彼此之差別無之、本朝之舊制ヲ被相改、御制度萬端モ追々西洋各國之法被採用、御國是御變更ニ相成候旨傳聞仕候、是ハ定テ甚深之、聖慮ヨリ被爲出、且文武諸臣被熟議贊襄候上ニテ、御確定之御儀ト奉存候ニ付、彼是奉申上候ハ、甚以テ恐入奉存候得共、狂妄之存意聊奉申上候、彼夷人入、朝拜謁之儀ハ、是迄例無之事ニモ無之、往古ハ唐國、三韓、渤海、海國、往々國使入、朝之例モ有之候得共、何レモ蕃國之御接待ニ有之候テ、天朝之官位ヲ被授候事、坏有之、少シモ御尊崇之儀無之候間、右様之例ニテ御接待ニ相成候儀ニ候得ハ、強テ異論モ差起リ申間敷、又後來之害トモ相成間敷奉存候得共、方今之形勢ニテハ、洋夷共自ラ帝國ト稱シ、尊大ヲ極メ居候間、往古之諸蕃來、朝之例格ニテハ、逆モ承伏仕間敷、何レ同等ト申儀ニ可相成、唯今同等之禮ヲ被用候得ハ、後來ハ再拜臣ト稱スルニ至リ候ハ、必然之勢ニ御坐候、宋胡銓カ奏ニ、再拜シテ不已必降ヲ乞ニ至ラント申候モ、實ニ被想像寒心仕候、且入京拜謁仕候共、是ハ外來之者ニテ有之、比喩シテ申候得ハ、來客出入之者同様之儀ニ御坐候間、何者來リ候共、包荒之量ヲ以テ、夫ハ夫ニシテ置候カ主人之職ニ御坐候處、只今之形勢ニテハ、來客ヲ護ミ候テ、家風迄改候ト同様之事ニ御坐候、且又、御國是御變更之儀ハ、實以テ重大之事件ニテ、神州興廢存亡此一舉ニ被爲在候御儀ト奉存候、過日六藩獻言之趣ニテハ、漢土人之如ク尊大ニ不被遊候様ト申上候得共、是ハ、皇國漢土而已ニ不拘、假令西洋各國トイヘ共、其國君臣等ハ、自國ヲ尊大ニ不仕候テハ、其國ハ治リ難キ者ニ御坐候、閭巷之細民、一兩人之家僕召使候者ニテモ、其家主

ハ、無此上尊嚴大切成モノト不存候テハ、家相治リ兼候、況ヤ 皇國ハ三千年ニ近ク 皇胤連綿ト御相續被爲在候モ、全ク衆心合一シテ 天朝ヲ無限尊崇仕候ヨリ、如此君臣之大分不相亂、萬國ニ超絶候ハ、此尊大之効ニ御坐候、又吾國ヲ尊大ニ仕候得ハ、他ヲ賤ミ候ハ自然之勢ニ御坐候、然ルニ今其尊大ヲ相止候ハ、自ラ 御國體ヲ破リ候ニ御坐候、御國體破レ候テハ 御國威自ラ萎靡仕候、彼漢土人尊大ニテ、夷狄ニ被制候ト申候得共、宋、明、清、何レモ貿易和議ヲ以テ國ヲ誤リ候、夷人ニ愚弄セラレ候事、漢土人之論明晰ニ御坐候間、乍恐即今コソ、全ク漢土之覆轍ヲ被爲踏候御儀ト奉存候、加之 皇國、漢土トハ近隣之國柄ニテ、人情風土モ、左而已相替リ不申候得共、西洋ハ數萬里ヲ隔風土人情モ甚乖異ニ候間 皇國人ヲシテ、舊習ヲ去リ心ヲ變シテ、西洋人ヲ模倣セシメ候儀ハ、決シテ不相成儀ニ御坐候、尤西洋ハ只々貨利ヲ貪リ、禮義廉耻ヲ不知候テ、帝王杯ト相唱へ候テモ、巨商同様之者ニ有之候間 皇國杯之仁義勇武ヲ風俗ト仕候國トハ、萬々不同候、且專ラ天主妖教ヲ奉シ、天主ヲ大君大父トシ、眞之君父ヲ小君小父トシ、假令大罪ヲ犯シ候共、天主ニ媚諂ヒ候者ハ、最上之天堂ニ生レ、忠孝仁義之人モ、天主ニ不詔候モノハ、地獄ニ墮落シ候杯ト相唱へ候ハ、實ニ君ヲ無シ親モ無スル之教ニ御坐候、此教蔓延仕候得ハ、三綱五常モ廢絶可仕候、尤方今之形勢、鎖攘之論ハ、逆モ難被行、是非和親交易ニ無之候テハ 皇國之御安危ニ可相拘ト申候説モ有之候得共、即今ハ和戰兩様トモ、御安危ニ可相拘ト奉存候、彼 御國體相立候上、斯迄清國、和蘭等之御振合ニテ、互市御免許被爲在、國使杯、一通リ外蕃之御取扱ニテ御接待被爲在、右ニテ承伏不仕候得ハ、戰爭ニ被及可然ト奉存候、若 御國體ヲ被爲破候テ、和親交易

御許容ニ相成候得ハ、其禍攘夷之害ヨリ甚クト奉存候、其故ハ、彼五蠻申合、大軍ヲ以テ來寇仕候共 皇國之人心一致シテ攘斥候得ハ、自ラ義勇之士奮發激勵仕リ、敵愾之心ヲ引起シ可申、且刀鎗弓矢等、我長スル所ヲ以テ、力戰防禦仕候得ハ、定テ御大捷可被爲在、其時コソ 御國威ヲ宇内ニ照耀可被遊、若又萬萬一連年之防戰ニ、内地疲弊危殆ニ被爲及候共、天祖 大祖ヲ奉始 歷朝之 聖靈、別テ 先朝在天之 神靈ニ被爲對、少シモ被爲報候所無之ト奉存候、此儘ニテ、洋夷之制ヲ被爲受候得ハ、天下有志ノ者而已ナラス、無智之匹夫匹婦ニ至ル迄、皆 天朝ヲ憤怨シ奉リ、離叛瓦解ト相成可申、彼逆賊慶喜、大罪ヲ蒙リ候本ハ、外夷交際ヨリ起リ候間、是又不伏ヲ抱キ可申、外夷ハ、扱置、蕭牆ノ内ニ大禍生シ可申、若又内地大變ヲ不生候得ハ、不數年シテ 皇國悉ク夷風ト相成、君父ヲ無シ、上下ヲ亂リ、妖邪腥羶亂臣賊子ノ域ト可相成ハ、必定之儀ト奉存候間、實ニ痛哭流涕、長、大息ニ不堪候、黨子婦女子之身ヲ以テ、天下重大之事件容易ニ獻言仕候ハ、闔ヲ出ルノ戒ヲ犯シ、僭踰不遜之罪難免候得共、漆室女、鍾離春之輩、皆處女ヲ以テ國事ヲ憂候テ、古人モ之ヲ非トセラレス候間、區々之赤心、坐ナカラ 神州、夷狄ニ沈ミ候ヲ見ルニ、不忍奉獻言候、萬一狂瞽之管見、芻蕘之謀慮等 聖聽ニ被爲達候儀モ被爲在候得ハ、鼎鑊刀鋸之戮ヲ受候共、聊辭セサル所ニ御坐候、在 廷樞要之御方々モ、愚衷御憐察ニテ、此旨可然御 奏聞所希候、誠惶誠恐、死罪死罪謹言、

處子 菅原朝臣 薫子 泣血拜上

内國事務局影書

○本書上申ノ月日ヲ失ス、薫子ハ伏見宮家臣若江量長ノ女ナリ

一四九 二月十五日 山内豊範(高知藩主家來石川石之助ヨリノ
(三月八日) 届書
堺事件發生ノ件

今日七ツ時頃泉州堺新地ヲ申所ニ外國人廿人斗致上陸及亂妨候趣町人共々堺出張之向ニ申出候ニ付人數之者差出取締爲致候由之處外國人貳人斗應接中壹人逃去如何應答仕り候哉兵隊之内より及砲發役手之者ヲ差止相殘壹人乗船爲致差返置取締之人數等爲引取申候趣猶委細之義ニ取調御届可仕候得共同所件之通申來候間不取敢右之段御届仕候以上

二月十五日

山内土佐守内

石川石之助

一五〇 二月十五日 大坂裁判所ヨリ高知藩堺出張隊長ヘノ達書
(三月八日)

堺表取締罷免ノ件

土州

堺出張

隊 長

堺表取締被

仰付置候處被成御免候間早々人數引揚當地屋鋪ニ屯集爲致置届可申出候事

二月十五日

裁判所印

一五一 二月十五日 英吉利公使館書記官ヨリ
(三月八日) 舊幕府外國總裁河津祐邦(伊豆守)宛

局外中立布告書送付ノ件

附屬書

一、英吉利公使ノ局外中立布告書寫

二、局外中立ニ關スル英國法規拔萃

丁丑 一 明治元年二月十五日 (三月八日)

第 六 號

Yokohama, March 8, 1868.

Sir,

I have the honor to transmit to you a copy of the Notification lately issued by Her Majesty's Minister in Japan enjoining all British Subjects to remain neutral in the hostilities of which this country has unfortunately recently become the scene. Annexed to the Notification is an extract from the British Law bearing on the subject of Neutrality, which was enacted nearly fifty years ago, and which I promised to communicate to you when I had the honor of calling on you a few days since.

With respect and consideration

SIDNEY LOCOCK

Kawadzu Idzu no Kami,

Minister for Foreign Affairs.

etc. etc. etc.

(監 署 印)

Official Notification

Whereas the Undersigned has been officially informed that hostilities have commenced in this country between His Majesty the Mikado and the Tycoon, and whereas a strict and impartial neutrality should be observed by all British subjects in the contest

between the said contending parties, the Undersigned, Her Britannic Majesty's Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary in Japan, hereby calls upon all Subjects of Her Majesty to abstain from taking part in any operations of war against either of the contending parties, or in aiding or abetting any person in carrying on war for or against either of the said parties, and to avoid the infringement of any British Law or Statute made and provided for the purpose of maintaining neutrality in foreign or civil contests or of the Law of Nations relating thereto.

The Undersigned hereby publishes for the information of Her Majesty's Subjects the following three sections of the Statute made and passed in the 59th year of the reign of His Majesty King George the Third, commonly called the Foreign Enlistment Act, and further warns all subjects of Her Majesty that if any one commits any violation or contravention of the Law of Nations relating to Neutral or Belligerent Rights, as for example, by entering into the Military Service of either of the said contending parties in any capacity, or by serving in any capacity on board any ship or vessel of war, or transport, of or in the service of either of the said contending parties, or by enlisting or engaging in any such service, or by procuring or attempting to procure other persons to do so, or by fitting out, arming, or equipping any ship or vessel to be employed as a ship of war or transport by either of the said contending parties; or by carrying officers, soldiers, des-

丁丑 一 明治元年二月十五日 (三月八日)

第 六 號

patches, arms, military stores, or materials, or any article or articles considered and deemed to be contraband of war, according to the Law or Modern Usage of Nations, for the use or service of either of the said contending parties—then in all such cases, every British Subject so offending will incur and be liable to the several penalties and penal consequences imposed or denounced by the Statute aforesaid or by the Law of Nations, and may forfeit all claim to Her Majesty's protection and to the rights and privileges of the Treaty concluded between Great Britain and Japan.

Given under my hand at Hiogo this 18th day of Feb. A.D. 1868.

(S'd) HARRY S. PARKES.

Her Britannic Majesty's Envoy

Extraordinary and Minister Plenipotentiary in Japan.

(監國神川)

Extracts from an Act to prevent the Enlisting or Engaging of His Majesty's Subjects to serve in Foreign Service, and the fitting out or equipping, in His Majesty's Dominions, Vessels for Warlike purposes, without His Majesty's Licence.

(3rd July, 1819.)

II.—And be it further declared and enacted, that if any natural-born subject of

His Majesty, his heirs and successors, without the leave or licence of His Majesty, his heirs or successors, for that purpose first had and obtained, under the sign manual of His Majesty, his heirs or successors, or signified by Order in Council, or by proclamation of His Majesty, his heirs or successors, shall take or accept, or shall agree to take or accept, any military commission, or shall otherwise enter into the military service as a commissioned or non commissioned officer, or shall enlist or enter himself to enlist, or shall agree to enlist or to enter himself to serve as a soldier, or to be employed or shall serve in any warlike or military operation, in the service of or under or in aid of any foreign prince, state, potentate, colony, province, or part of any province or people, or of any person or persons exercising or assuming to exercise the powers of government in or over any foreign country, colony, province or part of any province or people, either as an officer or soldier, or in any other military capacity; or if any natural-born subject of His Majesty shall, without such leave or licence as aforesaid, accept, or agree to take or accept, any commission, warrant, or appointment, as an officer, or shall enlist or enter himself, to serve as a sailor or marine, or to be employed or engaged, or shall serve in and on board any ship or vessel of war, or in and on board any ship or vessel used or fitted out, or equipped or intended to be used for any warlike purpose, in the service of or for or under or in aid of any foreign power, prince, state, potentate, colony, province, or part of any province or

people, or of any person or persons exercising or assuming to exercise the powers of government in or over any foreign country, colony, province or part of any province or people; or if any natural-born subject of His Majesty shall, without such leave or licence as aforesaid, engage, contract, or agree to go, or shall go to any foreign state, country, colony, province or part of any province, or to any place beyond the seas, with an intent or in order to enlist or enter himself to serve, or with an intent to serve in any war-like or military operation whatever, whether by land or by sea, in the service of or for or under or in aid of any foreign prince, state, potentate, colony, province, or part of any province or people, or in the service of or for or under or in aid of any person or persons exercising or assuming to exercise the powers of government in or over any foreign country, colony, province, or part of any province or people, either as an officer or a soldier, or in any other military capacity, or as an officer, or sailor, or marine, or any such ship or vessel as aforesaid, although no enlisting money or pay or reward shall have been or shall be in any or either of the cases aforesaid actually paid to or received by him, or by any person to or for his use or benefit; or if any person whatever, within the United Kingdom of Great Britain and Ireland, or in any part of His Majesty's dominions elsewhere, or in any country, colony, settlement, island, or place belonging to or subject to His Majesty, shall hire, retain, engage, or procure, or shall attempt or endeavour

to hire, retain, engage, or procure, any person or persons whatever to enlist, or to enter or engage to enlist, or to serve or to be employed in any such service or employment as aforesaid, as an officer, soldier, sailor, or marine, either in land or sea service, for or under or in aid of any foreign prince, state, potentate, colony, province, or part of any province or people, or for or under or in aid of any person or persons exercising or assuming to exercise any powers of government as aforesaid, or to go or to agree to go or embark from any part of His Majesty's dominions, for the purpose or with intent to be so enlisted, entered, engaged, or employed as aforesaid, whether any enlisting money, pay, or reward shall have been or shall be actually given or received, or not; in any or either of such cases every person so offending shall be deemed guilty of a misdemeanor, and upon being convicted thereof, upon any information or indictment, shall be punishable by fine and imprisonment, or either of them, at the discretion of the Court before which such offender shall be convicted.

VII.—And be it further enacted, That if any person, within any part of the United Kingdom or in any part of His Majesty's dominions beyond the seas, shall, without the leave and licence of His Majesty for that purpose first had and obtained as aforesaid, equip, furnish, fit out, or arm, or attempt or endeavour to equip, furnish, fit out, or arm, or procure to be equipped, furnished, fitted out, or armed, or shall knowingly aid, assist,

or be concerned in the equipping, furnishing, fitting out, or arming of any ship or vessel, with intent or in order that such ship or vessel shall be employed in the service of any foreign prince, state, or potentate, or of any province or people, or of any person or persons exercising or assuming to exercise any powers of government in or over any foreign state, colony, province, or part of any province or people, as a transport or store ship, or with intent to cruise or commit hostilities against any prince, state, or potentate, or against the subjects or citizens of any prince, state, or potentate, or against the persons exercising or assuming to exercise the powers of government in any colony, province, or part of any province or country, or against the inhabitants of any foreign colony, province, or part of any province or country, with whom His Majesty shall not within the United Kingdom, or any of His Majesty's dominions, or in any settlement colony, territory, island, or place belonging or subject to His Majesty, issue or deliver any commission for any ship or vessel, to the intent that such ship or vessel shall be employed as aforesaid, every such person so offending shall be deemed guilty of a misdemeanor, and shall, upon conviction thereof, upon any information or indictment, be punished by fine and imprisonment, or either of them, at the discretion of the Court in which such offender shall be convicted; and every such ship or vessel, with the tackle, apparel, and furniture, together with all the materials, arms, ammunition, and stores, which may belong to or be on board of any such ship or

vessel, shall be forfeited; and it shall be lawful for any officer of His Majesty's customs or excise, or any officer of His Majesty's navy who is by law empowered to make seizures for any forfeiture incurred under any of the laws of trade and navigation, to seize such ships and vessels aforesaid, and in such places and in such manner in which the officers of His Majesty's customs or excise and the officers of His Majesty's navy are empowered respectively to make seizures under the laws of customs and excise, or under the laws of trade and navigation; and that every such ship and vessel, with the tackle, apparel and furniture, together with all the materials, arms, ammunition, and stores, which may belong to or be on board of such ship or vessel, may be prosecuted and condemned in the like manner and in such courts as ships or vessels may be prosecuted and condemned for any breach of the laws made for the protection of the revenues of customs and excise, or of the laws of trade and navigation.

VIII.—And be it further enacted, That if any person, in any part of the United Kingdom of Great Britain and Ireland or in any part of His Majesty's dominions beyond the seas, without the leave and licence of His Majesty for that purpose first had and obtained as aforesaid, shall, by adding to the number of the guns of such vessels, or by changing those on board for other guns, or by the addition of any equipment for war, increase or augment, or shall be knowingly concerned in increasing or augmenting, the

warlike force of any ship or vessel of war, or cruiser, or other armed vessel, which at the time of her arrival in any part of the United Kingdom or any of His Majesty's dominions was a ship of war, cruiser, or armed vessel in the service of any foreign prince, state, or potentate, or of any person or persons exercising or assuming to exercise any powers of government in or over any colony, province, or part of any province or people belonging to the subjects of any such prince, state, or potentate, or to the inhabitants of any colony, province, or part of any province or people belonging to the subjects of any such prince, state, or potentate, or to the inhabitants of any colony, province, or part of any province or country under the control of any person or persons so exercise the power of government, every such person so offending shall be deemed guilty of a misdemeanor, and shall, upon being convicted thereof upon any information or indictment, be punished by fine and imprisonment, or either of them, at the discretion of the Court before which such offender shall be convicted

(右本文和譯文)

戊辰二月十七日

千八百六十八年第三月八日横濱

近日日本に在る英國公使より此度不幸にして國內に起るる戦争ニ付英國臣民

盡く中立を爲る旨發布告せり書の寫を余謹る貴下呈を右布告書に附るる
 事のハ臣民中立之事(臣民トツツカム)に拘りるる英國法律の拔書也其法ハ已に殆と五十年間施
 行を致るものふし又過日而晤之節貴下へ送るる旨を約しるるもの也拜具謹言

呈

シトニローコツク

外國事務總裁

河津伊豆守貴下

(續通信全覽)

(右附屬書一ノ和譯文)

同布告書并法律書拔萃

公 告

下名之拙者職務を以て當國に於て天皇陛下と大君之間に戦端を開きし事
 告け而て右雙方之戦争ニ付總て英國之臣民ハ嚴密公平なる局外中立を遵守せ
 へき旨を告げんる爲め爰ふ日本在駐英國皇帝陛下之特命全權公使ある下名總
 る英國皇帝陛下の臣民は右雙方之内何れに對して戦争を加へたり或ハ其一方

よ對して戦争せんる爲或ハ人を輔佐し或ハ懲罰を其事を戒む而も内外の戦争
 におもえ局外中立を固守せん爲ふ議定ありし英國の律法即右に關係しむる萬
 國公法よ背犯せざらん事を要す下名爰ふ英國皇帝陛下之臣民よ告諭せんり爲
 英國皇帝陛下第三世チョーヂ之治世第五十九年ふ決定あり又通例ホレイン、イ
 ンリストメント、アクト」と名くる律法即左之三章を爰ふ布告し以て英國皇帝陛
 下之臣民ふ總て下條之趣を命を即若人あり又局外中立之權限又ハ交戦之律例
 よ關を於萬國公法を違背を其事あらハ譬へハ雙方之内何をの之軍籍よ入る或
 ハ雙方之内孰れも屬する船或ハ之よ雇われぬ船若くハ軍艦又ハ運送船之
 内よ乗組ミ或ハ自ら其役を雇をせ或ハ他人をし又爾く爲さしめ或ハ爲さしめ
 んとし或ハ雙方之内何をの由又軍艦或き運送船とし又用ひらるる船舶若
 くハ軍艦を戦備し或ハ艦装し或ハ雙方の内一方よ士官兵卒信書兵器彈藥兵糧
 等を運送し其使用よ供し或ハ萬國公法或ハ萬國輓近の律例よ因て戰時之禁制
 物と考定あり物品を運送を於こと等は亦て總て此等之禁を犯せぬ英國臣民ハ
 皆前件國律或ハ萬國公法よ由て定立あり種々の罰則及び刑律を受くる者ふ

して併て英國皇帝陛下之保護及び大不列顛國と日本國との間よ取締ひぬる條
 約中よ掲る權利及び其特典を要する之權を失ふ者と爲るをし
 紀元一千八百六十八年二月十八日兵庫ふ於て又手記を

日本在駐英國皇帝陛下の特命全權公使

ハリースハークス手記

(續通信全覽)

(右附屬書二ノ和譯文)

英國殿下 英王シオールの許容なく英國臣民の外國の兵よ加て、其事或ハ殿下の
 領地中よ於て又軍事の爲る船艦を備ふる事を禁むる書付の拔書

千八百十九年第七月三日

第二ケ條

英國殿下及び其後嗣の臣民ハ英國殿下或ハ其後嗣の手記ある免許なきよ或ハ
 評議官の命令或ハ英國殿下或ハ其後嗣の觸書なきよ外國の君主殖民地州郡又
 ハ州郡或ハ人民の部分の爲めよ或ハ外國其殖民地州郡又ハ州郡或ハ人民の部

分を支配せよ人或ハ之を奪領せよ人の爲に軍事を拘りて其務めをなさん事を約し或ハ之をかし其外士官或ハ兵卒として其兵を加へる事を約し或ハ之を爲す時ハ又英國殿下の臣民上の如き免許なきは外國の爲に其軍艦中よ於て或ハ軍事に用ゆる船或ハ之に用ひんとす船の中よ於て又士官戦卒或ハ船乗として仕へん事を約し或ハ之を爲す時ハ又大不列顛及び愛蘭の中其外英國殿下に屬しむる國殖民地居留地等よ居る者外國の爲に人を雇ひ上の如く水陸共士官兵士船乗等として之を用ゆる事を務め或ハ之を用ゆる時ハ給金或ハ褒賞を已よ得ぬ事ふもせよいま之を得るとも皆不埒の行跡なれハ早く其罪の實否を正し裁判所の意に從ひ過料を取上入牢せしむる歟又ハ過料或ハ入牢の内何れも歟之を罰せべき者なり

幕府引繼ノ舊記ニハ只此拔萃書ノミヲ存シ前ニ掲ケシ公使ノ公告ト次ニ掲ケシ七條ノ拔萃トヲ闕ケリ然ルニ明治四年八月中文書權大佑阪田諸遠其他數員借寫補闕ノ命ヲ奉シ各公使館ニ詣リ往復書翰謄寫ノ際書記官サトウヨリ此前後二通ノ横文ヲ借り當時ノ譯官ニ附シ翻譯セシメ乃チ附シ

テ舊記ノ闕タルヲ補フ

編者註 右註記記載ノ第七條ノ譯文ハ意味不明ナリシヲ以テ更ニ其ノ後石川彝之ヲ再譯シ記録中ニハ二個ノ譯文アリ左ニ掲クルモノハ再譯ノ分ナリ

第七條

聯合王國內各部若しくは海外屬國各部に在る者豫め皇帝陛下よ上よ説く所の如く特許を得る者非し又故意に船舶を儀裝準備或ハ兵備し又ハ其謀略を爲し又ハ其用意を爲し又ハ其情を知之を爲す者を補助し若くハ關係し又以て外國の王侯邦國或ハ君主の爲め若しくはハ州郡或ハ人民の爲め若しくはハ其邦國州郡或ハ人民の爲め若しくはハ其邦國州郡或ハ其一部人民の主治者の爲めよ運船或ハ庫船よ供せんとし又ハ聯合王國內或ハ藩屬國內或ハ皇帝陛下所屬の殖民國土若しくは島嶼に於て又出巡又ハ攻撃の爲め船舶を使用するをの特別委任狀を附與しむる者非し又外國の王侯邦國或ハ君主に對し或ハ其臣民に對し或ハ其屬地州郡若しくは其一部人民の主治者に對して出巡若しくはハ攻撃せんとしむる如き所業ある者ハ之を輕罪犯人と爲し告訴狀若しくは陪審

告發狀を得て應之を審理せしむべき裁判廳の判決を以て罰金及禁錮の刑に處し
 或る單ふ其一刑に處せしむるにして其船舶ハ之に附屬する所の一切の船具器財
 什物及び積載する所の一切の材料兵器軍需物貨を併せ之を沒收せしむる又皇
 帝陛下の海關或ハ稅關の官吏及び通商航海規則を犯ししむる沒收品を拘拿する
 の公權を得るる海軍士官ハ海關、稅關、通商、航海の諸規則に依り各其拘拿を爲す
 るべき處に於て例に倣ひ前節に説く所之船舶を拘拿せしむるにして該船舶及び所
 屬の船具、器財什物及び積載の諸材料兵器軍需物貨ハ平時に於て海關稅國產稅
 の歳入及び通商航海規則を保護する爲めに犯則の船舶を處分定罪する所の之
 裁判廳に於て又同例に依り之を處分定罪せしむる

第八條

若し大不列顛および愛倫の合衆王國又ハ海外に在る英國皇帝陛下の領地内に
 於る前以て格段英國皇帝陛下の免許免狀を得ずして船に大砲の數を増せしむ
 るハ備ふる處の大砲を他の大砲と取替る歟又ハ軍備を増せしむる歟又ハ合衆王國內或
 ハ英國皇帝陛下の領地内に到著せし時已に外國に君或ハ外國政府の命を奉し

又ハ植民地、州、郡或ハ其一部分におる又政府の權を執り行ふ人又ハ人々の命令
 を受る者まゝハ外國に君或ハ外國政府の配下に屬する人民又ハ政府の權を執行
 する人或る人々の管屬する植民地州君或ハ其一部分に住する人ハ屬する人民の
 指揮を受ける船舶軍艦、巡洋艦其他軍備ある船舶の軍勢を増加し若しくハ之を知
 るべきに於て關係する人或ハ人々ハ犯法罪あるものと見做し而又告知し依り
 有罪に決せしむる罰金并ふ禁錮を以て之を罰せしむる或ハ右犯人を有罪と決した
 る裁判所の裁量に依り罰金或ハ禁錮の一を以て罰せしむるを又決定す

(續通信全覽)

一五二 二月十六日 (外國事務掛)伊藤俊輔(同)寺島陶藏(同)岩下左
 (三月九日) (次衛門ヨリ) 外國事務御用掛宛

堺事件ノ情報請求ノ件

(元註) 年省中もの

神戸外國人居住地之儀ハ明日取調之上御返事可申上候

一五二 明治元年二月十六日(三月九日)

三八〇

英蘭士が掛合有之俊介罷越候處英國軍艦今夜四ツ時分大坂出帆八ツ時分著右
の報知佛人を四人及殺害且佛國公使并船將等境を乗船致候儀遮候付乗船不相
叶行衛不相分との趣ニ候内水夫一人ハ胸中を被打抜既ニ絶命之様子行衛不相
分者以上七人有之候との事候付當地早々警衛差出候様与之事ニる兩藩人數へ
申渡當地之人氣成丈不動搖様操出シ夫々手當申渡置候右之次第柄委敷不相分
候るに應接ニも甚不都合故早々御取調之上成行三時限を以御申越可被下候右
爲可申上態々飛脚取仕立如此御坐候以上

二月十六日曙

六ツ時

岩下佐次衛門

寺島陶藏

伊藤俊助

外國事務

御用掛中様

一五三

二月十六日 堺駐在高知藩兵隊司令士ヨリ高知藩へノ
(三月九日) 届書

堺事件發生事情ノ件

泉州堺爲取締被差置罷在中昨十五日外夷海濱ニ於る亂暴致し候趣市人よて訴
出候ニ付直様立越候含よて人數相調候處御軍監府が配下引卒急々出張候様御
沙汰よ付即罷出候處御軍監府中御出張ニ相成居候る道中よ於外夷亂暴之場所
御尋申候處手引之者差立候様御演舌有之中市人我藩御人數も西を目掛走り行
候よて手引來を不待跡を慕ひ濱邊市中へ參候處戸を閉門を鎖大ニ恐懼之模様
有之如訴夷人亂暴致居と相心得走り行候中同所ニる則夷人兩人の御人數之中
應接ニ及否や行合共々應接致候得とも通辯官之者附居不申彼勿論言語不通逃
走之形有之より先相執へ然ル後談判を遂ケ可撃を討候含ニ御座候處果して兩
人之中壹人脱走いふし剩へ其節御印之幟を横取し稍シて取歸し候へ共右等現
在之暴舉況や最初より外國奉行之命を不傳通辯官をも不取我政府之許しを不
受卒然と入港いふし終ニ上陸猥ニ婦女子を恐怖せし免或之社閣を猥に穢し候

一五三 明治元年二月十六日(三月九日)

三八一

一五四 明治元年二月十六日(三月九日)

三八二

段一と言語ニ絶し候次第に付彼逃ルを追ひ同湊ニ至候處彼等兩人ニ有無之十餘人計バツテイラヨ乗り居同船に彼夷人も乗移り已ニ出船之形相顯候處如此大暴發之夷人其儘返し候るに第一御國辱ニ相成而已ならに取締之兵として右様之如く返し候るに私職掌も相立不申と相居り不得止御軍監府之御下知をも不待爲打拂候間此段御達候已上

辰二月十六日

一五四

二月十六日(外國事務總督伊達宗城ヨリ
三月九日) 副總裁三條實美同岩倉具視宛

堺事件交渉狀況報告ノ件

附屬書

一、二月十六日佛蘭西公使ヨリ外國事務總督伊達宗城(同)

東久世通禧宛

堺事件ニ關スル抗議申入ノ件

二、堺事件佛蘭西人側死傷者行衛不明者數調書

宇和島少將

三條大納言殿

岩倉金吾殿

以飛檄得貴意候然之昨夜以來返々及報告候於堺佛与土藩之事今朝ニ至り土藩方爲取調候處何分佛に答及び候様明白ニ不至無止東久世一同佛公使宿寺へ罷越及應接候心得之處多用云々ニ有不致面會候尤無程書通ニ有懸合越通辯德川臣鹽田三郎也ヲ以申候故引拂英公使宿寺ニ參居候處別紙翻譯相添差越候故寫差出し實ニ不容易大危急ニ至焦慮當惑此時ニ御坐候勿論無他策故五名之者存亡ニ不係相渡義緊要ニ付追々手配之上東久世ニも行向相成候此上兩三人ニ有も尋出候ハ、亦談判之手懸出來可申萬一不尋出時必ス開事端右可及力平穩ニ應接ハ可致心得候處全可相整甚懸念仕候先々不取敢此段申上候一上京之時も此事件發候ニ付取消之姿ニ相成候是まで御鼎力日頃迄御沙汰相成今一步之處ニ有も意外之憂患と相至御互ニ切齒痛憤ニ不堪乍然此度も嚴當然之御裁斷届候ハ、右挽回も可仕尙是相伺可申候

一五四 明治元年二月十六日(三月九日)

三八三

一佛伊李亞ハ第二時乘船佛之外明朝出帆之由英蘭ハ明早天乘船出港を未_レ不
相分候

概略右之趣申上候恐_レ

二月十六日

二仲只今堺表より家來壹人歸候處申出候處二人ハ死骸海中より尋出候趣又
來書之翻譯二人ハ木戸輩小松ガ相廻候方ニ仕候條此段御斷申上置候以上

編者註 本號文書ノ末尾ノ二仲ハ記錄申ノ文書ニハ記載ナキモ「外國事務局筆記」ニ記
載アルニ依リ茲ニ附記シタルモノナリ

(附屬書一)

御門政府

外國事務掛

東久世前少將 兩閣下へ
伊達伊豫守

昨日三月八日佛國コルウエツト、エツト、デユブレツキス船乗組候者右船指揮之命ニ
より士官兩人附添堺港に相越港内深淺之測量致居候處土佐之人無故此をのね

間近ニ迫り烏銃を以て俄ニ襲ひ打拾七人之内三人既ニ即死七人手疵を負ひ纒
ニ壹人無難脱遁レ其他之者ハ但シ士官一人附添へ何處に行キシヤ更ニ不相分
候如此之事件ハ世間稀ニ見聞致候事ニ最戰_(原註本ノマ)狭之所行と可申就る_(マ)佛國ミニ
ストルウエヌス船中の一ト先引取居尙右行方不相知人々殘ラス死生ニ抱_(マ)ら
れ此方_(原註本ノマ)に御差返し被成候様明朝第八時迄猶豫致居候間此段大坂を領せらる當
時之政府に申進置候萬一右之通御處置無之ニ於てハ何様之御譯御申入被成候
とも夫ニ係セ_(原註原書不)はか、る文明國之法則ニ違ん事、_(マ)か_(マ)は殊ニ此程取極免し
約定及條約之文ニ背達し又當今
御門政府近傍ニおのゝ重役を勤め本と其大名之家來之處置行_(マ)れ候是_(マ)對し
相當ト心得候所置ニ及候事ニ有之候間此段申進置候謹言

於大坂千八百六十八年

三月九日

日本在留

佛國全權ミニストルレオンロセス

(附屬書二)

佛人与曳合候人数

- 一 ^(即ち) 一則死 貳人
- 一 一手負 七人
- 一 五人之行衛不相分
- 一 六人無事歸舟

編者註 本書ハ記録目錄ニハ前記佛蘭西公使ノ書翰ノ附屬ト記載シアリ但シ公使書翰ニハ即死者三人トアルニ本書ニハ即死二名トアリ

一五五 二月十六日(外國事務總督伊達宗城ヨリ)
 (三月九日) 佛蘭西公使宛

堺事件死傷者取調ノ件

只今四字ニ東久世界表方歸坂セリ則チ彼地ニおる又掛り之役人ニ命シ海底を探索せしめ追々死骸を引上るり其死骸を委細ニ取調其數及ひ手疵等ニ至るま

て朝八字迄ニ一左右を報せんとま謹言

二月十六日夜四字

二 自我等も直ニ此始末を應接之爲至るるし路程隔るるを以少しく遅引ある時幸ニ寛恕之意を希ふ

宇和島少將

佛國

レヲンロセス 閣下

一五六 二月十六日 參與(兼外國事務掛)五代才助等作成ノ堺
 (三月九日) 事件佛蘭西人死體調書

海底ヨリ見出しるりし死骸疵書左ニ

一 士官ト見ヘタル者壹人

額ヨリ腦を抜ル砲丸一ヶ所左手脈處ヨリ手ノ内を抜砲丸一ヶ所左ノ親指ノ先方高指ノ先ヲ打切ル

一水夫 一名

右目ニ疵有り外ニ無疵

一水夫 一名

背ハ脇腹を打抜

一水夫 一名 無疵

前ニ手疵ヲ負候ものニ抱キ付沈没せり

一水夫 一名

兩眼打抜アキト少しく疵あり脇腹打抜

一水夫 一名

口ノ脇ヨリ打込裏へ抜ル

一水夫

背ヨリ右ノ腹乳ノ上ニ抜ル

右之通相違無御座候

二月十六日十二字

五代才助
西園寺雪江
中井弘藏

一五七

二月十六日 參與(兼外國事務掛)小松帶刀ヨリ
(三月九日) 參與大久保一藏宛

堺事件ニ關シ參與下坂ヲ請フノ件

小松帶刀

大久保一藏様

御用封者申上候通土州堺表ニ有云々之儀之誠ニ不容易重大之事件ニ付自速ニ御評議總裁并内國事務外國事務早々御下坂相成深く御手不被召付る之實ニ不相濟義ハ勿論之事ニ有則御吟味之相決候之儀急速相片付不申候有之以來之爲夫限之事と奉存候故是非參與之内よりも四五人之處と下坂被仰付度候佛國之事ニ御坐候得共々様之事ニ相成候と各國公使も議論も致し候事ニ御坐候

得之久世公宇和島公御出ニ之御坐候得共下之處甚無人五代壹人ニ之誠ニ込入候付速ニ御下坂之處御周旋被下度奉願候晝夜外國人ハ曳合内國之人數取鎮方之勿論難捨置公事訴訟も有之壹人ニ之實ニ致方も無之誠ニ苦慮千萬御推察可被下候只今より佛公使等ハ談シニ出掛差急キ用向迄早々如此御坐候何卒御執計可然御頼申上候早々以上

二月十六日

一五八 二月十七日
(三月十日)

外國公使ノ參朝ニ關スル布告

先般外國御交際之儀
叡慮之旨被 仰出候ニ付之萬國普通之次第を以各國公使等御取扱被爲 在
候然ル處此度
御親征被 仰出不日

御出輦被爲遊候ニ付之御餘日も無之御事ニ付各國公使急ニ參 朝被 仰付
候ニ付此段可相達被 仰出候事

(太政官日誌)

一五九 二月十七日
(三月十日) 外國トノ和親ニ關スル諭告

外國御應接之儀之上代
崇神

仲哀御兩朝之頃より年次逐る盛ニ成來り遠邇之各國歸化貢獻有之其後唐國と之常ニ使節相往來或ハ居留シ其交際も亦自ら親敷候此時ニ當り船艦之利未タ開けず故ニ三韓四近と唐國而已西洋各國之事と暫差置印度地方尙明確から候然るニ近代ニ至り之萬民所知之如く船艦之利航海之術其妙汝窮め萬里之波濤比隣之如く相往來し一時幕府之失措トハ乍申
皇國之政府ニ於て誓約有之候事ハ時之得失ニ因テ其條目と可被改候得共其大

體に至り候る之妄は不可動事萬國普通之公法ニして今更於朝廷是は變革せられ候時之却る信義を海外各國は失はせられ實以不容易大事ニ付不被爲得止於幕府相定置候條約を以御和親御取結は相成候既ニ先般御布令被爲在候上と

皇國固有之御國體と萬國之公法とは御斟酌御採用ニ相成候之是亦不被爲得止御事ニ候仍る越前宰相以下建白之旨趣ニ基に廣く百官諸藩之公議は依り古今之得失と萬國交際之宜は折衷せられ今般外國公使入京參

朝被 仰付候元來膺懲之舉ハ萬古不朽之公道として縱令和親を講ずるとも其曲直ニ依る各國不得止之師相起り候其例シ不少付ると攻守之覺悟勿論之事は候得共和親之事ハ於

先朝既は開港被差許候ニ付

皇國と各國と此和親爰は相始り居候處其節之幕府に御委任之儀ニ付諸事交際之儀於幕府取扱來り候然る處此度王政一新萬機從

朝廷被 仰出候ニ付ると各國交際之儀直ニ於

朝廷御取扱ニ可相成と元より之御事ニ候今や御初政之御時總而之事件之全く總裁始當職之責ニ有之候何分某等不肖之身は以て大任を負擔し非常多難之時は逢候上と深く恐懼思慮は加へ天下之公論は以て及

奏聞今般之事件御決定被爲在候且國內未々定らず海外萬國交際之大事有之候得と普天率濱協心勦力共ニ

王事ニ勤勞し萬國交際は始萬機悉く既往將來は不論無忌憚詳論極諫有之度只急務とする處と時勢ニ應し活眼を開き従前之弊習を脱し

聖徳は萬國に光耀し天下は富岳之安に置た

列聖在天之神靈を可奉慰上下舉る此趣意を可奉謹承候事

二月十七日

太政官代

三

職

(太政官日誌)

一六〇 一六一 明治元年二月十七日(三月十日)

三九四

一六〇 二月十七日
(三月十日)

堺事件佛蘭西人死體引渡ノ件

二月十七日

一昨日海底方引上候佛人死骸今朝軍艦に持參引渡相濟候事
但死骸疵書昨日之處ニ有之通紙面相渡候事

編者註 本號文書ハ一五六ト關聯セルモ作成者記載ナシ

一六一 二月十七日
(三月十日)

高知藩家老山内隼人ヨリノ届書

堺事件發生事情ノ件

(山内土佐守家老方左之通届出候事)

泉州左海取締中佛人と混雜之儀ニ付別紙を以て御達候得共未不調之筋も有
之追々承合候處軍器に手を掛候一件ハ即銃隊之眞先ニ爲持候幟印を異人之

手ニ持罷在終ニと取戻し候由

一夷人市中亂妨いせし罷在候旨嚴敷注進有之候事件ハ市中往來人之中婦女子
ニ對し手を取り或之佛殿に唾吐杯いとし候を以恐怖いせし依る度々注進い
とし候由御座候以上

二月十七日

山内土佐守内

山内隼人

一六二 二月十七日
(三月十日)

高知藩家老山内隼人ヨリノ届書

堺事件發生事情ノ件

去十五日堺表新地と申處ニおのゝ外國人上陸致亂妨候趣土地之者方申來候ニ
付遂應接制東方爲仕人數を引軍監之者右亂妨之土地に立越候處外國人貳人罷
在候ニ付應接可被致心得を以近寄り候得共通辯官も付添不申故言語對談不取

一六二 明治元年二月十七日(三月十日)

三九五

調中壹人逃去候より其人數之内追欠^{ウケ}行猶も亂妨之事件可相糺心得ニ候處小舟を可漕出體ニ付前件亂妨之仕業相恐右等之爲體ニ可有之与隊長とも相心得軍監之差圖をも不請右小舟を目當ニ及砲發候中軍監共立越漸、砲發差留申候得共前條廉、不行届之仕業ニ付不取敢軍監共并隊長之面、謹慎罷在候様申付御座候此上御公許之品ニ寄如何様共所置可仕与奉存候此段御届仕候以上

二月十七日

山内土佐守内

山内 隼 人

一六三 二月十七日 山内豊範(高知藩主)へノ御沙汰書
(三月十日)

堺事件ニ關シ父子同心速ニ叡慮ヲ安ンシ奉ル可キノ件

戊辰二月十七日

土佐 少將

別紙之通同姓前少將に御沙汰被

仰出候此度之事件實以不容易次第ニる新ニ各國御交際被爲在先般御布令有之候得共未萬國之公法ニ依リ御交際之御規則も不相立殊ニ御國內も未御平定ニ立至らば内外之事件日夜御寢食も不被爲安候之折柄り、互患害ヲ醸成し深く

宸襟ヲ被爲惱候少將事ハ當主之儀ニも有之

皇國之御艱難厚く相心得父子同心速ニ奉安

叡慮候様被 仰出候事

編者註 別紙ハ明示ナキモノ一六四ト同一ノモノナルヘシ

一六四 二月十七日 山内豊信(前高知藩主)へノ御沙汰書
(三月十日)

堺事件ニ關シ下坂スヘキノ件

土佐(前)少將

一左之通於京都御沙汰

昨十六日^(元ノ禮也)於堺港佛國人深淺之測量致居候處其藩士無故砲擊致候趣不容易儀之申迄もナク各國新ニ御交際之儀と先般

御布令も有之萬國之公法ニ依リ參

朝等之儀も自分及建言御採用も被爲在候折柄右様之次第出來候るに被對各國信義不被爲立殊

朝廷御興廢ニも拘リ候危急之大事全於其藩釀成之儀於前少將格別盡力至當之應接所置可致候別紙佛國公使ヨリ差出候間申達候事

但病氣之趣ニ候得共

皇國浮沈之重大事ニ候間精々所勞相扶下坂可致候事

編者註 別紙ハ明示ナキモ一五四ノ附屬書佛國公使ヨリノ來翰ト同一ノモノナルヘ

一六五 二月十八日(三月十一日) 外國御用掛陸奥陽之助ヨリノ報告

堺事件發生事情ノ件

二月十八日

一陸奥陽之助方邸内之様子今日申出候事左之通

今二月十五日佛人泉州堺に罷越候趣外國掛役所より總年寄に直達有之候處取締役場にて通達無之を以町端大和橋ニ於て又附添之役人の遂談判表向之御沙汰無之るを警護手賦等不相調を以其儘爲致歸坂候處同日夕七ツ時頃港近邊町家の夷人立入致し居候旨訴出候もの有之銃隊巡羅掛を以應接致し候得共附添人も無之言語通解不仕中御印の手を掛候を以二人差押應接中壹人振放し逃去候を以銃手等追掛參り候處已ニ小舟ニ取乗可漕出體ニ見請か不得已司令士方號令を下し終ニ及砲發其砌疵人等少々有之候得共其儘小舟ニ取乗港外に漕出シ右混雜中水中に陥り死亡以多し候ものも有之候哉ニ相聞申候然ル處杉起平太生駒清次儀之應接中既ニ前隊ニ事起り候儀ニ未タ決儀之處置ニ無之を以先及制止方銃隊引上申候然ニ不俟決儀砲發至候子細ハ前條差押候もの振放逃延

一六六 明治元年二月十九日(三月十二日)

四〇〇

既ニ舟を沖合に可漕出體ニ有之を以不得已號令を下し候趣箕浦猪之助西村左平次等申出其他軍器ニ手を掛且市中亂暴之儀告訴以多し候事件も有之趣候得共未タ夫々之事實探索中ニ御坐候間委細と取調濟之上御達可仕候以上

一六六

二月十九日
(三月十二日)

堺事件ニ關聯シ外國交際ニ關スル聖旨ヲ各國公使ニ傳フヘ
キ旨ノ御沙汰書

二月十九日

御沙汰

今般御一新ニ付各國御交際之道も大略相立既ニ近日參内之儀も被仰出候處不圖も土州家來法外之所業ニ及ひ深被惱宸襟候素より

皇帝ニおのきらま候る之御交親之外更ニ御他意も不被爲在候事ニ候條此度之儀ハ如何様ニも御取糺之上至當之御所置被仰付候間御交際之儀之聊違亂無キ様被爲成度
叙慮候間此旨相心得各國公使に可申達候事

一六七

二月十九日 佛蘭西公使ヨリ
(三月十二日) (外國事務總督)伊達宗城宛

堺事件ニ關スル處置申入ノ件

御門マセステ之

外國事務掛 伊達伊豫守閣下呈

佛國帝マセステ全權ミニストルカ

御門政府へ充テ指出セル書面

於大坂港佛國ソソゼットウエヌス船中

千八百六十八年三月十二日 皇曆二月十九日

一六七 明治元年二月十九日(三月十二日)

四〇一

三月八日堺表ニ於テ土佐ノ人佛國海軍之者ニ對シ暴戾舉動ニ及ヒ候ニ付其償トシテ佛國ミニストル其國帝政府ニ代リ左ニ舉ルケ條通り所置アラン事ヲ御門マセステ政府ニ請ン

第一ケ條

堺ニ於テ土佐ノ人兵隊指揮セシ士官兩人竝佛人ヲ殺害セシ者殘ラス此書面京師へ届キシ後三日ノ内右暴行ニ及ヒシ場所ニ於テ日本ノ官員并佛國海軍兵隊ノ眼前ニ於テ首ヲ打斬候事

但當節大阪ニアル土佐ノ家老其場ニ立會可申事

第二ケ條

殺害ニ逢シ士官并水夫ノ家族等扶助ノ爲トシテ十五萬トルラノ高ヲ土佐侯ヨリ差出シ是ヲ佛國政府へ可相納事

第三ケ條

親王ノ内 朝廷ノ外國事務第一等ノ執政タル人佛國兵隊ノ指揮官へ其政府ヨリノ詫辭ヲ申入ル、爲メウエヌス船中ニ來リ可申事

第四ケ條

土佐侯自分ウエヌス船中ニ來リ堺表ニ於テ自國人佛人ニ對シ暴行ニ及ヒシ事如何ニモ氣ノ毒ニ存候就テハ宜ク寛恕セラレ度候トノ趣ヲ自分申述ラレ候事尤之カ爲メ土佐ノ城下近邊ニ右船ヲ相廻ヘク候事

第五ケ條

以來土佐之者兵器ヲ帶外國人ノ爲開タル港ヲ通行シ又ハ爰ニ滯留スル事ヲ嚴敷禁スル事

佛國ミニストルニハ右三ケ條速ニ一々所置アラン事ヲ望ム此公平ナル申立ヲ其通所置セラレ事落着スル上ハ此程悄然離間セシ懇情平和ノ交際ヲ改メテ速ニ取結ハン事ヲ望ム

一六八

二月十九日 英吉利公使ヨリ
(三月十二日) (外國事務總督伊達宗城(同)東久世通禧宛)

堺事件ニ關スル佛蘭西公使ノ申出承認方勸告ノ件

Hiogo, March 12, 1858.

Their Excellencies are aware of the indignation felt by the Undersigned in connection with his colleagues the Representatives of the Foreign Powers then in Osaka, when they heard, at one o'clock, on the morning of the 9th instant, that the crew of a steam launch belonging to a French Ship of War had been barbarously murdered at Sakai the previous afternoon. That feeling unfortunately was not lessened when, after a delay of ten hours, and eighteen from the time of the murder, the account given by Their Excellencies to the Foreign Representatives proved utterly untrue, and no information was furnished respecting the missing men.

Under such circumstances, the Undersigned felt bound to withdraw together with the other Representatives from Osaka, to mark his abhorrence of the horrible crime, and his disapproval of the way in which it had till then been dealt with by the Mikado's Government. Before leaving, he advised Their Excellencies, as they will remember, to spare no effort to recover the missing Frenchmen if still living, but on no account to attempt to conceal their deaths, if they had been murdered.

The bodies of these unfortunate men have since been given up, and the French Minister will now doubtless demand from the Mikado's Government satisfaction for this unprovoked massacre of his countrymen and grave insult to his Government & flag.

The Undersigned having been informed by the French Minister of the character of these demands, and being satisfied that they are reasonable and just, he hastens to urge the Mikado's Government to comply with them with as little delay as possible. It is of the highest importance that the Mikado's Government should prove by the promptness with which complete redress is rendered in this case that they will not suffer the name of the Mikado to be disgraced by such abominable acts, and that His Majesty has power to suppress them. It is only by such a course that the Government of the Mikado can expect to receive the respect of foreign nations.

HARRY S. PARKES

Her Britannic Majesty's Envoy Extraordinary
and Minister Plenipotentiary in Japan.

Their Excellencies

Higashi Kuze Saki no Shinshō

Date Iyo no Kami dono

Ministers for Foreign Affairs
Osaka

(右和譯文)

以書狀致啓上候然之去ル十六日午後堺表ニ於て佛國軍艦附屬川蒸氣乗組人數

非道之殺害ニ及候段同日夜中第一時頃拙者并各國同列聞及候時皆一同憤怒致候事閣下達御承知之通御座候夫ハ十一ヶ時を相經候右殺害ニ及候ハ十八ヶ時節閣下達ハ各國公使ハ始末を被申述候言譯ハ全く詐言ニ行衛を不知佛人之義ニ付注進無之を聞き猶一層公使共憤怒致せし事ニ候右強惡を惡むハ勿論且

下ケ札

御門政府ニ於て夫迄之取計方不宜敷を満足ニ不思情を示んハ爲拙者并各國公使共大坂を退去致候猶引上候節閣下兩人ハ申進候ニハ行衛不知佛人精々探鑿を遂萬一彼等殺害ニ逢候ハ必ず包み隠し無之様との事ハ閣下達も定有記憶せらむ候事と存候然るニ右非命ニ逢候佛人之死骸を引渡せし手數も最早今日ニ至る全く相濟候上ハ佛國公使ハ右無故國民を殺害し政府并國章を侮せし段御門政府ハ十分ニ其處置ニ及び可申様佛國公使ハ申立候筈ニ候右申立候大意佛國公使ハ聞及候處無理無之全く公平之義と存候間成丈遲滯無之早速朝廷ニ於て御承諾有之候様致度候
右様之暴惡所業を捨置時ハ
御門汚名を受候故早速十分ある處置を以て汚名を雪ぎ惡人を差押る權威有之

證據を被立候事朝廷之大事ニ存候右ニ非せハ外國於て朝廷を尊崇するを得不得候此段可得貴意如斯御座候以上

二月十九日

ハリエスバルケス

大坂在留

外國事務總督

東久世前少將

兩閣下

伊達伊豫守

(下ケ札)

始末を被申述候言譯ハ全く詐言云々
右ハ佛ミニニストルハ懸合候時刻及遅々候故兩人よ十五日土藩届出候書面之主意を及陳述候也

一六九 明治元年二月十九日(三月十二日)

四〇八

一六九 二月十九日 亞米利加辨理公使ヨリ
(三月十二日) (外國事務總督伊達宗城) 同東久世通禧宛
堺事件ニ關スル佛蘭西公使ノ申出承認方勸告ノ件

No. 41

Legation of the United States in Japan.
Hiogo March 12th 1868

I have been informed of the nature of the reparation asked by His Excellency The Minister of France, for the recent unprovoked murder of his countrymen at Sakai. I trust Your Excellencies will see the importance of His Majesty the Mikado at once, according to this request of His Excellency The Minister, and that prompt satisfaction may be given to him.

With respect & esteem

R. B. VAN VALKENBURGH
Minister Resident of the United States.

To Their Excellencies
Higashi Kuze no Shosho
Date Iyo no Kami
Ministers for Foreign Affairs

(右和譯文)

日本兵庫在留合衆國公使館
千八百六十八年三月十二日
第四十一號

呈外國事務宰相

東久世少將閣下

伊達伊豫守閣下

堺ニ於テ先日不意之殺傷起れる事ニ就テ佛公使ヨリ右ニ應スル事ヲ申立タリ
ト余ニ告ケタリ

閣下佛公使カ乞ふ所ニ從ヒ玉ハ、

御門陛下之爲ニ大切之事ある迄く且佛公使ニも満足せざるしと信を謹具

米里堅合衆國公使

ゼニラルアビハンハルケンベルク

一六九 明治元年二月十九日(三月十二日)

四〇九

一七〇 明治元年二月十九日(三月十二日)

四一〇

一七〇

二月十九日 普魯西代理公使ヨリ
(三月十二日) (外國事務總督伊達宗城同東久世通禧宛)

堺事件ニ關スル佛蘭西公使ノ申出承認方勸告ノ件

Excellentien,

Hiogo den 12ten März 1868.

Der Kaiserlich französische Gesandte hat mir mitgetheilt, welche Genugthuung er von der Regierung Seiner Majestät des Mikados für die am 8ten h. in Sakai vorgefallene meuchlerische Niedermetzung unbewaffneter französischer Offiziere und Matrosen verlangt hat. Die Minister Seiner Majestät des Mikados kennen den tiefen Eindruck, den dieses traurige Ereigniss auf mich gemacht hat und kann ich nur den Wunsch und die Hoffnung aussprechen, dass die Regierung des Mikados sich beeilen möge, die verlangte Genugthuung zu gewähren, da im Falle einer Weigerung oder Zögerung Japan mit Recht als ferner nicht mehr zu den civilisirten Nationen der Erde gehörend angesehen werden könnte.

Mit Ehrerbietung und Achtung,
Der Königliche Geschäftsträger,
BRANDT.

An

Ihre Excellentien

Die Minister der Auswärtigen Angelegenheiten,

Higashi Kuze no Shōshō, Uwadsima Io no Shōshō,

in

Osaka.

(右和譯文)

千八百六十八年第三月十二日於兵庫

去八日境ニ於テ武器ヲ備ヘサル佛士官及水兵ヲ殺セル怯憶ナル暴人ノ爲ニ御門政府ニ佛公使ヨリ呈セル書翰ノ趣委細同人ヨリ承レリ

御門陛下ノミニストル等此駭クヘキ事件ヲ嘆息セリト余ニ告ケタリ故ニ御門政府ハ佛公使ノ望タル満足スヘキ所ヲ速ニ決シ玉フヘシ若シ之ヲ拒ミ或ハ遲滯セラルヽニ於テハ以來日本ヲ世界中ニテ文明ナル國トハ謂フヘカラス謹具

李漏生 チャジダツヘリル

フオンブランド

一七〇 明治元年二月十九日(三月十二日)

四一一

一七一 明治元年二月十九日(三月十二日)

四二二

呈

外國事務宰相

東久世少將閣下

宇和島少將閣下

一七一

二月十九日
(三月十二日)

池田茂政岡山藩主ヨリノ上申書

神戸事件ニ關シ謹慎ノ件

戊辰二月十九日

先般私家來日置帶刀義神戸町通行之節外國人ニ對し發砲等仕候次第不届被
思召右號令致し候者割腹被
仰付候條奉敬承候右之方今
王政御一新之折柄外國御交際御國體ニ相拘候義をも不辨固陋之舊習を以妄動
ニ屬し候始末ニ付恐多も奉惱

宸襟候段重疊奉恐入候然ルニ武道之御取扱を以割腹被

仰付候段御涵容之程奉感戴候乍然前條之次第ニ付深く謹慎罷在候間此上何分
之 御沙汰奉伏願候誠恐誠惶謹言

二月

備前少將

一七二

二月二十日
(三月十三日)

伊太利公使ヨリ
外國事務局輔伊達宗城、同東久世通禱宛

堺事件ニ關スル佛蘭西公使ノ申出承認方勸告ノ件

Legazione d'Italia.

al Giappone.

Excellences

Hiogo, le 13 Mars 1868

S. E. le Ministre de France m'a fait connaitre les demandes qu'il compte adresser
au Gouvernement du Mikado en réparation du crime dont ont été victimes à Sakai le 8 de

一七二 明治元年二月二十日(三月十三日)

四二三

一七三 明治元年二月二十日 (三月十三日)

四一四

ce mois, un Enseigne et des Matelots de la Marine J. Française.

Je n'ai pas besoin de répéter ici l'expression de douleur que j'ai ressentie à la nouvelle de cet horrible événement. Mais, V. E. me permettront de leur dire que je ne doute nullement que le Gouvernement du Mikado ne s'empresse d'accéder aux demandes du Ministre de France car il comprendra que si ce lâche assassinat ne recevait pas une punition et une réparation exemplaires, le Japon pourrait être considéré comme en dehors des Nations du monde civilisé.

Je prie Vos Excellences d'agréer les assurances de ma plus haute considération.

L'Envoyé Extraordinaire
et Ministre Plénipotentiaire
de S. M. le Roi d'Italie
CIE DE LA TOUR

Leurs Excellences

Higashi Zukeno Shōshō

et Uwadshima Shōshō

Ministres des Affaires Etrangères

Osacca

(sic)

一七三

二月二十日 内國事務局ヨリ
(三月十三日) 下參與宛

墨西哥銀一弗ヲ銀三分ニ換算ノ太政官布告送付ノ件

下參與中

内國事務局

一今度御一新之折柄外國之御交際も近々被爲在候儀ニ付而之指向爲融通洋銀
壹枚ニ付金三分之當りを以無差支交遣ひ可致旨被
仰出候間銘々無疑念通用可致候

一右壹紙

一洋銀通用之儀

別紙之通被

仰出候間爲心得

申入候廻覽返却

可有之候也

二月廿日

一七三 明治元年二月二十日 (三月十三日)

四一五

一七四 二月二十日
(三月十三日)

堺事件ニ關シ土佐へ急御用ニ付筑前汽船借入ノ件

二月廿日

土州に急御用ニ付右藩人被差遣候ニ付筑前蒸氣船御借用之儀御留守居呼越申
達候處

朝廷御用筋ニ御遣ニ相成候儀何も差支無御座候兵庫に參居候ニ付呼ニ遣候
間暮レならてハ川口に乘入申間敷ニ付初更頃被乘込ニ相成度旨申出候土州海
ニ不案内者計ニ付水先兩人程土邸を爲乗候様相成度旨申出候ニ付同藩真邊
榮三郎に申遣候事

船 號

隈 瀛 丸

船 手 頭

松本五郎兵衛

土州を乗組左之通

家 老

山内隼人

從者九人

參 政

森 權 次

從者貳人

鑑 寮

問 市 之 丞

從者壹人

飛脚番

貳 人

拾七人

宇和嶋方

都筑壯藏

從者壹人

編者註

本號文書ハ發信者ハ不明ナリ尙明治七年高知縣令ヨリ提出ノ「明治戊辰泉州堺事件」中ニ「二月廿二日仕置役森崎次目付役間市之進(宗)右事件ニ付蒸氣船ニテ下國翌廿三日少將右船ニテ上阪候事」トアリ案スルニ本號文書ト關係アルモノト認メラル

一七五

二月二十一日 亞米利加公使館書記官ヨリ
(三月十四日) 舊幕府外國副總裁川勝廣運(近江守宛)

亞米利加辦理公使大坂ヨリ横濱ニ歸港シタル旨及大坂ノ狀況
竝ニ堺事件報知ノ件

千八百六十八年第三月十四日於横濱

江戸ふる

川勝近江守閣下

米國公使軍艦モノカシーノ乗船し只今大坂より歸港せり伊太里孝漏生之兩公使も同道かり然る所ワルケンボルク氏疲勞して未だ全快の期ふ至らば故ふ余足下に十分の事を書贈せる事能(公使)之各(公使)國使大坂ありて御門を訪まへきとの案内ありて去る十一日(日本十八日)其舉ふおよふへしシルハリスバルケス并ボルスフルツク氏を之を領承したまとも他の公使を即答をかきは是を十八日上京之事を辭し追て謁見可相願旨を以て延期せし事ふ聞及ひ候去る八日(日本十五日)佛國軍艦之小船二隻堺におゐて土佐人の爲ふ襲撃せらる其内十六人乗之舟を死人十一人ありて今一艘之方を死人一兩人ありと爾時英國公使館醫官ウイリス京都ありて土佐侯之病ふ罹るるを治療し居るかき其時も英國公使館士官シルト(マ)フオルト共ふ猶在京せり此變事ふ十分の満足を爲はへき旨佛國公使に約せり拜具謹言

アルセホルトメン

(續通信全覽)

一七六

二月二十一日 在神奈川亞米利加人ヱアン、リードヨリ
(三月十四日) 舊幕府外國總裁山口直毅(駿河守)宛

堺事件ニヨリ各國公使横濱ニ來ルニ際シ外國人ノ援助ヲ得テ
權カヲ回復スヘシト勸告ノ件

於神奈川

千八百六十八年第三月十四日午前第十一時

呈山口駿河守閣下

亞國軍艦マノカシーにて只今亞國李國および伊太里國公使兵庫表より當港
到着せる事を急ぎ閣下へ報告に
去る日曜日佛國士官壹人軍艦之兵卒拾人大坂地方を測量せし折土佐人之爲
彼等殺害ふ遇へり之を因り右ふ記せる公使横濱へ逃歸りたりと云ふ事を聞
けり

如し公使 大君ふ拜謁する時を彼等一度破りし 大君との眞の交際を言語上
よてを恢復せしめらざる事を彼等ふ感せしむへし且大坂おるて彼等の所置ふ
因り

大君の意を損せし様子を以て

大君彼等と應接せし然る時を彼等方より再び 大君ふ對面せん事を乞は

し何とあまを日本國於て正ふ一人諸事を引請全國を支配するものかきを得

正ふ此時ふ當り

大君須く外國人南方の徒を征伐するを援けん事を承諾し一丈夫之舉動あるへ
し而して

大君以前よりを猶廣大の威權を得へし舉動速からんを欲は

外國人之爲よ必復讐せしき事を外國人ふ爲はへし而天下之功獨り一橋ふ歸せ
る事疑かし

猶豫を 大君の大敵かり大急謹言

ハンリート

(續通信全覽)

編者註 本書翰發信者「ハンリット」トハ案スルニ二六一以後ノ文書ニ出ツル亞米利加人「ヴァン、リード」ナルヘシ

一七七

二月二十一日 副總裁三條實美、同岩倉具視ヨリ
(三月十四日) 外國事務局輔伊達宗城、同東久世通禧宛

堺事件ニ關スル佛蘭西公使ノ要求緩和方ノ件

至急要用略札高恕誠頃日來佛土混雜之一條ニ付るゝ兩臺不一方御竭力ニて先
々大難ニも不至程克相濟可申爲
皇國大慶之至ニ奉存候實ニ御配意御拮据之程奉遙察候借今度佛人方之差出候
書面之義已ニ昨日被 仰出候通土藩ニ於ても御請ニ相成候然ニ佛人差出候書
面之中第一ヶ條士官并佛人ヲ殺害さし云々右殺害セし者一隊砲發ニ及候上ハ
某と相定候事も分明ニ難辨左候得と一隊之兵卒悉所置不致候てハ不相濟次第
ニも可至候歟實ニ方今之内地之形勢といひ人心之所向只管外國人を惡候事一

般之習氣ニて甚不居合ニ有之候得と事情不得止とハ申なりら數多之兵士を斬
戮致候事頗天下之人心ニ關係いゝし國情實以難澁之義無此上候殊 御新政之
折柄兎角人心動搖ニて被惱
宸襟候處如此所置ニ相成候ハ、彌以人心之居合ハ附申間布不測之内憂を生候
るハ誠不安次第爲國家苦心此事ニ御坐候得と何卒兩公之御賢考を以外國事
務掛ノ中御内諭有之何とか周旋ハ相成間敷哉英サトウ杯へ内談ニて實ニ内
地之人心不居合之情實懇々示談致周旋を以士官兩人計ニて相濟候様ニハ相成
かゝく候哉若夫も難叶ハ責て隊長之内五六人位惣ゝ十人ヲ不出候て相濟候様
ニハ難成哉實以此度之所置誠内地之情實千萬不容易候間不堪苦慮密々以書中
御談申候何卒足下格別之御配意を以乍此上御盡力之程爲天下奉懇禱候尤此等
之事漏洩候るゝ甚以不宜候間吳々至密々御勘考御周旋可被下希上候先之急々
要件而已得貴意候仍如是御坐候 頓首

二月廿一日戌半刻

實 美
具 視

一七七 明治元年二月二十一日(三月十四日)

四二四

東久世前少將殿

宇和島少將殿

二仲後藤象二郎ニも下坂仕候猶士藩取置之義と同人に御下問可被下急々亂書失敬之段御海涵可被下候

別啓

第一ヶ條文中

佛人ヲ殺害せし者残らば云々

右ニ候得之土州より某と解死人差出候る三人ニもるを五人ニもあを夫よて可相濟道ハ無之哉又内情之上よも大ニ御懇親云々之事ニ候得とも從來朝廷攘夷之義ニ付今度御親政ニ付る之必攘夷云々と天下衆庶見込居候折柄此度之義之固より我之暴動とハ乍申六十餘之人命を斬戮候ハ、如何之變態大患を可生も難計實ニ内情難澁之事ニ有之候一體之處ハ此度之所置程克相濟候ハ、國內ニ於るも以後外國人ニ對し兇暴無禮之亂行も自然相止可申歟左候ハ、

却る御懇親之道も克貫徹致し爲他日兩國之大事よも可有之候何卒此等之趣意を以御内談ニ相成候ハ、如何哉尤外國之情態之更ニ辨知不仕事故可否之程ハ不存候得共愚意之儘密々申述候猶宜御賢考を以御盡力之程千祈萬禱仕候

實美

具視

東久世賢兄

至密別啓

編者註 別啓ハ何書ノ別啓ナリヤ不明ナルモ文意ヨリ推察シ本號ト關聯アルモノト認メ此處ニ編入ス

一七八

二月二十二日 外國事務局輔東久世通禧ヨリ
(三月十五日) 副總裁三條實美同岩倉具視宛

堺事件關係高知藩士ノ處罰談判狀況報告ノ件

通 禧

一七八 明治元年二月二十二日(三月十五日)

四二五

兩公閣下

芳札謹誦候御多祥并悅存候然之佛土之一件頃來御焦念之程奉察候先便より申上候通誠以程克談判に相成爲
皇國大幸御同慶之儀ニ候付る之土州人刑罰之義ニ付御懸念被成候儀萬機敬承候尤發砲之人ト申る貳中隊ヲ極刑之目的ニ之無之乍去十六日之佛人之勢ニ之

皇國百萬之生靈之塗炭ニ關係一王政復古之盛典も既ニ地ニ墜可申と實以失生色次第幸哉今日之勢ニ立到り誠以皇運之盛ナルヲ感佩スルノ期ニ御坐候爾後之憂戚も御尤ニ存候得共目前之困難ニ比それバ如何様ニも處置可付存候尤外國局ニおゐて土州に發砲人數相調可申出一昨日申付候處昨日二十七人號令官貳人合貳拾九人申出候得共多數ニ付猶亦發砲に及候者篤与取調候様申付候處號令官共ニ合貳拾人に取調申候右人體簿書を以今日十二時より發船伊豫守兵庫表ニ之談判致候心得ニ御坐候今度之處先日之儀と相違ニ之甚と暴戻ヲ極

且佛之死人合十六人ニ付士官兩人位ニ之ハとても不相濟重る談判ニ立到り候る之前日よりの手つゝきも水泡と可相成重る夫より減少之談判之義ハ難相成候

一土州人士法ヲ以て割腹ニ治定明廿三日堺妙國寺におゐて刑之

一土人帶兵器候者開港場指留之事

右御所置相濟後期限相立候様談判可致候事

處置濟迄ハ咄出來之候

御懸念之筋御尤ニ存候得共右等より外國局おゐて取計出來之候間左様御承知可被成下候

一英蘭兩公使上京拜謁委曲長谷相公に申置候今日兵庫表談判之様子後藤象次郎明日歸京可申上候

一長谷下坂兵庫ニ之佛軍艦に乘込挨拶有之
朝廷より御丁寧之義と西洋人申居至極之都合ニ御坐候猶委曲儀長谷公御聞取可被下候今日上坂ニ相成候

一七九 明治元年二月二十二日(三月十五日)

四二八

右の件、荒増及貴報候早、大亂毫海怒萬禱候也

二月廿二日十二字

一七九

二月二十二日
(三月十五日)

山内豊信(前高知藩主)へノ御沙汰書

堺事件關係高知藩士刑罰言渡ノ件

二月廿二日

土佐 前少將

先般以

勅使嚴重被 仰付候通於堺表其藩士對佛人及暴舉候始末已ニ各國御交際被爲
在候上之公法ニ依り御所置可被遊思召を以
朝廷御取糺被 仰付候處各國公使申談之上佛國公使分別紙之通願出候ニ付其
筋を以御所置被

仰付候尤第一ヶ條之儀之來ル廿三日於同所施行可有之候ニ付之東久世前少

將宇和島少將に

仰遣候儀も有之候條右受指揮可取計旨 御沙汰候事

但所勞ニ付之と名代之重臣早急可致下坂候事

■者註 別紙ハ明示ナキモ一六七ノ佛國公使ヨリノ來翰ト同一ナルヘシ

一八〇

二月二十二日
(三月十五日)

山内豊範(高知藩主)へノ御沙汰書

堺事件ニ關シ爾後斯ノ如キ暴動ナキ様藩へ相示スヘキノ件

土佐 少將

別紙之通同姓前少將ニ被

仰出候條其旨厚可相心得候爾後右様之暴動ヨリ御國難ヲ醸成し奉惱

宸襟之儀無之様闔藩に鄭重可相示

御沙汰之事

一八〇 明治元年二月二十二日(三月十五日)

四二九

○者註 本號中ノ別紙八一七九ヲ指スモノト認メラル

一八一 二月二十二日 大坂裁判所ヨリ山内豊範(高知藩主)家臣へ
(三月十五日) ノ達書

堺事件關係高知藩士刑罰言渡ノ件

土佐少將

重臣

別紙之通從

朝廷被

仰出候間各國公使申立之通御採用相成明廿三日於堺妙國寺指令官貳人兵隊之
者拾八人士分之禮を以割腹被

仰付候條其方々申渡候上警衛被

仰付候細川越中守家來淺野安藝守家來へ爲引渡旨被

仰出候事

二月廿二日

裁判所大判

一八二 二月二十二日
(三月十五日)

大坂裁判所ヨリ堺妙國寺へノ達書

堺事件關係高知藩士處刑場ニ指定ノ件

泉州

妙國寺

右者今般土佐少將家來貳十人於其地佛人に及暴行外國
御交際を奉犯候罪ニより其方寺内ニ於て明廿三日割腹被
仰付候條爲心得此段申達候もの也

二月廿二日

裁判所大判

一八三 明治元年二月二十二日(三月十五日)

四三二

一八三

二月二十二日(カ)
(三月十五日)

細川護久(熊本藩主)家臣への達書

堺事件關係高知藩士處刑ノ際警衛ノ件

細川右京大夫

二月廿一日

家 來 ね

此度土佐少將家來佛人の對し及暴行候者とも泉州堺表妙國寺ニ於明後廿三日
刑罰に可處旨

朝命を以被 仰出候條警衛向其藩へ被 仰付候間刑罰等之儀と刑法掛り木村
得太郎ね引合不洩様差配可被致候

但

刑罪人數之儀と土佐重役ね引合之上可相受取候

辰二月

編者註

本號ニハ記錄編者ノ日附ハ三月二十一日トアリ且ツ内容ニハ「明後廿三日」
云々トアルモ他ノ文書トノ關係ヨリ二十二日ニアラサルカ

一八四

二月二十二日
(三月十五日)

淺野長勳(廣島藩主)家臣への達書

堺事件關係高知藩士處刑ノ際警衛ノ件

二月廿二日

淺野安藝守

家 來 ね

此度土佐少將家來佛人ニ對し及暴行候者とも泉州堺表妙國寺ニ於て明廿三日
刑罰ニ可處旨

朝命を以被 仰出候條警衛向其藩被 仰付候尤細川右京大夫家來ねも同様被

仰付候間可申合且刑罰掛り木村得太郎ね引合不洩様差配可致候

但刑罰人數之儀と土佐重役ね引合之上可相受候

辰二月

一八五 明治元年二月二十二日(三月十五日)

四三四

一八五 二月二十二日 外國事務局輔伊達宗城、同東久世通禧ヨリ
(三月十五日) 佛蘭西公使宛

堺事件關係高知藩士處刑其ノ他ノ要求ニ關シ回答ノ件

西曆三月八日堺表ニおゐる貴國軍艦方士官并水夫拾七人沿海淺深測量之爲メ於堺表ニ上陸致し候を發砲ニ及候段實以暴激之所業ニ立至り實以是迄皇帝政府方各國ニ對し信實を盡され候交際之主意も相背き別る慚悔ニ至り候依之一同會議之上萬國之公法ニ依リ今後遺念無之様篤与衆議を盡し候上皇帝政府へ言上致し約定之日限を誤らば別紙土佐兵隊暴行ニ及候人數指揮官貳人兵隊拾八人都合貳拾人不殘明廿三日我日本之刑法ニ基き堺表ニおゐる又刑罰ニ可處候就る貴國を勿論各國之檢使立會之上處置可致候

但

殺害逢ひし士官并水兵之家族扶助金として拾五萬トルラルヲ佛國政府ハ土佐國カさし出候義々堺表之處置落着之上其期限を相定可申事土佐侯兼る皇帝政府方上京いふし候様申達置候ニ付不日着坂之上速ニウエヌス船

中ニ來訪相成可申右ニ付土佐海邊ハ貴船相廻され候ニ不及事外國總裁之親王山階宮堺表落着之上土佐人暴行挨拶且々皇帝政府方今後益外國交際上ニ付信義を被盡兩國人民之爲實意相顯し度應接之爲來訪可相成事土佐人兵器を帶し開港内を徘徊差止置候事
右之通ニ候間疑念なく篤与了解せられん事を希ふ叔言

伊達 伊豫守

東久世前少將

佛 國

モンシユアレオンロセス閣下

編者註 本號文書日附ヲ缺クモ「外務省記」ニヨリ二月二十二日ト認ム

一八六 二月二十二日 外國事務局輔伊達宗城、同東久世通禧ヨリ
(三月十五日) 各國公使宛

堺事件關係高知藩士處刑通知ノ件

一八六 明治元年二月二十二日(三月十五日)

四三五

西曆三月八日於堺表佛國人ニ對し土佐兵隊之者暴發ニ及候儀ニ付過日貴翰を以被仰聞候趣委細致承知右事件早速衆議を盡し萬國之公法ニ依り皇帝政府に言上之則明廿三日右暴行ニ及ぶ士官貳人兵隊拾八人都合貳拾人我日本之刑法ニ基き刑罰可處候委細之儀佛國公使に申遣置候ニ付猶同人ヨリ御聞取可被下此旨如此御座候以上

二月廿二日

伊達伊豫守

東久世前少將

英國

サアハリエスパークスケシビ 閣下

伊國

モンシユアルコムトデウラツール 閣下

米國

ゼネラルアビハンハルケンベルグ 閣下

和國

モンシユアデガラーフハンボルスブルツク 閣下

編者註 本號書翰ハ普魯西代理公使へモ送付セラレタルコトハ二一七同代理公使ヨ

リノ來書ニヨリ明ナリ

一八七 二月二十三日

(三月十六日)

堺事件受刑者名簿及處刑ノ模様

二月廿二日仕置役森權次目付役間市之進^(飛カ)右事件ニ付蒸氣船ニテ下國翌廿三日少將右船ニテ上阪候事

堺發砲ノ事ニ關候兵隊人員

第六小隊司令

第八小隊司令

箕浦猪之吉

西村左平次

第六小隊小頭
 第八小隊小頭
 第六小隊肝煎
 右同嚮導
 右同
 右同
 右同銃手
 右同
 右同
 右同
 右同
 右同
 第八小隊銃手
 右同
 右同

池上八十吉
 大石甚吉
 杉本廣五郎
 勝賀瀬三六
 山本鍊助
 森本茂吉
 北代堅助
 稻田貫丞
 柳瀬常七
 橋詰愛平
 岡崎榮兵衛
 川谷銀太郎
 竹内民五郎
 横田辰五郎

右同
 右同
 右同
 右同
 右二十人可受上裁者

土居八之助
 柿内徳太郎
 金田時治
 竹内彌三郎

第六小隊銃手
 右同
 右同
 右同
 右同
 右同
 右同
 右同
 第八小隊銃手
 右同
 右同

楠瀬安次郎
 水野万之助
 岡崎太四郎
 岸田勘平
 門田高太郎
 中城惇五郎
 田丸勇六郎
 榮枝次右衛門

右同

横田 静治郎

右九人白闈ヲ取

右邸内於神前闈ヲ引取分候事

右上裁ヲ可受二十人ハ邸館式臺ニテ懷中相改メ二月廿三日早朝細川藝州兩藩士へ邸ノ門前ニテ引渡候事

御沙汰ノ趣一同承レ

此度堺表ノ事件ハ即今各國交際御一新被爲在候折柄ニ付公法ヲ以御所置被仰付今日於堺表割腹被仰付候 御沙汰有之候孰モ 皇國ノ御爲ト存込難有御請可仕候

但歷々御役人且各國檢使モ罷越候上ハ

皇國ノ士氣各國エ相顯レ候様覺悟可有候

右一同御受潔キヨク死ニ就ク

泉州堺妙國寺内ニオイテ割腹同町寶珠院ニ葬ル十一名

箕浦猪之吉源元章

二十五歳

介錯 馬淵桃太郎

西村左平次源氏同

二十四歳

同

小坂 乾

池上八十吉藤原光則

三十八歳

同

北州禮平

大石甚吉藤原良信

三十五歳

同

落合源六

杉本廣五郎源義長

三十四歳

同

池 七助

勝賀瀬三六平稠迅

二十八歳

同

吉村村吉

山本鏡助源 利雄

二十八歳

同

森 常馬

森本茂吉藤原重正

三十九歳

同

野口喜久馬

北代堅助源 正勝

三十六歳

同

武市助吾

稻田貫丞藤原楨成

二十八歳

同

北原善之助

柳瀬常七藤原義好

二十六歳

同

中村茂之助

次ニ橋詰愛平紀有道罷出候處各國檢使ヨリ割腹ノ儀差控候様誠ニ見ルニ不忍此趣ミニストルハ相通可申段刑法係へ申出ニ付種々談判ニ及ヒ終ニ差控候事但前ニ二十名ノ死ヲ論スルヤ隊長云砲發ノ號令ハ我全權ナレハ責元帥ニアリ何ソ卒ニ及ハンヤト傍ニアル兵隊數十名死ヲ争フ事喧シ然レモ佛人受伤

ノ人員ニ適セサレハ敢テ之ヲ聽カス於是二十名ニ定ル各辭世ノ吟詩或ハ詠
歌ヲ殘シ死ニ就ク其言フ事亦善シ佛國檢使哀情ヲ起シ涕泣自ラ禁セス割腹
已ニ十一名其次ニ及ハントスル時之ヲ止メ馬ヲ馳テ政府ニ言ク殘リ九名ノ
生ヲ緩スト云後之ヲ流罪ニ處セラル委細下ニ

辭世ノ詩歌

除却洋氛答國恩 決然豈可省人言

唯令大義傳千載 一死元來不足論

箕浦 元章

風ヲ散る露と取身ハいと重と

心よかゝる國の行をる

西村 氏固

年を経て骨と尸ハ消るとも

名ハ萬世れ後よのこらぞ

右 同

皇國の爲よ我身をえてゝこ終

茂るもくられ道開き終ん

池上 光則

我もまゝ神のみくよれ種かれ後

猶いさきよきけふのおもひ出

大石 良信

皇國れみ爲となしてをいのち

捨る今はれ胸のまゝしさ

杉本 義長

かまなくも君のみ爲と一まちに

おもひ迷はぬ敷島のみち

勝賀 瀬稠 迅

塵ひちのよしかゝれとも武士の

底のここはくむ人そくむ

山本 利雄

人こゝはくもりあち取世の中ニ

清き心の道開きせせ

森本 重正

一八七 明治元年二月二十三日(三月十六日)

四四四

身命ハかく取るものとうち捨え

と、めほしきは名のみ取りけり

北代 正勝

時あり又咲散るとてもさくら花

何かおしまん大和さましむ

稻田 楨成

魂をこ、よと、染て日の本れ

武き心を四方よ示さぞ

柳瀬 義好

割腹ヲ止メテ細川藝州兩藩へ御預ケ人員

橋詰 愛平

岡崎 榮兵衛

川谷 銀太郎

右三人藝州へ御預

武内 民五郎

横田 辰五郎
土居 八之助
垣内 徳太郎
金田 時治
竹内 彌三郎

右六人細川へ御預

右出格ノ御詮議ヲ以寛典御所置割腹御免其手續後ニ出ル三月三日土佐藩藏屋敷長堀へ

受取預ケ方ニ及置追テ國元へ被差下三月十七日歸着類族へ預ケニナル

右九名ノ者五月廿一日呼立

朝廷御沙汰ヲ以扶持切米被召放渡リ川限西流罪

但右九名ノ中實子無之者六名ハ含ノ筋有之貳人扶持ツ、爲介補被遣三名ノあつ紛

共ハ此上含ノ筋ヲ以貳人扶持切米四石被下新規足輕ニ召抱候事

編者註 本號文書ハ明治七年高知縣令ヨリ提出ノ「明治戊辰泉州堺表事件」ノ一部ナリ

一八八 二月二十三日 副總裁岩倉具視宛投書
(三月十六日)

堺事件ニ關スル件

別紙投書油紙包上書左之通

岩 倉 様

御雜掌中

右今朝門下ニ有之及披見候爲御參考入御一覽候但答之儀者愚存之趣書取門前ニ差出候以上

二月廿三日

「此答書不見干此」

具 視

〔別紙投書〕

此節柄泉州堺表ニる土佐人數共對佛人手荒之及舉動死傷等後有之忽亂擾引出

シ候段殘懷之至ニ不堪候然ニ彼上陸鎮臺方布告も無之勢ヒ彼方國威を犯候様ニ右等之人數共取得候より俄ニ隊伍を定メ途中攝泉之堺大和橋を取固メ通行不差免候處再小船ニる上陸經間道民家之者共動搖不鮮彼等募る民家押入候體土地之者より各固場所へ訴出候ニ付不取敢出張仕初度之手續も有之如以前差留メ手眞似等ニる差返手段ニ相及候へ共始終通辯も副居不申言語不通方溫和之口談も不相調加之順序之禮節後無之より互之剛臆ニ相拘り不得止事より終ニ右始末ニ相及候趣殊ニ鎮臺府者市中へ之布告致し候由之處土藩鎮撫之者へ之通辭ニも不被及候是如何成故候哉此責鎮臺府も聊關係仕候様奉存候然ニ事既ニ爰ニ至り

宸襟を被爲惱候ニ付俄ニ官武之軍司發向等ニ立至り以

勅使土州老公へも早々立越鎮定候様

御沙汰之處病氣申立ニ依テ家來共數輩立越候趣尤ニ聞取申候左こそあるへき

事ふるへし折節

朝廷御交際以後之以所ニる

朝議公法を以御處置被 仰出候ニ付其御次第遵奉仕候へ共彼方申出筋ヲ以御處置被遊候との御儀乍恐

御改革新ニ御交際御取結之上ハ善惡自他ひとしく被相行不申る者

御國威ニも相拘り公明正大曲直不正之必然輕蔑可仕且幕府多年之和親を以傍

觀論をも相立可申者顯然ニ付不得止克(事カ)をも出來間敷ニも難計如何ニも進退御

肝要ニ候並(原註本ノテ)ンテハ篠山岸和田等主人ハ江戸ニ閣家來之者共方便ヲ以

朝家ニるツらひ主人之外者御採用被爲在是如何成故哉既ニ其儘徴士ニ被爲

召候向も有之疑らくハ顛末不頓着之様ニも乍恐奉存候就る之浪華へ

鳳輦を奉促との 御沙汰奉傳承乍愕爰ニ至り實ニ彼之蠻夷之狼心疑惑も有之

者ニ候へハ自然之變動無覺東尙更彼之勢ヒを生活スル之道理若亦内患虛實を

察し差設る事哉も難計何迄矣

御親行(原註本ノテ)不可然唯望らくハ溫順之兵士を以二三藩へ被 命篤厚之

御處置ヲ以何分ニモ取伏セ申度前條彼之申出筋ニ付云々之儀ニも被爲 應候

時之凡天下之兵隊司令向後廢絶たとへハ徳川一家之罪狀數萬之兵卒皆亡之域

ニも立行可申よ自然之關係萬機之上ニ出候様乍恐奉存候唯願之上下穩便を旨とし内備專要之秋与奉存候右條々無覆(覆)卑賤之私与いへとも 御國恩奉報度赤心之至ニ御座候誠恐敬白再拜 辰二月

上

天下義士

一八九

二月二十三日 佛蘭西公使ヨリ (三月十六日) 外國事務局輔伊達宗城宛

堺事件關係高知藩士處刑中止方申入ノ件

第三號

此程堺表ニおゐて佛人ヲ殺害せしニ付死刑ニ處せらるべき土佐二十人之内此内三人ノ首長ヲ籠ル拾壹人めふ到り暫く見合セラせん事を日本在住佛國全權ミニストル

一九〇 明治元年二月二十三日(三月十六日)

四五〇

宇和島少將閣下ニ願ふ

日本在住佛國全權ミニストルレオン、ロセス

於ウエヌス船中

千八百六十八年三月十六日

一九〇

二月二十三日 舊幕府外國副總裁川勝廣運(近江守)ヨリ
(三月十六日) 亞米利加公使館書記官宛

大坂ノ狀況報知表謝ノ件

御書狀被見いたし候然る此程貴公使御歸港ふ付貴様々坂地之模様件々御書通之趣承知いたし毎々御厚志之段不淺感謝いたし候其後御聞及ひ之儀も候ハ、乍御手数御申越有之候様存候右御報可得御意如此御座候以上

二月廿三日

川勝近江守 花押

アルセホルトメン様

(續通信全覽)

一九一

二月二十三日 池田茂政(岡山藩主)へノ御沙汰書
(三月十六日)

神戸事件ニ關シ謹慎ニ及ハサルノ件

戊辰二月廿三日

備前少將 ね

先般家來之者外國人に及妄動候義、付深謹慎罷在候趣神妙之義被聞召候得共不及其義旨
御沙汰候事

二月

一九二

二月二十四日 佛蘭西公使ヨリノ上書
(三月十七日)

一九一 明治元年二月廿三日(三月十六日) 一九二 明治元年二月廿四日(三月十七日) 四五

堺事件關係高知藩士九人助命ノ件

戊辰二月廿四日

譯文

於大坂港ウエヌス船中

千八百六十八年三月十七日

御門陛下ニ呈ス

陛下并貴政府高位之諸有司等此程堺表於て土佐之人佛國海軍之者に對し極免て凶暴之所業及ひしとの報を聞き深く憂戚せらまじし趣を以て佛國帝ニ代り余申置ある償之三ヶ條ヲ急速其通り處置ありしと偏ニ貴國政府外國人及び國民ニ對せらまじ公平友睦且果斷あるの趣意を示めさる、確證なり
右様之證を示めされし上余ニおゐても余の淑徳ある
皇帝之厚意を表し死刑處せらる、もの、内拾壹人既ニ其刑ニ處せらまじ其餘九人之ものハ今當港ニある余の國海軍之指揮官等之求請ニよりて差留めし趣余

も不取敢是を聞届ケたれハ右九人之者助命之義を許容し給ひらんとを爰ニ願ふなり

陛下ニ之愛民之心情深きを以て必ス此事を許容し給ひんを更ニ疑を容さざる處なり左まるときハ此事をして全日本國へ遍く知らしむるとよ至るへき哉是迄外國人を以て仇讐の如く思ひし人々等も向來右様之誤惑ふき様盡心意ヲ氷解せしむると出來まへき哉外國人ニ之唯其兄弟あらんを欲まるとのミなり謹言

日本在留

佛國全權ミニストル

レオン ロセス

一九三

二月二十四日 外國事務局輔伊達宗城、同東久世通禧ヨリ
(三月十七日) 高知藩重役へノ達書

堺事件ニ死刑ヲ赦サレタル高知藩士處置ノ件

土佐重役 宛

一九四 明治元年二月二十四日(三月十七日)

四五四

其藩士九人昨日堺表ニ有死刑可被
仰付處暫御見合相成候由有之

朝廷に相伺越候ニ付 御沙汰有之迄之中細川淺野兩藩に引渡可申候其方相預
リ警衛可致候事

二月廿四日

東久世 前少將

宇和島 少將

一九四

二月二十四日
(三月十七日)

外國事務局輔伊達宗城、同東久世通禧ヨリ
細川護久(熊本藩主)、淺野長勳(廣島藩主)兩留
守居役へノ達書

堺事件ニ死刑ヲ赦サレタル高知藩士處置ノ件

細川 中將

留守居

安藝 少將

留守居

昨日堺表ニ有死刑ニ處せらるべき土州藩士九人暫死刑御見合ニ相成可申義朝
廷に相伺越置候 御沙汰有之迄之中右人數土州に引渡彼方ニ有預リ警固致候
様土州重役に申渡候間可相渡候事

二月廿四日

東久世 前少將

宇和島 少將

一九五

二月二十四日
(三月十七日)

外國事務局輔伊達宗城ヨリ
佛蘭西公使宛

堺事件關係高知藩士九人ノ死刑中止申出ハ朝廷へ言上シ掛役
へモ申渡シタル旨通知ノ件

辰二月廿四日

一九五 明治元年二月二十四日(三月十七日)

四五五

一九六 明治元年二月二十四日(三月十七日)

四五六

昨夜被差立候貴翰致拜見候然之昨日堺表おゐて佛國人ヲ殺害せしニ付死刑ニ處はべき土藩人二十人之内十一人處死刑候處殘る九人丈を見合吳候様被願候ニ付得其意候右ニ付

朝廷に言上致置候堺出張役人にも右同様申渡候以上

外國事務總督

宇和島少將

佛國公使

モンシユアレフンロセス 閣下

一九六 二月二十四日 外國事務局輔伊達宗城同東久世通禧ヨリ
(三月十七日) 副總裁三條實美宛

英蘭兩國公使上京外國事務局督山階宮晃親王佛蘭西軍艦御成
及堺事件關係高知藩士九人ノ死刑赦免ノ件

三條亞相閣下

通 禧
宗 城

玉體平寧奉賀候然之英蘭公使ハ彌上京相願候今月廿七日當表發途廿八日着
京之都合ニ取極候

右ニ付後藤象次郎田中弘藏兩人指登申候萬端御示談被成下候

一山階宮今廿四日於堺表佛軍艦に御乗込御挨拶明廿五日於神戸英之厚鏡船に
御出御挨拶之事

一昨日御下ケ賜物之義之篤与取調可申上候事

一土州刑人之儀九人丈命乞之儀佛之見證人より申立候右之

朝廷之權威を見爲始めは強く申立始メテ威權ノ行ハルヲ見テ又自國ノ仁恕
ヲ示ナラン何ニシテモ九人之命ヲ助得テ御同慶之儀ニ御坐候委細象次郎ヨ
リ可奉申上候勿々大亂毫海恕是祈

二月廿四日第七字

一九六 明治元年二月二十四日(三月十七日)

四五七

一九七

二月二十四日 總裁局顧問兼外國事務掛小松帶刀ヨリ
(三月十七日) 內國事務局判事大久保一藏等宛

堺事件關係高知藩士處刑英、蘭兩國公使上京及外國事務局督山
階宮晃親王佛蘭西軍艦へ御成ノ件

小松帶刀

木戸準一郎様

廣澤兵助様

大久保一藏様

堺之義追々申上候通ニ及發砲候人數二十人昨日割腹之御運ニ相成候半ニシ
て佛公使方申出候趣有之趣意之別紙を以申上候差向キ之義故久世公宇和島公
ニ御裁決御答相成申候一人ニも助命之事ニ無此上仕合御同慶奉存候儲
英蘭公使入京之義來ル廿七日川登リ伏見へ一泊廿八日入京之儀ニ御決定相成
申候

山階宮伊豫守様御同伴今日佛之軍艦に御出ニ相成申候細事可申上候得共過刻
後藤氏出立上京相成候ニ付同人委細心得相成候趣ニ付筆略仕候佛方昨日差出
候書翰之後藤氏持參故別段不差上候此旨要詞迄如此御坐候以上

二月廿四日二字

一九八

二月二十六日
(三月十九日)

佛、英、蘭三國公使上京參内ニ付諭告

二月二十六日

今般佛英蘭三國之使節上京參 内被 仰付候ニ付明廿七日大阪表發途水陸通
行同夜伏見表止宿廿八日着京被 仰出候右ハ此節御大政御一新被爲 遊深思
食之程被爲在候ニ付右御趣意ヲ奉シ聊不作法之處業無之様相心得町役相勤候
者ハ勿論一家一家ニ於テモ召遣候者ニ至迄篤ト可申聞候若哉心得違不法之儀
有之御國難ヲ引出シ候テハ屹度不相濟次第候之條早々此旨申聞候事

一九九 明治元年二月二十六日(三月十九日)

四六〇

但佛國公使ノ儀ハ來ル廿八日大阪發途伏見止宿廿九日入京被 仰付候事

(法令全書)

編者註 佛、英、蘭三國公使參内及退京ノ際ノ警衛方ニ關スル文書ハ「復古記」ニ詳細記載アリ

一九九

二月二十六日 内國事務局判事根雪江等ヨリ
(三月十九日) 同判事大久保一藏等宛

佛蘭西公使上京日程其他通知ノ件

佛公使上京之次第

一 廿六日騎馬隊八騎大坂へ着翌廿七日伏見迄差越廿八日滯伏公使一同入京之事

一 廿七日十二時迄ニ公使其外川口へ廻艦中寺町公使館へ一泊翌廿八日伏見迄差越一泊ニる廿九日入京之事

右手當向左之通

一 廿八日未明淀川舟貳拾艘位八軒屋へ手當士官乘船四艘位公使之時宜次第陸行可相成事

一 公使初士官八人

一 一等士官一人

一 下等士官六人

一 兵卒五十人

一 小仕四五人

一 七拾人位

一 伏見方乘馬十疋借用之事

成丈西洋鞍

一 同所方駕籠五ツ

一 垂駕籠

一 京旅館伏見一泊之處夜具手當之事

一 日本向ニる宜敷候

一九九 明治元年二月二十六日(三月十九日)

四六一

一九九 明治元年二月二十六日(三月十九日)

四六二

一 馬飼用麥等御手當之事

ル(イ) 英佛合用馬貳十三疋分

一 食物類入付之事

ル(カ) 品々可申出

一 食事道具等之手當ニ不及可持越との事

右之通佛公使方申出候趣ニ付當所方伏見迄之處ニ案内旁於此方手當可致候間
伏見着方之所ハ其御方方御曳請御手當向有之度候騎馬八騎ニ明日上伏之都合
ニ御座候間早々諸藩之内ニあるも曳請方等被命候義共可然御取計可被下候此旨
御掛合申上候以上

二月廿六日

小松 帶 刀
中根 雪 江

後藤象二郎様

木戸準一郎様

廣澤兵助様

大久保一藏様

此ヶ條京都ニ御手當之事

二〇〇

二月二十六日 内國事務局判事 中根雪江等ヨリ
(三月十九日) 同判事 大久保一藏等宛

堺事件關係高知藩士中死刑ヲ赦免サレタル者ノ處置ノ件

尙々佛公使へ御返翰之儀ニ入京之上御達可然候間御取調置被下候る入京ニ
相成候ハ、速ニ御渡相成度候

別紙貳通佛公使方差出久世公御開封ニ相成居申候付早々差上候右ニ付土州殘
人數之御所置御評議之上早々御達ニ相成候様無之るニ甚以不都合之事ニ御座
候間速ニ御沙汰相成候様有之度候次第之宇和島候能ク御承知相成申候付其御
方ニ御書付御認相成直様御達有之度候別紙相添此段早々御掛合申上候以上

二月廿六日

二〇〇 明治元年二月二十六日(三月十九日)

四六三

二〇一 明治元年二月二十八日(三月二十一日)

四六四

小松帶刀
中根雪江

後藤象二郎様

木戸準一郎様

廣澤兵助様

大久保一藏様

再白帶刀ニ之明日英公使同伴出立之筈雪江ニ之醍醐様へ相伺候る進退相決候筈ニ御座候

別紙佛公使ヨリ差出セシ二月廿三日付書簡貳通上ニアレハ茲ニ略ス

編者註 佛國公使書翰二通ハ一八九及一九二第號ニアリ

二〇一 二月二十八日

(三月二十一日)

御親征萬姓撫安國威振張ノ詔

二月二十八日

皇帝陛下親シク列侯ヲ玉座近ク被爲 召詔曰

朕夙ニ天位ヲ紹キ今日天下一新ノ運ニ膺リ文武一途公議ヲ親裁ス國威之立不立蒼生之安不安ハ朕カ天職ヲ盡不盡ニ有レハ日夜不安寢食甚心思ヲ勞ス朕不肖ト雖モ

列聖之餘業

先帝之遺意ヲ繼述シ内ハ列藩萬姓ヲ撫安シ外ハ國威ヲ海外ニ耀サン事ヲ欲ス然ルニ徳川慶喜不軌ヲ謀リ天下解體遂及騷擾萬民塗炭之苦ニ陷トス故朕不得已斷然親征之議ヲ決セリ且己ニ布告セシ通リ外國交際モ有之上ハ將來之處置尤重大ニ付天下萬姓之爲ニ於テハ萬里之波濤ヲ凌キ身ヲ以テ難苦ニ當リ誓テ國威ヲ海外ニ振張シ

祖宗

先帝之神靈ニ對ント欲ス汝列藩朕カ不逮ヲ佐ケ同心協力各其分ヲ盡シ奮テ國家ノ爲ニ努力セヨ

(太政官日誌)

二〇一 明治元年二月二十八日(三月二十一日)

四六五

二〇二

二月二十九日
(三月二十二日)

外國事務局輔東久世通禧、同伊達宗城、同權
輔鍋島直大ヨリ
佛、英、蘭各公使宛

謁見ノ爲參内アリ度旨通知ノ件

御門御對面被致度候間明卅日第一字參朝有之度候右之趣以書翰御案内申入候
此段如此御座候以上

二月廿九日

肥前侍從

宇和島少將

東久世前少將

英國公使

ハリエスバルケス 閣下

佛國公使

レオンロセス 閣下

和蘭國公使

デーテクラフアンボルスプロツク 閣下

右各通

二〇三

二月二十九日
(三月二十二日)

外國事務局輔伊達宗城、同東久世通禧、同權
輔鍋島直大ヨリ
佛蘭西公使宛

堺事件關係高知藩士九人死刑赦免ノ旨通知ノ件

土佐少將家來貳十人堺表於て貴國之海軍に對シ及暴行其罪を正ス之期ニ至リ
拾壹人を切て後跡九人助命致し候様過日貴翰を以申立之趣可致採用旨
朝命有之候ニ付拙者共よ御報如斯御坐候以上

二月廿九日

肥前侍從

宇和島少將

東久世少將

二〇四 明治元年二月三十日(三月二十三日)

四六八

佛國公使

モンシユアレランロセス 閣下

二〇四

二月三十日
(三月二十三日)

山内豊範(高知藩主)へノ御沙汰書

堺事件ニ死刑ヲ赦サレタル高知藩士ニ流罪言渡ノ件

土佐少將

其藩士堺表ニ於て外國人ニ對し暴行シタル二十人兼る割腹被 仰出候處於其
場佛人より歎願ニ寄り九人之もの暫時見合
朝廷ニ奏聞致吳候様申出其後別紙之通再應助命之儀願出候ニ付る之此節之所
置專外國ニ關係いたし候儀ニ付出格之寛典を以死一等を免し其藩へ被下置候
條流罪可申付事

二月晦日

二〇五

二月三十日
(三月二十三日)

佛蘭西、和蘭兩公使參内謁見記

附記 各國公使參内次第書

二月三十日午ノ半刻佛國公使レランロシユベニユス船將ロワシユビ
レツキス船將ペテイトワール參

朝

但副總裁始メ公卿諸侯及掛リ役員列座

一皇帝陛下親シク勅曰貴國帝王安全ナルヤ朕之ヲ喜悅ス自今兩國之交際益親
睦永久不變ヲ希望ス

佛公使曰

天皇陛下今日各國公使等ニ拜謁ヲ

賜ヒシハ余佛國ニ對シ玉ヒテ御厚意ナル確證ト仰キ奉ル也 貴國ノ衆民
ニ於テモ如斯高明ナル證ヲ知ル上ハ即チ

天皇陛下ノ尊キ御宸意ヲ遵奉スル事疑ヲ容レサル所ナリ故ニ今日ハ即後來

二〇五 明治元年二月三十日(三月二十三日)

四六九

二〇五 明治元年二月三十日(三月二十三日)

四七〇

ニ長ク祈念スヘキ日ニシテ 貴國ト各國ト至誠ノ交誼ヲ親クスル始ナル
ヲ以テ余我國帝陛下ニ代リ

天皇陛下并ニ貴國ノ幸福盛美ヲ祈リ深ク神明ノ守護アラン事ヲ奉願也

同日和蘭公使デーテクヲフアンポルスブロック書記クラインケース參朝
一 皇帝陛下自カラ勅スル前ノ如ク

和蘭公使曰隨近報承リ候處和蘭國王陛下安全也

天皇陛下長ク御安全ヲ保セ玉ヒ且御在位幾多ノ年ヲ重子玉ハン事ヲ希望シ
奉ル也

(太政官日誌)

(附記)

各國公使參

朝之件々左ニ記ス

一 前日各國公使エ何刻西洋第幾字令參

内之旨外國事務輔ヨリ書翰ヲ以三ヶ國公使エ通達ス

一 當日各國公使參

内之節外國掛リ公卿諸侯建春門内迄出迎

但外國掛リ判事一人ツ、公使旅館迄前導トシテ被遣公使同道ニテ參

内ス

一 公使虎ノ間迄誘引外國事務輔相勸

但判事附添

一 虎ノ間座席進退外國掛リ公卿諸侯相勸

但判事準之

一 茶菓ヲ賜フ程合ハ外國掛リ判事取計ヒ配膳ハ使番ニテ取扱フ

一 各國公使相揃候段外國掛公卿諸侯ヨリ以非藏人注進

一 副總裁及外國事務督輔内國事務督輔出會ス

一 皇帝出御于南殿

一 内國事務輔

出御之旨ヲ外國掛リ公卿諸侯エ通達ス

一 外國掛リ公卿諸侯公使ヲ誘引ス

但虎ノ間ヨリ日華門内ノ東階マテ誘引夫ヨリ直ニ昇

殿

二〇五 明治元年二月三十日(三月二十三日)

四七一

二〇五 明治元年二月三十日(三月二十三日)

但判事士日華門外マテ外國掛リ非藏人ハ東階下マテ附添

一日華門内外國掛リ公卿諸侯誘引之先へ内國事務輔前導ス

一公使ノ日華門ニ入ルヲ見テ樂ヲ奏ス

一前導ノ内國事務輔誘引シテ直ニ本座ニ着ス

一公使東階ヨリ昇

殿外國掛リ輔誘引ス

一公使拜

天顔

一公使名披露山階宮三條大納言侍ス通譯外國事務判事伊藤俊介亦侍ス
一有

勅語大臣山階三條之レヲ傳フ

一公使奉答ス

一判事公使ノ奉答ヲ言上ス

一公使隨從之士官進テ拜

天顔

一隨從士官名披露判事言上ス

四七二

一判事傳

勅旨

一禮式相濟公使西階ヲ下リ月華門ヨリ退ク

一公使ノ月華門外ニ出ルヲ見テ奏樂ヲ止ム

(太政官日誌)

二〇五 明治元年二月三十日(三月二十三日)

四七三

三月

二〇六 三月一日 副總裁三條實美、同岩倉具視等ヨリ
(三月二十四日) 英吉利公使宛

參内途上ノ英吉利公使ヲ襲撃シタル事件ニ關シ政府ノ處置方
針通知ノ件

附記 右襲撃事件ノ狀況及其ノ原因

昨二月卅日閣下參

朝之中途大和之産三枝翁城州桂村之産朱雀操意外之暴行ニ及貴國之兵士數人
ニ手を負ヒ候次第ニ相運ヒ候處幸付添之ものより壹人ヲ打留壹人ヲ貴國兵士
召捕候段申出候尤我之政府ニおいヌ專外國交際を重シ普親睦を厚さんウ爲
參

朝之義も申入候儀兼て御諒知之通候處頃日ニ至リ右様之所業數々有之候者必

竟我之政令不行届より生候次第各國ニ對シ實以汗背心外之至候勿論右之もの
餘類之有無精々探索を盡シ何處迄根を可斷候又召捕候三枝翁之兩國政府之重
大禮式を妨々不届至極ニ付嚴科ニ可處ハ勿論之事ニ候且又貴國之兵士手負の
も此治療不相届終ニ及死亡候歟又ハ是として職掌ニ離レ活計を失ふ者ハ我政
府ニ至當之養育料を與へヌ忿恚之一端を慰シ申度候我之政府之實意ニ候間
此段貴下兵士ハ勿論本國政府へも厚意貫徹候様以書面可申入旨
朝命有之候ニ付此段如是御座候已上

三月一日

三條 大納言

岩倉 右兵衛督

德大寺 大納言

越前 宰相

サアハルリーパークス 閣下

備考註 參内途上ノ英國公使襲撃事件ニ付其ノ狀況及原因ニ關スル「英佛蘭戊辰京都
參朝記聞」ノ記事左ニ附記ス

二〇六 明治元年三月一日(三月二十四日)

四七六

○同日 英佛蘭三公使參 朝ニ因テ今日已上刻總裁有栖川熾仁親王ハ既ニ東征大總督トシテ出軍中ナルヲ以テ不參副總裁實美具視ヲ始議定參與以下内國事務局ノ各官外國事務局督晃親王輔通禧宗城直大以下判事御用掛各參 内 六位以下卷纒ハ平日ノ定規ナリ然ルニ是日隨意タルベシト制度掛ノ參 當日ノ參役利通清廉孝允博文ハ 宮中領客ノ事務ヲ管理ス事務與右京大夫堤哲長令ヲ傳フ 當日ノ參役利通清廉孝允博文ハ 宮中領客ノ事務ヲ管理ス事務局頗ル繁劇ナルヲ以テ是日限非藏人松室豊後鴨脚和泉松室甲斐中川對馬ノ四名加勢トシテ參役ス

午半刻 西洋第 蘭公使ハ肩與ニ駕シ加賀ノ藩兵護衛シテ宿寺南禪寺ヲ出テ途中無難ニ參 内シ佛公使モ相國寺ヲ出薩摩ノ藩兵護送シテ共ニ參 朝ス其以前外國事務ノ判事各一人宛三公使ノ旅館ニ至リ路次ヲ先導ス公使禁門ニ臨ムノ報ニ因テ外國事務ノ月卿雲客及諸侯共ニ建春門ニ出迎ヘ外國事務輔誘引シ虎ノ間ニ至リ豫テ設置ノ椅子ニ着カシム接待官博文諸事ヲ辨理シ茶菓ヲ賜フ使番其供撤ヲ役ス兩公使ハ此席ニ在テ英國公使ノ參 朝ヲ俟ツ同刻英公使ハ肥後ノ藩兵一小隊左右ヲ護衛シ旅宿知恩院ヲ出ツ其途中ノ行列外國事務局ノ官員御用係宇都宮毅負某土肥眞一郎某ノ二名眞先ニ嚮導ス次ニ英國前列ノ第一龍動警部ノ一隊警視ヒコツク及警部拾壹名各騎馬ニテ前驅ス弘ハヒコツクト疆ヲ並ヘ前行セリ次ニ公使館隸屬護衛赤服ノ騎兵拾五騎前驅シ次ニ公使バークス馬上其傍ニ元輝騎馬ニテ誘引ス次ニ書記官ミットホルハ馬ヲ得ザレバ駕輿ニ乘リ同エス(ルノ行カ)ストサトウハ騎馬ニテ行醫官ウイリス及公使館隸屬數員陪從シ次ニ英國ノ陸軍佐官ブラツサウ同ブリウシ等ガ率キタル第九

聯隊赤服ノ兵四拾八名 米國報告一小隊ニ作ル英國代理ノ護衛兵ハ行列ノ前後ニ護送ス且客員トシテ公使ニ隨從上京シタリシ海軍ノ醫官ホルス及ライディンクスノ兩官竝ニサツトン等モ是日公使ヲ始其隨員等各 禁門ニ入ル景況ヲ觀ント其列尾ニ隨行ス(圖者中略) 恁而公使ノ行列甚嚴肅威儀整々トシテ徐歩ス抑海外人ノ京内ニ入リシハ振古 崇神 仲哀ノ兩朝ヨリ外客來 朝歸化ノ事起リ其後 歷朝新羅高麗百濟任那耽羅渤海隋唐等ノ來客絡繹ズ 桓武ノ朝今ノ西京平安城造營遷都ノ際モ鴻臚館ヲ建造シ外客駐劄ノ設ト爲ラル是サヘ後ハ太宰府ニ嚮シ京ニ入ルハ罕ニシテ鎌倉武將ノ時代ハ鎌倉ニ徵ヒ足利將軍ノ時代ハ室町ノ花營ニ延見ス其餘風尙殘リ織田右府ハ長崎駐在ノ耶蘇ノ教師波爾杜瓦爾ノ僧韋爾曼伴天連ヲ江州安土ニ延見シ後ニ京師四條坊門ニ南蠻寺ヲ建立シ其地ニ居ラシム是西洋人ノ京洛ニ來ル始ナリシガ前關白豐臣秀吉耶蘇教ヲ禁スルニ至リ遂テ其本國ニ歸ラシム會朝鮮ノ信使聚樂ノ亭ニ來リシモ文祿慶長兩度ノ遣軍ニ一旦隣交絶果シテ太政大臣徳川家康隣接ノ不和ハ後害ノ基ナリト對馬守宗義智ニ交際挽回ノ周旋ヲ委る竟ニ兩國ノ交誼復舊スト雖信使江戸城ニ至リ京師ハ僅ニ洛東ニ止宿セシ而已其他ハ外客京ニ入ルノ例モ無カリシニ近年荷蘭人關東下向ノ便次洛内北野ニ至ルヲ見シダニ京童ハ一珍事ナリト云ヒハヤセシニ豈計ランヤ今般ハ外客入京スル而已ナラズ參 朝シテ 龍顏ヲ拜スルノ風説遠近ニ紛々タルヲ傳ヘ聞各其行粧ヲ觀ント京地ハ勿論城和攝河泉江丹等ノ近國ヨリ上京セシ幅濶ノ士民老若男女各國公使各所ノ旅館ヨリ出行ノ道路ニ充滿シ恰モ立錫ノ地無キマデニ群集ス然レ

二〇六 明治元年三月一日(三月二十四日)

四七七

ドモ官吏難者ヲ制止シ道ヲ閉キテ通行ニ支吾ナカラシム公使櫻ノ馬場ヲ出小堀通ヲ左ニ折リ林下町ニ轉ジ橋本町ヲ經公使ノ馬元吉町此街路ヲ京俗通シテ新橋通ト稱スニ至ル頃ハ前駟ハ既ニ四條繩手通ヲ右ニ轉折シ辨財天ヲ北ニ向テ進行ス公使館隷屬護衛ノ騎兵元吉町ヲ過キ繩手通辨財天町ノ街角ヲ將ニ北ニ向ヒ轉折セントスルニ臨ミ忽然二名ノ刺客白刃ヲ揮テ左右兩側ノ市屋ヨリ突出シ騎兵ノ眞先ニ來ルヲ斬リ其後ハ暴徒縱橫ニ飛躍シ手ニ當ルヲ襲撃ス其猛勢頗ル膺リ難シ元來不意ノ變ナレバ騎兵等モ驚愕シテ頓ミニ防禦ヲ爲スニ至ラズ行隊散亂大ニ騒動ス是日公使ハ何等ノ所以アリテヤ朝服セズ黒キフロックコートヲ着タレバ其行粧ノ甚ク輕微ナルニ暴徒モ心ヲ釋セシニヤ深ク注目セズ却テ騎兵ノ着服金飾美麗ナルヲ見之ヲ公使トヤ誤認ケン直黨ニ騎兵ノ列中ニ衝突セシヲ一旦ハ詢騷セシカドモ暴徒ノ寡キニ怯鬼離レ踏止テ防禦ス暴徒ハ騎兵ノ搏撃ヲ屑トモセズ右ヨリ突出セシ一人ハ辨財天町ヲ北ニ暴撃ス是乃朱雀操ナリ左ヨリ斬入シ一人ハ新橋通元吉町ノ方ヲ襲ハントス是乃三枝藪ナリ元吉町ニハ公使在レバ騎兵撲塞シテ禦キ止メントス騷動ニ馬ハ駭キテ騰驤シ群集ノ老若ハ難ヲ避ケント狹隘ノ街路ヲ四方ニ逃走ス其混雜宛然鼎ノ沸クガ如ク右往左往ノ群集ニ支ヘラレ騎兵ノ携タル手槍モ活用隨意ナラズ且進退モ自由ヲ得ザレバ暴徒ハ之ニ力ヲ得益兇暴ヲ恣ニス如此護衛兵ノ中ニ危變アレドモ道路狹隘轉折スルノ餘地無ケレバ公使ヲ始元燁等モ前路ノ混雜何事ナルヲ知ラズ弘ハ最初前導ニ在リテ後列ノ變アルヲ見放ニ忽一人ノ暴徒列ヲ衝キ既ニ騎兵ヲ斫リシ體ニテ尙白刃ヲ揮テ前導ノ方ニ向ヒ襲撃セント進ミ來レバ吐

嗟ト驚キ急ニ馬上ヲ飛下リ佩刀ヲ拔キ翳シ飛鳥ノ如ク走セ返リ撃斥ケントスルニ却テ暴徒抵抗シ弘ニ立向ヒテ烈戰ス弘ト等シク眞先ニ前導セシ宇都宮土肥ノ兩官吏ハ此急變ニ狼狽シ弘ガ危険ヲ授ントハセズ事狀ヲ皇城ニ奏セント馳出シテ三條大橋ノ方ニ至ル肥後藩ノ護衛兵ハ群集中ノ異變何レヲ敵ト確見難シカ又ハ遽然ノ暴發ニ狼狽セシカ或ハ暴徒ノ多寡ヲ知ラズ視認ニ猶豫シテ度ヲ失ヒシカ群集ニ紛レ入テ防禦セントスル者モ無カリシカバ或說ニ肥後ハ未ダ頑固ノ舊弊ヲ更メズ鎖港攘夷ノ論說ヲ立ル者少カラ子バ却テ内心ニ暴徒ノ志ヲ哀レミ憂國ノ士慷慨ノ餘リニ在斯大舉ニ及ビシヲ其情義ヲ察セズ之ヲ討ツハ知情ノ武士ノ本意ニ非ズト大義名分ヲ誤リ雜沓中ヲ僥倖ニ事ヲ紛冗ニ假託シ手延ニ本務ヲ等閑セシナラント其頃密ニ風評セシ者アレドモ素ヨリ推量ノ臆說ニシテ其實否ヲ詳カニスルニ所由シ弘ハ救援ノ者一人モ無シト雖獨奮激大ニ敵ニ膺リ一上一下互ニ斫結ビ撃ツ太刀力餘リ過ツテ蹉跌シタリシカバ暴徒其虛ニ乘ジ擊着シ刀鋒些物間遠クシテ匿ニ弘ガ頭上傷ク弘ガ危急ノ一擊暴徒ハ面部要所ニ傷ケラレ相擊ノ體ニテ互ニ二ノ太刀ヲ撃ツ氣力撓ミ踟躕ス此時マデモ元燁ハ公使ト共ニ遙ナル元吉町ニ在テ繩手通ノ街角ニ隔遠ナレバ先驅ニ在斯變アルヲ知ラズ行列遽ニ止リ群集動搖ノ爲體ヲ怪シミ馬ヲ馳セテ街角ニ至リ初メテ前駟ノ困難ヲ目撃シ忽チ馬ヨリ飛下リ遙ニ弘ガ苦戰ノ體ヲ見其危急ヲ救ハント走セ至リ後ニ立塞リ暴徒ノ肩先ヲ一刀ニ斬斃ス弘ハ頭上ノ鮮血流レテ眼中ニ滲リ入ルヲモ屈セズ直チニ起テ其首級ヲ刎る英國代理公使アダムスガ日本紀事第二册第七回中ニ後藤刀ヲ振上ゲ他ノ日本人ヲ斫

井親下リ當時ノ事ヲ余ニ語レリ其言フ所左ノ如シ○余一人ノ列ヲ衝キ人ヲ斬リ來ルヲ見馬ヨ
 ノ下ニ斬斃サントシタルニ不幸ニシテ後藤ノ刀把塗飾シタル者ナレバ誤テ掌ヨリ脱シタリ
 是ニ於テ余復獨彼ト闘ヘリ余今傷ク所ノ血流レテ一眼ニ入り一眼看ル能ハザリシガ十合許
 ラニシテ彼ヲ斃シ則其首ヲ取リテシユル、エーチ、ハク、スニ示セリト見ヘタレドモ米國報告書
 ニ似タリ是ハ弘ガ元燁ヲ優獎シテ刀ノ掌中ヲ脱シ其擊ツ刀ノ輕カリシヲ云ハズ元燁ガ一
 刀ノ下ニ斃ルト書シカ但ハアダムスガ日本紀事ニ所載ニ誤リアリヤ兩說曖昧トシテ虛實何
 ク弘ガ加筆ノ書ニ據ル元燁ト共ニ公使ノ側ニ携ヘ至リ實檢サセシメ不慮ノ暴發ヲ謝シ反響
 慰メ諭シテ彼ノ怒ヲ宥ム先是公使ハ心ヲ苛ツト雖狹隘ノ街路轉折ノ別路無ケレバ前驅ノ
 騷動何事ナルヲ知ル事ヲ得ザリシニ忽一人ノ暴徒其轉折ノ街角ヲ走出白刃ヲ揮リ手當便次
 ニ斫立來ルヲ護衛二人尙過ラントス公使其走過ヲ見護衛兵ヲ顧ミ疾ク渠ヲ捕ヘヨト喚ハル
 暴徒ハ最初護兵一名ヲ斫其後ハ縱橫ニ斫旋リ手近ナル者數名ニ輕重金瘡ヲ負セ兇暴ヲ恣ニ
 セントス護兵遮リ止メント挑ミ戰フヲ毫末モ屈セズ猛虎ノ勢ヲ奮ヒ四方ニ膺ルニ進退車
 輪ノ如シト雖其身鐵石ニアラザレバ銃劍槍刀ノ爲ニ數ケ所ノ痕傷ヲ受ケ殊ニ餘リ烈ク戰ニ
 所持ノ利刀折レ何レナルヲ知ラズ下姑弘ガ訂正ノ書ニ據ル忽チ敵對スル要器ヲ失ヒ進退
 于此迫リ指副ノ短刀ヲ探ルニ最前ヨリノ激動中何レニカ落失タレバ今ハ何如トモ身ヲ凌グ
 術計盡果防禦ノ透ヲ候ヒ逃レ去ラントスミットホール之ヲ視認急ニ騎兵ニ指揮シテ其逃レ
 ントスルニ銃擊サセシム騎兵指揮ニ隨カセ直ニ裝劍ヲ脱シテ發銃ス其彈丸過タズ暴徒ノ足

ニ的中忽チ行歩ニ苦シ辛フシテ人家ノ後園ニ遁レ潛竄セントセシカドモ續テ追ヒ迫リ來
 レバ今ハ力盡キ勢窮リ竟ニ英國護兵ノ爲ニ捕縛セラレ道路ノ騷動ハ鎮靜スト雖公使ハ前驅此
 變ニ遭フ而已ナラズ負傷ノ者重輕數名ナルヲ以テ本日ノ參 朝ヲ辭シ旅館ニ還ラント先ツ
 途中ノ事變ヲ石筆ニテ帖紙ニ撮記シ騎兵ニ齎シテ既ニ參 朝セシ佛公使ニ報ケ知ラセ其
 身ハ馬ノ韁ヲ返シ元ノ街路ヲ知恩院ニ還ル在斯事變ニ至リ説諭シテ參 朝ヲ勸誘スベキ事
 狀ナラズバ元燁弘等モ爲方ナク公使ノ意ニ隨カセテ甲乙ノ護衛兵ヲ纏メ是等ヲシテ護送サ
 セシメ其身ハ暫時止マリテ專ラ金瘡人ヲ勞リ優恤ヲ盡シ懇ニ扶送ノ準備ヲ周旋ス此一舉タ
 ルヤ兇徒僅ニ兩名ニテ殆七拾名許ノ同勢其餘護送ノ兵員若干ノ戒嚴ニモ屈セズ襲撃シテ英
 公使館附屬ノ護衛兵拾五名 日本記事ニハ拾壹名ニ作ル姑クノ中九名ニ傷ケ第九聯隊ノ兵卒
 一名公使ノ陪卒一名 是次ニ云フ公使ノ馬丁ナルベシ馬 是日公使ハ僥倖ニ微服 米國報告書ニ
 ルハ誤ナリ弘ガ記憶ノ談話ニ據テ姑ク于此略申ト 是日公使ハ僥倖ニ微服 米國報告書ニ
 ス然ルヲ以テ暴徒モ深ク公使ニ目ヲ注ザリシナリシタレバ暴徒モ強テ過ルニアラズ下已ニ
 間近ク暴徒來リテ白刃ヲ揮ル其氣勢猛烈ニ過キ失ツテ跌ク機會ニ擊ツ刀公使ノ軀ニ及バス
 韁ニ立傍タル韁ノ馬丁ガ脚部ニ傷ケ 米國報告書ニ公使ハ正服ヲ着シ肥大ノ馬ニ乘居タル事
 狙ヲ失ヒシヨリ其刀ハ公使ノ馬丁ニ及ヒ其脚部ヲ傷セラレ云々ト見エタレドモ其事狀豫テ
 傳聞スル趣ト甚ク異ル所アレバ一日弘ニ會ツテ實地ノ目撃ヲ質スニ其答ニ公使ハ微服セシ
 ニ因テ暴徒モ目ヲ注メ狙撃スルノ事ニハアラズ只相手ハ誰彼ト選ブ餘間モ無ケレバ亂撃
 ニ斫旋リ其刀馬丁ニ傷ケシニテ公使ヲ狙撃ト云フマデニハアラズサトウガ乘馬ニ二個所ノ

傷ヲ負ハセタリシハ親シク尙暴撃シテサトウガ乗リシ馬ニ二個所傷ク此爲ニ公使ハ辛フシ目撃シテ知ル所也ト云ヘリ

テ危急ノ免カレシナリ今此變厄ニ罹リ警衛ノ士卒傷ヲ負フ者輕重都テ拾名一ナラズ本年八月廿七日通禧ガ英公使ニ扶助金ノ授與ヲ照會ノ尺素ニハ護送兵之内二人疵ヲ被リ終ニ生業難營ニ至リ候ヘハ今般歸國中略右養育之爲並右二名之外疵受候六名へ償補トシテ此度洋銀壹萬四千枚差進候下略トアルニ據レハ負傷者八人ナリシハ勿論ナリ然ルニ疑ハシキハ同年九月朔日公使ヨリ通禧ニ來タス扶助金收領則其金分與ノ詳細ヲ報ケシ書牘ニ護衛之者疵ヲ受候ニ付右償金拙者忝致受納候中略右金子左之通致分配候中略第一疵ヲ受身自由ニ相成不申無餘儀可致歸國兩人之者ハ五千弗ツ、中略第二右英國ニ送候所ノ路用トシテ兩人四百弗ツ、中略第三殘金三千貳百弗ヲ重疵ヲ受候六人ノ者へ五百弗ツ、薄疵ヲ受候者ニハ百弗ツ、配當致候下略此書ニ所記ノ人員前ニ重傷身體不利ノ者二名次ニ重傷ノ者六名次ニ所謂薄傷ノ者へ百弗宛トアルヲ計算スレハ殘銀三千貳百弗ノ内重傷六名ニ五百弗宛ヲ分與スル時ハ五六ノ三千弗ハ之ガ爲ニ引キ全ク殘ル銀貳百弗ナリ其ヲ百弗宛分與ト見エタレバ薄傷ノ者二人ナリシハ論ヲ俟タズ然レバ二人ト六人ト二人都合拾名ナリシ事此公使ノ書牘ヲ以テ明證トスベシ前ニ云フ通禧ノ書牘ニ身體不自由二名ノ外疵受候六名ヘ云々トアルヲ以テ對照スレバ二名ノ差アリト雖現在其救助ヲ分配セシ人員ヲ以テ正員トスヘキハ勿論ナリ然ルニ米國政府ニ報告ノ書中ニ公使隨從ノ衛兵八名ニ日本人ノ馬丁ヲ加ヘ九人トアレドモ當時米國公使ハ伊國兩公使ト共ニ參朝ヲ辭シ東下シ橫濱ニ在リテ傳聞ノ登記ナレバ謬誤ナシトスベカラヌ又三月六日米國書記官ホルトメンガ舊外國奉行加賀守江連堯則ニ報知ノ書牘中公使モ少シク創ヲ被リ英人九人モ亦創ヲ受ケ其ノ内二人其創甚ナリト記セドモ同朝兵庫ヨリ歸港ノ米國汽船ロークル號神戶ニ在リテ京地ノ風説ヲ聞テ談話セシヲ以テ記セバ誤聞アラシク計リ難シ如此各書ニ所載一ナラズト雖公使ノ書牘ヲ以テ正説トスベシ只疑ハシキハ英人ハ九人ニシテ馬丁ヲ加ヘ拾名ナリヤ又全ク英人ノミ拾名ナリヤ未ダ其詳ナルヲ知

ラズ又本文公使ノ馬前ニ迫リサトウガ馬ニ傷クト云ヘルハ米國報告書ノ所見ニ因テ其負傷于此記載スト雖未ダ安ンゼザル所アレバ尙其事ニ關係ノ官吏ニ質シ追テ校正スベシ其負傷ノ重キハ流血衣服ヲ染メ倒レテ起ツ事ヲ得ズ僥倖ニ醫官數名アレバ走セ來テ假ニ停血藥ヲ施シ各旅館ニ還ラントスルニ負傷ニ弱リテ馬ニ騎リ難キ者ハ人夫ヲシテ昇シメント其丁夫ヲ促シ役セシムル爲暫ク時間ヲ費スニ元輝弘等甚ク氣ヲ焦テ傷者ノ治療ハ遲速分陰ヲ爭フ是第一ノ急務ナリ豈緩セニスベケンヤト驟リニ督促シテ之ヲ旅館ニ送ラシメ身體自由ヲ得ル者ハ苦痛ヲ忍ヒ馬ニ跨リ各旅館ニ還リ便室ニ入ル醫官集ヒ寄りテ治療ヲ加フ其術ノ絶妙且迅速ナルト勉強ノ甚シキトヲ見ル者甚ク感賞ス(編者註 此處ニ「英蘭兩公使旅館之略圖」一暴徒襲撃實地略圖「佛公使旅館略圖」アルモ略ス)如此施術過カナレバ暫時ニシテ畢リ臥床ヲ設ケテ之ニ安臥サセシム又擒ノ暴徒ハ英國衛兵ノ手ニ捕縛セシヲ以テ一旦旅館ニ率行ントスレドモ歩行ヲ得ザレバ竹轎ニ駕セテ送ラントスルニ昇丁頓ニ在ラザレバ其近邊ナル路傍ニ物ヲ販キ居レル商夫兩名ニ命シ昇シメントス商夫頻リニ辭スルヲ強チニ説得テ昇送サセシム公使ハ旅館ニ還リ途中不慮ノ異變起リ其爲ニ參朝ヲ辭スルノ尺素ヲ製シ旅館接待ノ官吏ニ託シ佛公使ニ送致ス官吏走使ニ齎ラシ傳達サセシム先是佛蘭ノ兩公使ハ 輪命ノ時刻ヲ違ヘス各參朝シ引カレテ虎ノ間ニ至リ途中ノ變事アリシヲ知ラるバ只管英公使ノ朝スルヲ俟ツ事良久シク既ニ定刻ヲ過クルト雖朝セザルヲ審シミ各心ヲ安ンセザリシニ忽地見歩使ノ小吏走セ入テ四條驛ノ急變ヲ報ケ英公使ヨリ佛公使ニ贈ル書牘ヲ出ス執次交取シテ博文ニ事狀ヲ傳ヘ英公使ノ書牘ヲ交付ス博文先其書牘ヲ取領シ事未タ明白ナラズ其

實否確報アルマデ必他言スベカラスト執次ニ示シ出テ小吏ニ面接シ實地ノ景況異變ノ詳細ヲ審問スルニ小吏具陳顛末曖昧トシテ狀ヲ詳ニセザレバ博文大ニ叱リ疾ク走セ歸テ事狀ヲ穿鑿シ更ニ明細ヲ具狀スベシト告懲シテ追返シ暫ク其變ノ報アリシヲ竊ミ竊ニ外國事務ノ督輔ニ事實ヲ報ケ容易ナラザル大事件今兩公使此異變ヲ聞カバ如何ナル異論ヲ發シ竟ニ葛藤ニ至ランモ測リ難シ懲ニ事ノ實ヲ報ケ難事ノ端ヲ開カシヨリ寧暫ラク變ヲ韜ミ兩公使ノ謁見ヲ行ハル、ニ如カズト商量シ兩副裁及議定參與ト議リ上奏シテ英公使ニ先立テ佛蘭兩公使ノ謁見式ヲ行ハレント 朝議頓テ決シ專其準備ヲ爲ス外國事務輔並博文等ハ直ニ虎ノ間ニ至リ兩公使ニ對シ英公使ノ參 朝甚ク延引ス其遲參ヲ俟チ徒ニ時間ヲ消費スルハ無益ナリ速ニ謁見アラバ其間ニ英公使モ參 朝スベシト勸誘ス兩公使モ俟間ノ久シキニ倦ヤシツラン其說ニ同シ英公使ノ朝スルヲ俟タズ拜謁セン事ヲ首肯セシカバ外國事務輔非藏人ヲ以テ兩副總裁以下關係ノ各官ニ報ズ副總裁及外國事務督內國事務督輔出テ會ス一應口誼畢テ各退引以後謁見ノ式ヲ行ハル 者註 (以下謁見式ノ模倣及ヒ其儀畢ツテ)
(公使月華門ヨリ退出迄ノ記事中略)
公使復ヒ虎ノ間ニ歸リ以前ノ椅子ニ着ク博文懷中ヨリ英公使ノ書牘ヲ出シテ佛公使ニ交付シ異變ノ概略ヲ報ク兩公使驚愕遽然辭別シ退 朝ス總テノ接遇參 朝ノ時ノ如シ佛公使宮門ヲ出ルヤ馬ニ乘テ鞭ヲ加ヘ馳セテ知恩院ニ至リ英公使ニ面接シ大ニ彼ヲ煽動シテ共ニ難波ニ下リ直ニ江戸ニ至ラン事ヲ勸誘ス英公使動ク色ナク不慮ノ暴發ニ遭フト雖朝官克ク職掌ヲ盡シ防戰シテ手班ヲ負シヲモ屈セズ暴徒ヲ斬戮セシヲ感賞シテ更ニ怒氣ヲ起サズ佛

公使ノ煽動ニ與セザリシハ大政維新 朝憲振興ノ 皇業ニ障碍無キ而已ナラズ却テ佛公使ガ舊幕府ヲ佐クルノ遊說ヲ暗ニ挫クニ似タルモ王政復古ノ大槓倅ト謂ツベシ却說兩公使退朝ノ後宗城 勅旨ヲ奉シテ知恩院ニ往向ヒ續テ督宮ヲ始兩副總裁及議定並ニ參 朝係通禧清康元擲利通眞臣博文等一同退 朝衣體ヲ更ル間モ無ケレバ各朝服ノ儘陸續トシテ同所ニ至ル公使出テ面接ス宗城先ツ 勅旨ヲ宣傳フ其 鳳詔ノ旨趣今日途上不慮ノ遭厄幸ニシテ公使ノ身體無事ナリシヲ 聞食シ 天氣斜ナラズ然レドモ其爲ニ參 朝ヲ辭シ延見ナキヲ深ク遺憾ニ 思食スノ 觀旨ヲ詳ニシ慰問ノ情ヲ盡ス公使 宸慮ノ篤キヲ感戴シ更ニ不平ノ體勢ナシ爾後各官公使ニ對ヒ先ツ公使ノ恙ナキヲ賀シ次ニ今日不慮ノ暴發アルモ畢竟政府ノ命令嚴密ナラザルヨリ在斯兇暴ノ者アリテ已ニ外國ノ交際ヲ破ラントス其罪甚タ重シト 逆鱗アラセラレ第一ハ海外各國ニ信義ヲ失ハセラレン事ヲ深ク 宸襟ヲ惱セラル、ノ實情ヲ縷述シ混更忿怒ノ氣ヲ解カシメント言ヲ盡シテ陳謝ス公使モ今宗城宣傳セシ 勅旨ノ懇篤ト各官陳謝ノ深切ナルヲ感ゼシニヤ平素ノ激烈ニ反シ然而已忿怒ノ氣色モ無ク從容トシテ先ツ慰問ノ丁寧ヲ謝シ今日 召ニ依テ參 朝ノ途上道ヲ要シテ暴徒ノ襲撃ニ遭ヒシカドモ元輝弘ノ兩接待官強勇ノ防戰ニ虎口ヲ免レ身ニ一點ノ負傷ナキハ全ク兩官其職ヲ盡シ救助ノ勳功比類ナキニ依テナリ是偏ニ 朝廷ノ款接尋常ナラズ特別ニ外人ヲ親愛セラル、ノ 襟冲ヲ恐察ス然レバ今般ノ事件ハ 天朝ノ措辦ニ委シ成敗ハ政府ノ裁斷ニ任スベシ情事ノ爲體ヲ思惟スルニ兇徒ノ暴行余ニ對シテノ亂妨ヨリモ 朝廷ニ對シテ逆意非禮ヲ極ム其

ハ今般佛蘭兩公使及余ガ輩ハ 朝廷ノ 召ニ應シ上京 宮城ニ延見セラル、者ナレバ之ヲ 犯スハ余ガ輩ヲ犯スニ非ズシテ其實、朝廷ヲ犯ス者ニアラズヤ是則 朝廷ヲ侮辱サセシム ルノ甚シキ者ナリ政府其 朝廷ノ耻辱ヲ雪クノ道ヲ知ラバ至當ノ處置アルハ勿論ナリト答 フ各官其言ノ殊勝ナルヲ感シ在斯不慮ノ變ニ及ブモ公使ノ爲ニ注意スル事ノ不逮ヨリ國辱 ヲ施出ス而已ナラズ偶招請ノ外客ニ對シ不法ノ舉動アルハ實ニ百官ノ慙愧ノ至ナリト丁寧 反覆謝過ノ實情ヲ見ハス公使尙各官ニ説テ云ヘラク纏ニ神戸堺等ノ事ノ序ニ議シタル如ク 外客ヲ襲殺スル者ハ假令士官タリトモ自裁ノ榮ヲ與ヘズ貶シテ平民ト爲シ尋常ノ死刑ニ處 スルノ法ヲ立速ニ之ヲ天下ニ布告セラレ且 天朝實ニ外國ト交際懇親ノ 淑慮ナルヲ公布 シ邊陲ノ衆庶ニ知ラシメラル、事政府ニ於テ必要ノ急務ナラズヤ抑 皇國ニ奇代ノ一種黨 アリテ無辜ノ外國人ヲ殺害スルヲ 朝廷ノ爲ナリト云ヘル無狀ノ暴行ニ遭ヒ從前ノ力爲ニ 非命ノ死ヲ爲ス者幾干ナルヲ知ラズ疾ク其徒ノ黨中ニ行ハル、邪僻ノ感ヲ解カシメ誤謬ノ 根源ヲ斷絶サセシムルモ亦政府ノ緊要ニテ是各位職掌ノ第一ナリ片時モ猶豫セラルベキニ 非スト忠告ト施行ヲ督促トヲ相半セシ論辨ヲ爲ス各官ハ彼カ忿怒ヲ宥メ後日ノ葛藤勿カラ シメントスルヲ主トスレバ公使ノ誨示ニ悖ラズ其所言ヲ領承シ彼ガ箴警ヲ負荷セン事ヲ首 肯ス公使各官ノ從順ナルニ彌隔意モ無キ體ニテ余ガ一身ハ無難ナリト雖只傷ムベキハ衛兵 數名ノ負傷ナリ其中ニハ金瘡輕カラザル者アリ專治療ヲ施サシムレドモ醫員モ死生ヲ診シ 定ムルヲ得ズ請フ各位負傷ノ容體ヲ點檢アラン事ヲト陳述ス各官辭スベキ事狀ナラ子バ延

レテ傷者ノ居所ニ至リ倩其負傷者ノ容體ヲ看ルニ輕重數名夫々醫官治療ノ術ヲ施シ用意最 丁寧ナリ前ニモ云ヘル如ク醫官數名ノ隨行アリシハ是一ツノ天幸ナル上其醫員等ガ施術ノ 神速感スルニ耐タリ恁テ後各官尙公使ヲ慰メ暴徒ノ餘黨ヲ搜索シ之ヲ擒獲シ以兇暴ノ根ヲ 斷ツノ策略今日ノ急務ニシテ瞬間モ躊躇スベキ時機ナラ子バ諸事ノ商議ハ翌日ニ定メ互ニ 再會ヲ約シテ分袂ス(編者中略)

(編者前略)(編者註 以下ハ襲撃ノ原因ニ關スル三枝翁ノ供述ナリ)尙暴舉ノ原由ヲ糾問スル ニ過日外客參 朝ノ禮典ヲ行ハセラル、ノ布令ヲ拜承シ倩開港以降ノ事狀ヲ顧慮スルニ舊 幕府一時偷安ノ權策ニ外客渡來ノ港ヲ開キシヨリ

先帝深ク 宸襟ヲ惱セラレ鎖港攘夷ノ 勅諭ヲ下サル、事屢ナレ共幕府因循 朝命ヲ奉ゼ ズ剩前將軍家茂辭職ヲ口實トシ其實ハ外交條約ノ 勅許ヲ奏請シ一橋黃門ヲ始在京ノ閣老連署ノ狀ヲ捧ケ逼テ共ニ 勅許ヲ下サレン事ヲ請フ時機止ム事ヲ得サセラレズ條約ハ 勅許アラセラレシカドモ兵庫 ノ開港ハ禁セラレシヲ是ヲモ亦客歲慶喜 玉座ノ下ニ逼テ竟ニ攝海開港ノ 勅許ヲ請ヒ受 ク畢竟幕府偷安ヲ主トシ彼ヲ制スルノ威力ナキニ起ルト雖彼其軟弱ヲ侮リ 皇威ヲ恐レズ 大ニ蔑如シ猖獗ヲ恣ニスル傲慢ノ弊尙

天朝萬機ヲ 御親裁ノ今日ニ至リテモ更メズ既ニ神戸堺ノ事件ヲ難論シ見證ヲ出シテ數名

二〇七 明治元年三月一日(三月二十四日)

四八八

ノ人命ヲ斷シム其暴慢 皇國人トシテ誰カ忿怒セサル者アランヤ是余ガ平素ノ持論ナリ然ルニ今日飲酒ノ爲ニ憤怒ノ氣ヲ發シ外夷入テ 禁内ヲ汚スヲ見ルニ忍ビズ前後ヲ忘却シテ在斯一事ニ及ベリト白狀ス

二〇七 三月一日
(三月二十四日)

參内途上ノ英吉利公使ヲ襲撃シタル三枝翁ノ處罰案

戊辰三月一日

昨日於途中同類申合白刃ヲ以隨員ニ爲手負候ニ付參内も被差延御交際を妨亂行之始末重疊之不屈者ニ付帶刀を奪ひ士籍を削り來ル四日顯戮斬罪之上三日之間令梟首事

編者註 本文書ハ記錄中單ニ前掲二〇六ノ附屬トシテ綴込アリ前後ノ關係詳ナラザルモ「外務省記」ニハ「春嶽私記」ニ云三月朔日此夕三條岩倉兩卿御退散ヨリ旅館へ御行向候昨日之暴動ヲ謝セラレ生捕之者ハ來ル四日帶刀ヲ奪ヒ士籍ヲ削リ斬首シテ三日ノ間梟木ニ懸クヘキノ書面ヲ示サレタリ云々ト有リ案スル此ノ書ナルヘシトアリ

二〇八 三月二日
(三月二十五日)

外國事務局輔伊達宗城同東久世通禧同權輔
鍋島直大ヨリ
英吉利公使宛

謁見ノ爲參内アリ度旨通知ノ件

御門御對面被致度候間明三日十二時御參
内有之候様致度候右之趣御案内爲可申入此段如此御坐候以上

辰三月二日

肥前侍從
宇和島少將
東久世前少將

英國公使

サアハルリーパークスケシヒ 閣下

編者註 三月三日各國公使參内並ニ其後退京ノ際ノ警衛ニ關シテハ「復古記」ニ記載アリ

二〇八 明治元年三月二日(三月二十五日)

四八九

二〇九

三月二日 英吉利公使ヨリ
(三月二十五日) 副總裁三條實美、同岩倉具視等宛

參内途上ノ英吉利公使襲撃事件ニ付テハ苦情申立サル旨申出
ノ件

Kioto, March 25, 1868.

The undersigned has had the honour to receive the letter of their Excellencies dated yesterday informing him of the deep concern with which the Mikado's Government had heard of the murderous attack made upon the undersigned when proceeding on the 23rd instant to the Palace of the Mikado to be received by His Majesty at a public audience.

The undersigned trusting entirely to the proceedings which he felt assured would be taken spontaneously by the Mikado's Government addressed to Their Excellencies no complaint and made no demand for reparation. He was convinced, and events have justified this conviction, that Their Excellencies would perceived that the dignity and honour of His Majesty the Mikado had been outraged even more gravely than that of Her

Majesty the Queen. He had been expressly invited to Kioto by His Majesty the Mikado in common with all the other Foreign Representatives as a proof of the friendship entertained by His Majesty for the Powers with whom Japan is united by Treaty relations, and the undersigned had willingly responded to this gracious invitation in order that he might show that his Sovereign and Government are animated by similar friendly feelings toward Japan and in order to pay to the Mikado those high marks of respect which are due to the sovereigns of other powerful States.

It is indeed unfortunate that such an occasion should have been selected by evilminded men for the commission of an outrage which might have utterly defeated the important object which the Mikado had in view.

The repeated messages sent to the undersigned by the Mikado, the despatch which he now acknowledges and the proceedings already taken against the surviving conspirators have so fully convinced the undersigned of the sincerity with which the Mikado and his Government deplore this outrage that he will not allow it to disturb his friendly relations with the Mikado's Government. After the meeting which he yesterday held with Their Excellencies he is satisfied that the Mikado's Government will not only inflict signal punishment in the present case, but will also provide a remedy for the future by devoting themselves to the speedy improvement of those defects in their administration to which

they themselves refer. Hitherto a hostile party among the samurai of Japan has regarded attacks upon foreigners as deeds of heroism. The Mikado's government are now convinced that it is their duty to stamp murder with infamy. They have undertaken to make it known throughout the empire that the Mikado himself desires to establish relations of friendly intimacy with foreign Powers, and that offences against foreigners being opposed to the best interests of Japan will be visited with His Majesty's high displeasure. A Proclamation to this effect promulgated in the manner agreed to between Their Excellencies and the undersigned cannot fail to produce in the minds of the hostile class that change which is indispensable to the permanence of friendly relations between Japan and foreign powers.

The undersigned is deeply sensible of the offer of the Mikado to provide for any man of the Legation Escort who may sink under their wounds or who may be disabled from further service. This consideration of His Majesty will not fail to be appreciated by Her Majesty the Queen in whose service the wounded men are engaged. If Her Majesty's Government should think it proper to accept this offer when the extent of the injuries inflicted shall have been ascertained, the undersigned will again refer to the subject.

The undersigned cannot close this despatch without bearing testimony to the noble behaviour of Goto Shojiro and Nakai Kozô, the two Japanese officers who were con-

ducting him to the palace when he was attacked.

Regardless of their own safety, and thinking only of the duty with which they were charged, they threw themselves upon the assassins, and killed one of them upon the spot. The undersigned deeply regrets that Nakai Kozô should have received a severe wound in the struggle.

He feels however that no words are required from him to commend to the favourable notice of His Majesty, the Mikado, the services of officers who thus bravely risked their own lives to save the honour of their Sovereign and Country.

HARRY S. PARKES

Their Excellencies

Sanjô Dainagon

Iwakura Uhôyei no kami

Tokudajii Dainagor

Echizen Saisho

(右和譯文)

昨朔日附之御書致披閱候然之一昨晦日拜謁之由め皇宮の罷參途中おる又拙者
に對し暴發有之段

御門政府に聞へし所御痛心さらば趣致承知候條約致取結ひし外國に對し

親穆被盡度思召ヲ以折角

御門陛下より各國公使被御請待相成候へハ本國 皇帝ハ勿論政府ニ於ても日本に對し 御門陛下同様之懇情を抱き且他之大國皇帝を尊崇を以禮儀被御請待を受度罷出候處豈計んや不幸ふし又惡心之者共あり又右 御門之思召被妨奉らんとさしハ元來本國皇帝に對し至極失敬之所業ニ候 御門陛下に對し猶一層之失敬ニ當リ候段閣下達被察自然

御門政府より早速右一件之處置可及筈と信候故閣下達に苦情被申立不致且御門より數度見舞之使者被遣而已からに猶閣下達より御書狀被差越生殘候同類探索等被及候ハ 御門并其政府に於ても眞實ニ如斯暴發有之被痛心被成證據候へと矢張是迄之通御懇親可申と存候且昨日閣下達に面會之御御談じ申候ハ此度之處置ハ勿論閣下達被仰候通是迄政令不行届之處自今政令十分行届るま様盡力に盡し後來右等之處業無之様御處置可有之尤是迄貴國之内外國人被犯候被潔き事と思ふ黨與有之候處最早今日に至るとハ外國人殺害被可恥様ニ至

らされハ職掌不相濟事貴國政府ニ於ても被察猶

御門於ても外國と懇親之交被以多し度候故外國に對し惡業をすものハ日本之國害ニ相成候ニ付萬一右様之所業ニ及候者ハ嚴重ニ罰被可與旨天下中ね布告をへき御約束御坐候右之意被以又御布告ニ相成候半ハ右惡業之者心を改むるハ必然也是又外交永久相續之一端と存候且此公使館護卒之内或ハ死亡し或ハ怪我之療治不行届ふ又其職に離れ候もの有之候ハ、養育料被差出度 御門之御意拙者之勿論定又本國

皇帝陛下於ても満足ニ被思召と存候右之怪我之淺深を吟味し本國政府ニ於ても請取理有之と思ひ拙者の命を下し候半ハ猶可申入候就るを皇宮に參内之爲拙者ニ附添居候後藤象次郎中井弘藏兩人之立派を以所業被不得不述右兩人自己之命を不惜只ハ職掌被盡し度意被以又早速殺害人に打掛り其場より壹人被打取候へとも中井弘藏深手被負し段氣之毒至ニ存候尤拙者之申立を不被待とも日本帝王并國民之名被惜如斯我命被不顧候ものハ自然 御門陛下之寵愛被可蒙筈存候右之段回答如斯御坐候以上

二一〇 明治元年三月三日 (三月二十六日)

四九六

三月二日

ハリエスバルケス

三條 大納言

岩倉右兵衛督

徳大寺大納言

閣下

越前 宰相

二一〇

三月三日

佛蘭西公使ヨリ

(三月二十六日) 外國事務局輔伊達宗城同東久世通禧宛

參内ノ爲滯京中ノ待遇ニ謝意表明ノ件

Excellences,

Avant de quitter Kioto, je tiens à vous exprimer, en mon nom et au nom des Commandants, Officiers et marins qui m'accompagnent, la vive reconnaissance que nous éprouvons tous pour les témoignages de considération et d'amitié que nous avons reçus de

votre part et de la part de tous les fonctionnaires de la Cour de Kioto.

Je vous prie de remettre entre les mains de Son Altesse Yamashinano Miya, la lettre que je Lui adresse à ce sujet.

Je vous serais également reconnaissant de vouloir bien faire parvenir mes cartes de visites aux Daimios chez lesquels je n'ai pu aller moi-même par des motifs que vous m'avez indiqués.

Conservez-moi les bons sentiments que vous m'avez inspirés.

Avec respectueuse considération.

Le Ministre plénipotentiaire de
S. M. l'Empereur
des Français au Japon
LEON ROCHES

Kioto 26 mars 1868.

Leurs Excellences Higasi Kuze Zensho-sho et Wouwadzima Sho-sho,

Ministres des Affaires Etrangères

de Sa Majesté le Mikado du Japon.—

二一〇 明治元年三月三日 (三月二十六日)

四九七

二一 明治元年三月三日(三月二十六日)

四九八

二一 三月三日
(三月二十六日)

英吉利公使參內謁見記

三月三日英國公使ハルリーパークス書記ミットホールド參朝

一 皇帝陛下自カラ勅スル前ノ如シ(編者註二〇五參照)

英公使曰我本國帝王陛下安全也

天皇陛下御尋問ノ件々且御懇親ノ

勅意余欣然トシテ本國政府ニ可奉通達也夫外國交際ノ儀ハ 貴國御政體ノ立ニ隨テ益堅固ナルヘク事ニシテ此節 貴國ニ於テ全國一般ノ御政體ヲ被爲立萬國ノ公法ヲ基根ト被爲遊シ故追々外國交際盛ナルヘキ義必然ト奉存也

皇帝陛下又勅曰去ル三十日貴公使參朝途中不慮之儀出來禮式延引遺憾之至ニ候今日改テ參朝満足ニ存候

英公使曰先日參

内ノ途中暴發ニ出會セシ所今日

天皇陛下ヨリ難有御綸言ヲ蒙リ且其場ニ於テハ

天皇陛下臣人ノ助力ヲ受ケ難有奉感佩尙今日ノ厚キ御待遇ヲ以過日ノ不幸ハ

奉忘除候也

右之通ニテ相濟退出セリ

(太政官日誌)

編者註 三月三日英吉利公使ノ參内ニ關シ記錄中ノ文書ニ參朝式ハ二月三十日之通トノ記載アリ

二二 三月三日 副總裁三條實美等ト佛英、蘭各公使トノ
(三月二十六日) 對話記事

兵庫神戸間居留雜居、新潟開港期限及墨西哥弗銀換算等ノ件

公使(英、蘭、佛、國)復ヒ虎ノ間ニ歸リ以前ノ椅子ニ着ク是日臨期佛蘭兩公使ヲ 召サセラ
ル兩公使 召ニ應シ參 朝共ニ會同實美具視大納言中山忠能實則慶永通禱宗

二二 明治元年三月三日(三月二十六日)

四九九